



* 0054616000 *

0054616-000

757-199

山島民譚集

柳田国男・著

創元社

昭和17

AID

島民譚集

757
199
193

著 男 國 田 柳 .

社 元 創

487

集



版



757
199

小序

横ヤマノ	峯ノタヲリニ	行ク方モ	遙々見ユル
フル里ノ	野邊トホ白ク	里ビトノ	ユキ、ノ榮
ヨコ山ノ	ミチノ阪戸ニ	カツ祈リ	占メテ往キツル
一坪ノ	清キ芝生ヲ	我ハソノ	旅ノ山伏
永キ代ニ	コ、ニ塚アレ	コレノ石塚	
イニシヘノ神	ヨリマシ		
トコナメノ絶	ユル勿レト		
此フミハ	ソノ塚ドコロ		
ネモゴロニ	我勸進ス		
旅ビトヨ	石積ミノヘヨ		

再版序

山島民譚集を珍本と呼ぶことは、著者に於ても異存が無い。それは今から三十年も昔に、たつた五百部を印刷して知友同好に頒つたといふ以上に、この文章が又頗る變つて居るからである。斯んな文章は當世には無論通じないのみならず、明治以前にも決して御手本があつたわけで無い。大げさな名を附けるならば苦悶時代、即ち俗に謂ふ雅文體が段々行き詰まつて、今見る「である文」はまだ思ひ切つて出あるけない一つの過渡期に、何とかして腹一ぱいを書いて見たいといふ念願が、ちやうど是に近い色々の形を以て表示せられたので、言はばその數多い失敗した試みの一例なのである。無論誰一人この文體を採用した者は無いのみか、筆者自らも是を限りにして罷めてしまつたのだが今日となつては歴史的な興味が、他人で無いだけに自分には特に深い。何が暗々裡の感

化を與へて、斯んな奇妙な文章を書かせたかといふことが、先づ第一に考へられるが、久しい昔になるのもう是といふ心當りは無い。たゞほんの片端だけ、故南方熊楠氏の文に近いやうな處のあるのは、あの當時潤達無碍の筆を揮つて居た此人の報告や論文を羨み又感じて讀んで居た名残かとも思ふ。但し南方氏の文は、勿論是よりも遙かに自由で、且つさらさらと讀みやすく出来て居る。私の書いたものが變に理窟つぽく、又隅々の小さな點に、注意を怠らなかつたといふことばかりを氣にして居るのは、多分は吏臭とでも名づくべきものだらう。今はさうとも言へまいが、あの頃はいはゆる御役所の文章が衰頹を極めて居た。讀まずに居られぬから人が讀むといふだけで味も鹽氣も無く又冗漫で措辭の誤りが多かつた。私たちは自身も刀筆の吏でありながら、是が厭でくたまらなかつた。さうして事情の許す限り、努めて毎日の氣持に近い、意見書や復命書を書かうとして居たのである。それは或程度まで成功したかも知れぬが、その應用にはおのづから限度がある。一たび職掌を越えて河童や馬蹄石の問題を取扱はうとすると、日

頃の練習が却つて悪い癖となつて、忽ちお里を顯はしてしまつたのは苦笑の他は無いのである。それからもう一つ、是も氣が咎めるから白狀して置くが、ちやうど此本を書いた頃、私は千代田文庫の番人をして居た。さうして色々の寫本類を、勝手に出し入れをして見ることが出来たのである。斯んなにまで澤山の記録を引用しなくとも、もつと安々と話は出来たのであるが、それが驅け出しの學徒の悲しさであり、又實は内々の味噌でもあつた。御蔭で河童論などは何だか重くるしく、且つ妙に齒切れの悪いものになつて居る。今から考へると決して利益だつたとは言へない。たゞ其爲に愈々世に遠く、珍本と呼べるゝ條件を具へるやうになつたことだけは、筆者の爲にも好い記念ではあつた。

この書に掲げた二つの問題のうち、一方の水の神の童子が妖怪と落ちぶれるに至つた顛末だけは、あゝ後の三十年に相應に論究が進んで居る。最初自分がやゝ臆病に、假定を試みたことが幾分か確かめられ、之れと關聯して又新たななる小發見もあつた。今少し

具體的な結論を下しても、反對をする人はもうあるまいといふまでになつて居る。他の一方の馬の奇跡についても、別な解説を下す人はまだ現はれず、しかも私が引用したのと同じ方向の證據資料が、永い間には次々と集積して、何れも倍以上の數に達して居る。一度はこの本を解きほぐして、書き改めて見ようとしたこともあつたが、其時間も無かつたのみならず、又その必要も無いやうな感がある。その上にこのやゝ奇を好んだ一巻の文は、日本民俗學の爲にもあとの港の燈の影のやうなものである。是をもう一度そつくりと本の形で、世に残して置くことも意味が有るかと思ふ。少し氣になるのは地名稱呼の改廢で、是を今日の行政區劃に引當て、置けば便利だらうと思つたが、もうその中にはわからなくなつて居るものも若干ある。やはり必要の生じた際に、利用者自らが個の土地について、もう一度調べるより他はなからうと思ふ。古い書物に載録せられたものは言ふに及ばず、自分が直接に見たり聞いたりした事實でも、再び尋ねて見るとも、誰も知つて居ないといふ場合は多い。假に多少の改訂増補をして見たところで、到底

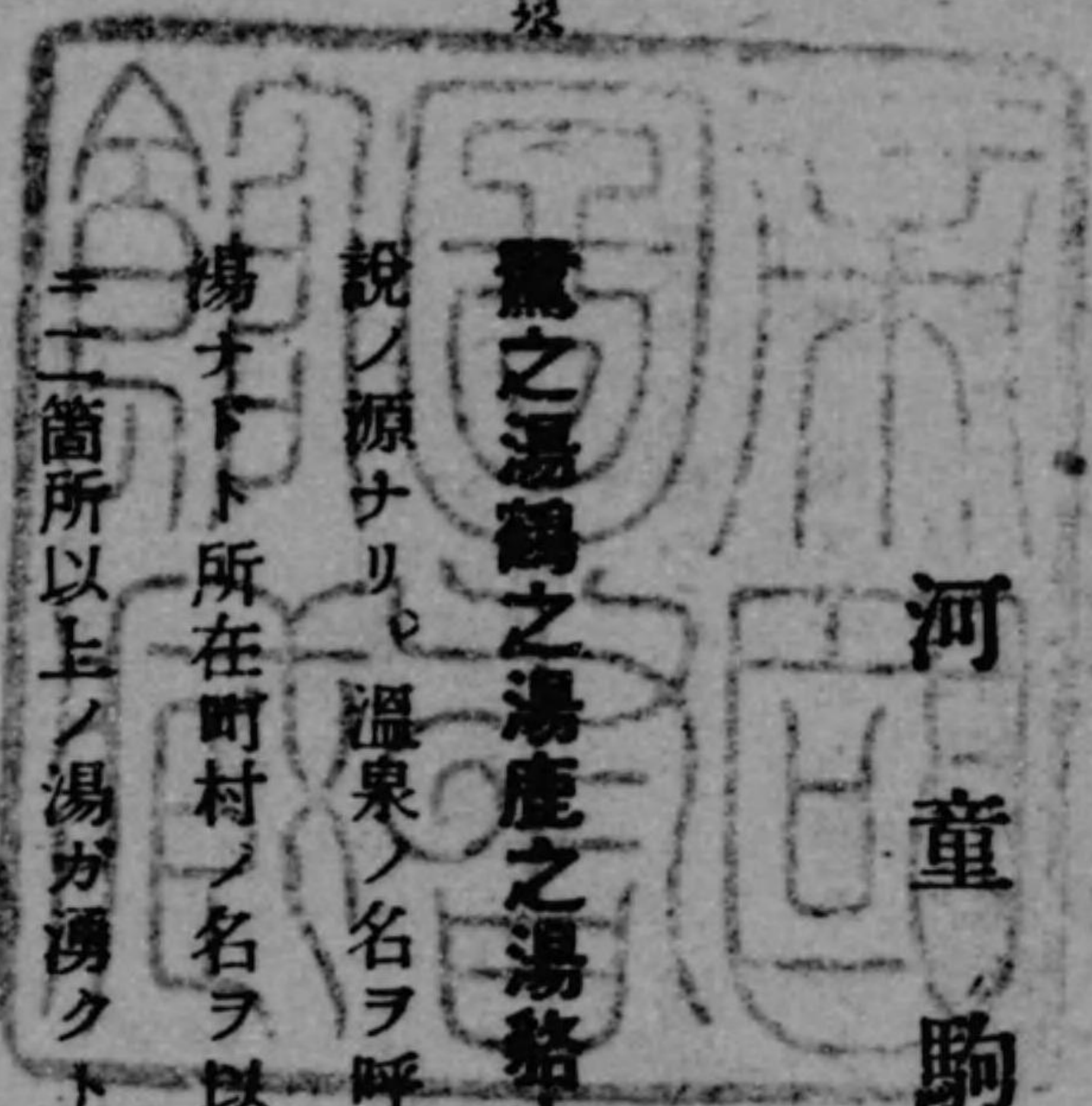
この一巻を現代の書とすることは出来ない。たゞ著者たる自分が後世人の中にまじつて、もう一度三十年後の新たなる批判を聽く機會を得たことを幸ひとするのみである。

昭和十七年七月

柳田國男

山島民譚集

河童駒引



温泉

鷲之湯鶴之湯鹿之湯貉之湯其他

温泉ハ我邦ノ一名物ニシテ兼ネテ又多クノ傳

説ノ源ナリ。温泉ノ名ヲ呼ブニ、都會ノ人又ハ遠方ヨリ往ク人ハ、有馬ノ湯或ハ草津ノ

湯ナドト所在町村ノ名ヲ以テスレドモ、諸國ノ温泉ニハ大抵別ニ其名前アリ。一ノ山村

ニ一箇所以上ノ湯ガ湧クトキ、之ヲ一ノ湯二ノ湯ト謂ヒ元湯新湯ト名ヅケ若シクハ熱湯

温泉ナドト區別スルハ常ノ事ナレドモ、唯一箇所ノ湯ニテモ亦名前アリ。ソレガ又鷲之

湯鹿之湯貉之湯ナドト、動物ノ名ヲ用キシモノノミ多キハ、異國ノ旅人等ニハ定メテ奇

妙ニ感ゼラル、コトナルベシ。

サテ何故ニ諸國ノ温泉ニ鷲鶴鹿ノ類ヲ名乗ル者此ノ如ク多キカ。之ヲ土地ノ人ニ訊ヌ

鷲之湯鶴之湯鹿之湯貉之湯其他

白鷺

ルニ其答モ亦略一樣ナリ。今其二三ノ實例ヲ語ランカ、先ヅ東北ニハ陸奥下北郡川内村
 蠣崎ノ鷺之湯ハ、昔火箭ニ中ツテ脛碎ケタル白鷺アリテ此泉ニ來リ浴シ、日ヲ經ルマ、
 ニ癒エテ飛去リシガ故ニ斯ク名ヅク〔眞澄遊覽記六〕。羽後仙北郡峯吉川村ノ鴻之湯ハ昔鴻
 ノ鳥角鷹ト闘ヒテ脛折レタルヲ此溫泉ニ温メテ之ヲ治セリ〔月之出羽路二〕。羽前西田川郡
 湯田川村湯田川ノ溫泉ハ和銅五年ニ始メテ湧出ス。手負ノ白鷺此湯ニ浸リテ傷平癒シテ
 飛去リシヨリ效驗ヲ知ルコトヲ得タリ。故ニ鷺之湯ト稱ス。同郡温海村温海ノ溫泉ハ大
 同二年ニ白鷺來ツテ之ニ浴シ足ノ痛ヲ癒シテ飛去リシカバ之ヲ鶴之湯ト謂フ。今源助ト
 云フ者ノ家ノ後ニ此湯アリ〔三郡雜記下〕。而シテ右ノ大同二年ト云フハ奥羽ノ傳説ニ於テ
 最モ有名ナル昔ナリ。越前大野郡五箇村上打波字鳩ヶ瀬ノ鳩之湯ト云フ冷泉ハ、毎朝鳩
 ノ來リ浴スルニ心附キテ之ヲ發見シ、同郡小山村深井場ノ炭酸冷泉ノ一ヲ古來鹿井之湯
 ト稱セシハ領主斯波義種獵ニ出デテ手負鹿ノ泉ニ浴スルヲ見出セシニ基クト云フ〔大野郡
 誌〕。但馬ノ城崎ニモ鷺之湯アリ。舒明天皇ノ御時ニ脚ヲ病メル鷺鳥常ニ此處ノ水ニ立ツ

白鷺

鶴

鶴

鳩

鹿

蛇

ヲ怪シミ、其鳥飛去ツテ後其水ニ手ヲ入レテ見ルニ暖カキ靈湯ナリ云々ト語り傳フ〔日本
 轉地療養誌〕。武藏ニテモ多摩川ノ上流ナル小河内ノ溫泉ハ同様ノ理由ヲ以テ之ヲ蛇之湯
 ト名ヅク〔十方菴遊歷雜記初篇上〕。同ジ西多摩郡平井村字鹽澤ニモ寶光寺ノ境内ニ鹿之湯
 ト云フ溫泉アリキ。寺ノ開山文濟禪師ガ天文六年ニ始メテ庵ヲ此山ニ結ビシ頃、朝毎ニ
 足ヲ傷ツケタル一鹿ノ庵ノ前ヲ往復スルヲ見ル。其跡ヲ繋ゲバ麓ノ谷ニ溫泉ノ湧出ツル
 アリ。即チ藥師佛ヲ安置スル外ニ、鹿湯權現ヲ勸請シ來ツテ此地ノ守護神トス〔新編武藏風
 土記稿〕。攝州有馬ノ湯ノ根原ニ就テハ有馬大鑑ニ左ノ如キ説アリ。建久二年二月半、吉
 野ノ僧仁西熊野權現ノ御告ニ由リ此地ニ來リ、御神ノ教ニ任セ蜘蛛ノ引ク絲ヲシルベニ
 山ニ分ケ入リツ、古キ跡ヲ尋ネテ十二坊舎ヲ建ツ云々〔古名錄四〕。此話ハ此山ニ三輪
 明神ヲ祀リシコト、關係アルベシ。美作勝田郡湯之郷村ノ鷺之湯モ、圓仁法師白鷺ニ由
 リテ温湯ノ所在ヲ知ルト、元龜元年ノ藥師堂縁起ニ見ユ〔東作誌〕。豊後北海部郡下北津留
 村藤河内字鷺來ヶ迫ノ炭酸泉ニモ文字ニ因ミテ同種ノ説アリ。昔此山ニ金ヲ採ラントス

鷺之湯之湯鹿之湯其傳

金創

ル者、圖ラズ坑中ニ靈泉ノ迸リ出ヅルヲ見ル。時ニ脚ヲ傷メタル鷺來リテ其泉ニ浸リ忽チ疵癒エテ飛去ル。依ツテ始メテ其驗ヲ知り且ツ其處ヲ鷺來ケ迫ト名ヅクルニ至レリ云云〔豊後温泉誌〕。白鷺鹿ノ輩ハ古來皆靈物ナリ。温泉ノ發見者ガ神主又ハ僧侶ナリシ場合ニ、必ズ其動物ガ土地ノ神佛ノ使者傳令ナリシコトヲ附加スルハ誠ニ當然ノ事ニシテ、是ダケノ偶合ナラバ未ダ怪シムニ足ラズトス。

隠家

今日ノ温泉ハ半ハ避暑地遊覽地也。サホド病人デモ無キ者ガ所謂保養ノ爲ニ出掛ケテ行ク場處トナレリ。然シナガラ二三年前迄ノ湯ノ宿ハ不自由ヲ極メタルモノナリキ。難儀ヲシテ山ノ中へ往ク昔ノ湯治客ハ決シテ今ノ紳士ノ如キ氣樂人ニ非ズ。殊ニハ戰爭頻繁ニシテ外科醫術ノ進歩セザリシ時代ニハ、温泉ハ言ハゞ天然ノ病院ナリ。亂世ハ戰場ニテ命ヲ殞ス者モ勿論今ヨリハ遙カニ多カリシナランガ、一旦助カリタル手負人モ傷養生ハ中々面倒ナリキ。良醫ヲ求メテ其治癒ヲ受クルヨリモ、先ヅ以テ五體ノ利カ又間ハ敵ニ發見セラレヌ爲、靜カニ山中ニ隠レ居ルコトノ必要ナリシハ、全ク右ノ鷺鹿ノ類

ト同ジ。若シ領分内ノ深山ナドニ右ノ如ク金創ニ效アル温泉アレバ、ソレコソ誠ノ天ノ恵ナリシナリ。有馬草津ハ千年來ノ名湯ナレド、其靈驗ノ十分ニ發揮セラレテ終ニ日本ノ一名物トナリシハ、恐クハ亦後世鷺之湯鹿之湯等ノ傳説ガ發生セシ時代、即チ略戰國ノ斬合時代以後ノ事ナルベシ。世中太平ニ及ブト共ニ、箭ノ傷刀ノ創ガ早く平癒スルト云フノミニテハ廣告トナラヌ故ニ、是等ノ話モ少シツツ變形シテ、鳥獸マデガ脚氣血ノ道「リウマチス」ヲ、苦ニシテ居タルガ如ク語り傳ヘザレバ、折角ノ理窟ガ段々不明ニナリ行ク也。

非類靈藥ヲ知ル

鹿狐ノ徒ガ山中ニ於テ手療治ヲ試ミ居タリト云フ口碑ハ、モト

靈泉ノ奇特ガ天然ニ具備スル者ニシテ、自ラ無知ノ鳥獸ヲ感應セシムルニ足り、世ノ常ノ醫藥ノ如ク人間ノ智巧ヲ以テ作り上ゲタル者ニ非ザルコトヲ意味シ、素朴單純ナル前代ノ人ヲシテ容易ニ其有難味ヲ悟ラシムルコトヲ得。始メテ此噂ヲ立テタル人若シ有リトスレバ物ノ分ツタ人ナリ。イヅレ御寺ノ和尚カ何カニテ、カノ行基菩薩弘法大師性空

淺瀬

上人ナドヲ日本國ノ隅々マデモ引張りマハシ、終ニ之ヲ世界ニ稀ナル大旅行家トシタル人々ノ所業ナルカモ知レズ。但シ人間ガ非類ノ物ヨリ生活方法ノ一部ヲ模倣シタリト云フ話ハ外ニモアリ。獨リ驚之湯鹿之湯等ノ由來記ニ限リシコトニハ非ズ、昔ノ日本人ニハ耳馴レタル物語ナリシナリ。例ヘバ下總ノ鴻ノ臺ハ、曾テ小田原北條ノ軍勢攻寄セシ時、搦手ノ備薄キ處ヲ突カント欲シテ川ノ瀬ヲ知ルニ苦シム。時ニ中流ニ鴻ノ立ツヲ見テ漸ク渡ルコトヲ得タルガ故ニ此地名ハ起リシニテ、之ヲ國府臺トスルハ誤ナリト云フ説アリ〔十方菴遊歷雜記初篇上〕。驚ニ就テモ古クヨリ一ノ話ヲ傳フ。丹波國ニ住ム者青鷺ヲ射ル。後ニ家ノ菴菴昌ヲ來テ荒ス者アリ。暗中ニコレヲ射止ムレバ前ニ遁ゲタル鷺ナリ。菴ノ葉其傷ノ矢ノ根ニ卷附キテアリ。矢創ヲ癒ヤサンガ爲ニ菴ヲ摘ミシヲ知り、之ヲ憫ミテ佛門ニ入ル云々〔三國傳記〕。菴ノ金創ニ效アルコトハ兎ニ角動物ヨリ教ヘラレタリト見ユ。下野雀宮スヤマノミヤノ由來ニ、曾テ針ヲ包ミタル饅頭ヲ人ニ欺カレテ丸吞ミニシ大ニ苦シミ居タル男、庭前ノ雀ガ草ヲ口ニシテ弱リタル友雀トモズメニ食ハスヲ見ル。ヤガテ其雀尻ヨリ

菴

雀

無名異

雉

佐渡島

光レル物ヲ出シ元氣快復ス。光ル物ハ針ニシテ草ハ即チ菴ナリ。男モ之ニ習ヒテ菴ヲ食ヒテ針ヲ出シ雀ノ恩ヲ謝シテ神ニ祀ルトアリ〔東國旅行談〕。佐渡ノ島ニハ無名異ト云フ一種ノ鏝物ヲ出ス。今日ハ茶碗ヤ盃ヲ燒ク原料ナレド、本來ハ血止ノ妙藥ナリ。始メテ其效能ヲ知リタルハ、或時網ノ爲ニ足ヲ損ジタル一羽ノ雉、小石ヲ以テ傷所ヲ摩擦シ程無ク飛去ルヲ見テ、其石ノ外科ノ治療ニ用立ツヲ知り得タルナリト云フ。此話ハ支那ノ書ニモ之ヲ掲ゲタレド〔本草綱目〕、佐渡ニテハ此ヲ彼島ノ出來事ナリト傳フ。此島ニハ黄金ヲ産スル故ニ金ノ隣ノ土マデモ何ト無ク價值ヲ認メラル、ニ至リシナラン。雉ハ桃太郎以來ヨク色々ノ援助ヲ與ヘタリ。或人獵ニ出デ如何ニ狙ヒテモ鐵砲ノ中ラヌ雉ヲ見ル。不思議ニ思ヒテ網ヲ以テ之ヲ生捕リ、翼ノ下ヲ檢スレバ小サキ紙アリ。擡シヤコウソウヤカク拾擡揚ノ四字ヲ書ス。即チ仙人道士ノ祕傳タル護身ノ符字ナリ〔難波江六〕。鐵砲ノ玉ヲ除ケテ網ノ厄ヲ免レシムルコト能ハザリシ矛盾ハ、自分ノ説明シ得ザル點ナレド、兎ニ角ニ是ガ百年前ノ稀有ノ出來事ニハ非ズシテ、現ニ日露戰爭ノ際ニモ、右ノ雉ノ守札ヲ身ニ帶ビテ

出陣セシ勇士多カリシコトハ事實ナリ。

河童家傳ノ金創藥

サテ此カラガ本論ナリ。今若シ河童ヲ以テ一種ノ獸類トスルナラバ、正シク前ニ掲ゲシ傳説ノ一例ト見ルベキ昔話アリ。即チ非常ニ效能ノ大ナル金創藥ヲ河童ヨリ傳授セラレタリト云フ多クノ物語是ナリ。自分十二三歳ノ頃世ニ公ニセラレシ書物ニ、石川鴻齋翁ノ夜寤鬼譚ト云フ者アリ。自分ノ耳ヲ悦ベセシ最初ノ話ハ此文集ノ中ニ在リキ。奇拔ナル挿畫アリシ事ヲ記憶ス。袴ヲ著ケタル立派ナル若衆ガ奥方ノ前ニ低頭シテ一本ノ手ヲ頂戴スルノ圖ニシテ、其手ハ恰モ天竺德兵衛ガ蝦蟆ノ手トヨク似タリ。此少年コソハ即チ河童ノ姿ヲ變ヘタル者ニシテ、奥方ノ爲ニ斬取ラレタル自分ノ片手ヲ返却シテ貰フ處ナリ。タシカ九州ハ柳河ノ城下ニ於テ、河童或強勇ナル奥様ニ無禮ヲ働キテ手ヲ斫ラル。泣イテ其罪ヲ謝スルガ故ニ、憐愍ヲ以テ其手ヲ返シ與ヘタルニ、禮物ニ川魚ヲ持參セリト云フ話ナリシカト思フ。此同ジ話ノ異傳カトオボシキモノ、少クモ九州ニ二ツアリ。其一ハ博多細記ニ見ユ。筑前黒田家ノ家臣ニ鷹取運松庵ト

片手

河童ノ手

云フ醫師アリ。妻ハ四代目ノ三宅角助ガ娘、美婦ニシテ膽力アリ。或夜圃ニ入りシニ物蔭ヨリ手ヲ延バシテ惡戯ヲセントスル者アリ。次ノ夜短刀ヲ懷ニシテ行キ矢庭ニ其手ヲ捉ヘテ之ヲ切放シ、主人ニ仔細ヲ告ゲテ之ヲ燈下ニ檢スルニ、長サハ八寸バカリニシテ指ニ水撮アリ、苔ノ如ク毛生ヒテ粘リアルハ、正シク本草綱目ニアル所ノ水虎ノ手ナリト珍重スルコト大方ナラズ。然ルニ其夜モ深更ニ及ビテ、夫婦ガ寢ネタル意ニ近ク來リ、打敷キタル聲ニテ頻ニ訴フル者アリ。私不調法ノ段ハ謝リ入ル、何トゾ其手ヲ御返シ下サレト申ス。河童ナドノ分際ヲ以テ武士ノ妻女ニ慮外スルサヘアルニ、手ヲ返セトハ長袖ト侮リタルカ、成ラヌト追返ス。斯クスルコト三夜ニ及ビ、今ハ絶々ニ泣沈ミテ憫ヲ乞ヒケレバ、汝猶我ヲ騙カサントスルカ、我ハ外治ノ醫家ナルゾ。冷エ切ツタル手足ヲ取戻シテ何ニセント言フゾト罵ル。御疑ハ御尤モナレドモ、人間ノ療治トハ事カハリ、成程手ヲ繼グ法ノ候ナリ。三日ノ内ニ繼ギサヘスレバ、假令前ホドニハ自由ナラズ腕ノ共通トモ、コトノ外残りノ腕ノ力ニナリ候。偏ニ御慈悲ト涙ヲコボス。此時運松庵モ稍合點

鮎

ヒヤウス

シ、然ラバ其藥法ヲ我ニ傳授セヨ、腕ハ返シ與フベシト云ヘバ、河童是非ニ及バズトテ障子越ニ一々藥法ヲ語リテ書留メサセ、片手ヲ貰ヒテ罷リ還リ、更ニ夜明ケテ見レバ大ナル鮎ノマダ生キタルヲ、庭前ノ手洗鉢ノ邊ニサシ置キタリシハ、誠ニ律義ナリケル話ナリ。次ニ笈埃隨筆ノ中ニハ、肥前諫早在ノ兵揃村天滿宮ノ神官澁江久太夫ノ家ノ歴史トシテ此話ヲ傳ヘタリ。事ノ顛末ハ全ク博多ノ鷹取氏ノト同ジク、唯彼ハ醫師ナルニ反シテ此ハ本草ニモ縁ナキ普通ノ神主ナレドモ、利害ノ打算ト外交的手腕トニ於テハ甲乙アルコトナク、有利ナル交換條件ヲ以テ安ヤト河童手繼ノ祕法ヲ聞取り、永ク之ヲ一子相傳ノ家寶トシテ、近國ノ怪我人ニ河童藥ノ恩惠ヲ施シタリト云ヘリ。

澁江氏

右三書ノ傳フル所、果シテ何レヲ眞トスベキカヲ知ラザルモ、要スルニ澁江氏ハ河童ト淺カラザル緣故アリ。肥後ニモ河童ノ退治ヲ職トスル一箇ノ澁江氏アリキ。今ノ菊池神社ノ澁江公木氏ナド或ハ其沿革ヲ承知セラル、ナランカ。但シ自分ノ知ル限りニ於テハ、肥前ニハ兵揃ト云フ村ノ名無シ。恐クハ亦傳聞ノ誤ナラン。九州ノ南半ニ於テハ河

水神

菅公

童ノ別名ヲ水神ト謂ヒ或ハ又「ヒヤウスヘ」ト謂フ「サヘツリ草」。狩野探幽ノ筆ト稱スル百化物ノ畫卷ノ中ニモ、「ヒヤウスヘ」ト云フ物アリ。太宰府天滿宮ノ末社ノ一ニ、「ヒヤウスヘ」ノ宮アリ。此ハ俗ニ謂フ河太郎ノコトナリト稱ス「南蘭草下」。昔菅公ガ筑紫ノ配處ニテ詠マレタリト云フ歌ニ

イニシヘノ約束セシヲ忘ルナヨ川立チ男氏ハ菅原

ト云フ一首アリ「和漢三才圖會四十」。此歌ハ僅ナル變更ヲ以テ又左ノ如クモ傳ヘラル「同上八十」。

ヒヤウスヘニ約束セシヲ忘ルナヨ川立チ男我モ菅原

之ヲ以テ觀レバ、「ヒヤウスヘ」ハ本來河童ノコトニハ非ズシテ、化物退治ヲ以テ専門トシタル神ナリシカト思ヘル。諫早附近ノ澁江氏ガ同ジク天滿宮ノ祠官ナリシコト、及ビ一説ニハ長崎ノ邊ニ住スル澁江文太夫ナル者、能ク水虎ヲ治シ護符ヲ出ス、河ヲ渉ル者之ヲ携ヘ行ケバ害ナシト云ヒ、或ハ若者等海ニ小石ヲ投ジテ戯トセシヲ怒リ、河童此澁

守札

江氏ニ托シテ其憤ヲ述ベタリト云フコトヲモ考フレバ(同上)、村ノ名ヲ兵揃ト誤リ傳ヘタル仔細ハ必ズシモ想像ニ難カラズ。而シテ右ノ一首ハ、此男ハ菅原氏ノ一族ノ者ナレバ川ニ立チテモ害ヲ加フルコトナカレ、以前「ヒヤウスヘ」神ト結ビタル約束ヲ嚴守セヨト云フツモリニテ、拙^{ツツ}キナガラニヨク要領ヲ得、河童研究上有力ナル一史料ナリ。

併シ何レニシテモ右ノ河童藥ノ話ニハ少カラズ御伽噺の分子ヲ含メリ。如何ニ妙藥ナレバトテ切ラレシ手ノ繼ガルベキ道理アルコトナシ。但シ靈藥ノ靈藥タル所以トシテ、最初ノ程ハ先ヅソレ位奇妙ナル效能アリシモノトシテ置クナリ。然ルニ此ノ如キ奇談モ九州以外ニヤハリ多クノ類例アリ。何事ニヨラズ天下一品ト云フ物ハ此世ニ無シト言ヒテ可ナリ。試ミニ其一二例ヲ掲グレバ、甲斐北巨麻郡^{シモデ}下條村ニ昔ハ下條ノ切疵藥トテ有名ナル妙藥アリ。此モ釜無川ノ河童ノ傳授ナリト稱ス。農夫アリ、或年ノ冬新ヲ馬ニ附ケテ甲府ノ町ヘ賣リニ行キシ歸リニ、此川ノ川原ニシテ日暮レ雲降り來ル。其時曳キタル馬ノ少シモ動カザルヲ怪シミテ振返リ見レバ、十二三歳ノ男ノ兒ガ馬ノ尾筒ニ繼

馬

馬洗

リ居ル。如何ニ叱リテモ手ヲ放サズ、アマリ憎ラシケレバ年甲斐モ無ク少々腹ヲ立テ、腰差ノ刀ヲ抜キテ切拂フ眞似ヲシタルニ始メテ遁ゲ去レリ。然ルニ其夜宅ニ歸リテ馬ヲ洗ハントスルニ、尻尾ノ根モトニ猿ノ手ノ如キ物一ツブラ下リテアリ。不思議ニ思ヒツツモ之ヲ藏ヒ置クニ、其夜中ニ戸ノ外ニ來テ小兒ノ如キ聲ニテサモ悲シゲニ且那々ト呼ブ者アリ。私ハ河童デアリマス、ドウゾアノ手ヲ返シテ下サレト言ヒ、且ツ切ラレテ萎ビタル手足ニテモ、元ノ通りニ繼ギ得ルコトヲ告ゲタリ。此河童モ性來好人物ノ河童ナリト思シク、主人ノ掛引ニ逢ヒテハタト當惑ハシタルモ、元々自分ノ方ガ理窟モ悪ク且ツ弱味モアルコト故、終ニ其祕法ヲ傳授シテ腕ト交換シテ去リシノミナラス、翌朝ハ別ニ澤山ノ鯉鮒ナドヲ戸口ノ鹽ノ中ニ入レテ行キタリ。主人ハ慨然トシテ曰ク、我豈^ア獸類ヲシテ其食ヲ分クシメンヤト、悉ク魚ヲ川ニ放ス。而モ一包二十四文ノ切疵藥ノミハ河童ノ餘徳トシテ盛ニ賣レタルガ故ニ、結句一郷ノ分限者ト成リスマシ、更ニ又河童退治ノ高名ハ國中ニ響キ渡リシ次第ナリ(裏見寒話六)。常陸^{ナメカク}行方郡^{アハ}現原村大字芹澤ト大字捻^ネ

橋ノ佐

木トノ間ヲ流ル、手奪川テハヒハ梶無川ノ上流ナリ。橋アリ手奪橋ト云フ。寛正六年夏ノ頃芹澤俊軒ト云フ人此邊ヲ逍遙シ、日暮レテ此橋ヲ過ギテ歸ラントスルニ馬前スマズ。怪シミテ後ヲ顧ミレバ怪物アリテ馬ノ尾ヲ捉フルヲ見ル。乃チ刀ヲ拔キテ其腕ヲ斫リ之ヲ携ヘ還ル。然レドモ其何物タルヲ知ラズ。其夜俊軒ガ寢所ニ入り來リ拜伏シテ訴フル者アリ。吾ハ前川ニ住メル河童ナリ。公ノ爲ニ一手ヲ斬ラル。願ハクハ腕ヲ返セ、吾ニ金創接骨ノ妙藥アリ、幸ニ以テ我腕ヲ接ギ且ツ奇方ヲ君ニ傳ヘテ謝意ヲ表セント言フ。俊軒愍然トシテ腕ヲ返ス。河童大ニ悦ビテ其秘傳ヲ授ケ且ツ曰ク、爾後日々魚ヲ獻ゼン。若シ魚ヲ獻ゼザルニ至ラバ吾命ノ終レルヲ知リタマヘ云々。明日果シテ魚一雙ヲ庭上ノ梅ノ枝ニ懸ケ、久シキヲ經テ斷絶スルコト無シ。數年ノ後一日魚ヲ見ズ。仍テ下男ヲシテ前川ヲ搜ラシムルニ、河童果シテ死シ其屍ハ逆流シテ今ノ東茨城郡橋村與澤ノ地ニ止マル。乃チ其地ニ葬リ祠ヲ建テ、手接明神ト謂フ。水旱疾疫ニ際シ之ニ禱ルニ驗アリ。手奪川ノ名ハ此ニ起リ、芹澤氏金創藥家傳ノ妙方亦之ヲ祖トス。今遠孫芹澤潔ト云フ人此地ニ

逆流

手接

住シテ尙接骨ノ藥ヲ販ギツ、アリ〔茨城名勝誌〕。

以上數箇所ノ接骨藥ハ本來其家ノ總領ト河童トノ外ニハ誰知ル者無キ秘密ナルベキ管ナルニ、ボツ／＼ト其噂ノ世ニ傳ハリタルハ此モ亦不思議ナリ。下條ノ切疵藥ハ田野ニ生ズル所ノ蔓草ヲ以テ藥種トス。油類麵類ト差合アリト云フ迄ハ兎ニ角、魚類ヲ食フベカラズトアルハ河童ノ藥トシテハ少シク平仄ノ合ハヌ話也。日向國高鍋ノ庄左衛門ナル者、曾テ河童ト闘ヒテ其一腕ヲ斬取リテ歸ル。河童哀求シテ其腕ヲ乞ヒ、此モ手繼ノ秘法ヲ祕シ去ルコト能ハズ、命ノマ、ニ藥物ヲ臚列シテ見セタリ。然ルニ腕ヲ取返シ欣ビテ門ヲ出デ願ミテ言フニハ、吾詳カニ藥劑ヲ述ベタレドモワザト其一ヲ闕キタリト、終ニ水ニ没シテ又追フベカラズ。庄左衛門藥ハ後盛ニ世ニ行ハレ、用キテ金創打撲ニ傳クレバ神效アレドモ、全ク切レタル手足ノミハ繼ギ兼ヌルハ其一味ノ不足スル爲ト云フ〔水虎録話〕。虚誕ヲ吐クホドナラバ丸々無用ノ草ヲ指示シテ可ナリ。半分約ヲ守ルト云フモ如何ナリ。博多ノ河童ハ鷹取氏ニ向ヒテ、イヤ僞ハ人間ノ器量ニコソアレ、化物ノ心ハ

河童藥法

只一筋ニ行クモノニテ、命ヲ助ケラレ手ヲ求ムル間ハ、中々人ヲ欺クベキ餘裕大シト言ヘリ。次ノ話ヲ考ヘ合ストキハ、此方ガ尤モラシク聞ユルナリ。河童ノ藥ト云フモノハ東ハ出羽ノ果ニモアリ。羽後平鹿郡榮村大屋寺内ノ某氏ニ於テ製スル河童相傳ト云フ接骨藥ハ、黒燒ニシテ飲藥トシ又傳藥トス。此藥ヲ賣ル者秋田市ニモ能代町ニモ住シ、通名ヲ又市ト云ヘリ。同ジク平鹿郡ノ横手給人町須田



リヨ七卷説圖本草 ハカミシイ・歸板扛

河童草

源六郎家傳ノ正骨藥、仙北郡長信田村川口ノ鷹嘴タカノハシ太右衛門ガ製スル飛龍散モ共ニ亦河童ノ相傳ニシテ、其家ハ兼ネテ骨接醫者ヲ業トセリ。此類ノ祕藥ニシテ河童ガ人間ヨリ夙ク知り居タリト云フモノハ外ニモ多ク、何レモ其主劑ハ漢名ヲ扛板歸コウバンキ、和名ヲ「イシミカハ」一名「カツバサウ」、又ハ「カツバノシリヌグヒ」ナドト稱スル植物ナリ（雪之出羽路十二。中陵漫錄卷十三ニ曰ク、萬病回春ニ扛板歸アリ。和名「イシミカハ」ト云フ草ニ當ツ。今時藥肆ニモ此草ヲ賣ル。能ク折傷打傷ヲ治スルコト妙ナリト云フ。按ズルニ日向國ヨリ出ル河童相傳正左衛門藥ト云フアリ。能ク骨ヲ接ギ死肉ヲ活カス妙藥ナリ。昔日向ニ古池アリ。毎歲河童ノ爲ニ人命ヲ失フ。或人薄暮此池ノ邊ヲ過グ。河童手ヲ出シテ足踵ヲ引ク。此人鎌ヲ以テ河童ノ手ヲ切り取りテ歸リ、梁下ニ釣リ置ク。是ヨリ毎夜來リテ板戸ヲ扣イテ其手ヲ乞フ。其人夫ニ罵リテ追ヒ散ラス。凡ソ來ルコト一七夜、此人河童ニ謂ツテ曰ク、此手乾枯シテ用ニ立ツコト無シト云ヘバ、河童對ヘテ曰ク、我ニ妙藥アリ之ヲ以テ活カスト。此人戸ヲ開キテ其手ヲ投ジ去ル。此夜ノ中ニ一草ヲ持テ來

池 錄

リ置ク。考フルニ妙薬ト言ヒシハ此草ナルベシトテ、乾カシ置キテ金創及ビ打傷ノ人ニ施スニ甚ダ妙ナリ。之ニヨリテ毎歲採リテ打傷ノ薬トス。甚ダ流行スルニ至ツテ近隣ノ人々此草ヲ知ラントスルヲ恐レ今ハ黒霜トス。按ズルニ毎夜來リテ板ヲ扛キテ歸ルト云フ、回春ニ扛板歸トアルト暗ニ相合ス云々(以上)。併シナガラ扛ハ擧グル也、叩クコトニハ非ズ。此漢名ノ起原ハ、怪我人ガ即坐ニ本復シテ、歸ル時ニハ又板ヲ擔ギテ行カルルト云フ迄ノ意味ニテ、右ノ河童ノ因縁ニ結ビ附クルコトハ些シク難儀ナリ。但シ或地方ニテ之ヲ「河童ノ尻拭ヒ」と呼ブハ、此草ガ水畔ニ生ジ莖ニ刺アリテ河童ノ滑ラカナル肌膚ヲモ擦リ得レバナランカ(南方熊楠氏説)。

羅城門

肥前ト甲斐常陸トノ河童談ヲ比較シテ最初ニ注意シ置クベキコトハ、後者ニハ馬ト云フ第三ノ役者ノ加ハリテアルコト也。但シ釜無川ノ川原、又ハ手奪川ノ橋ノ上ニ在リテハ、馬ハマダ單純ナル「ツレ」ノ役ヲ勤ムルニ過ギザレドモ、追々研究ノ歩ヲ進メ行クトキハ、此系統ノ物語ニ於テハ、馬ガ極メテ重要ナル「ワキ」ノ役ヲ勤ムベキモ

馬

伯母

鬼

ノナルコトヲ知ル。ソレニハ先ヅ順序トシテ羅城門ノ昔話ヲ想ヒ起ス必要アリ。昔々源氏ノ大將軍攝津守殿頼光ノ家人ニ、渡邊綱通稱ヲ箕田源二ト云フ勇士アリ。武藏ノ國ヨリ出タル人ナリ。或夜主人ニ命ゼラレテ羅城門ニ赴キ、鬼ト闘ヒテ其片腕ヲ切取リテ歸リ來ル。其腕ヲ大事ニ保存シ置キタルニ、前持主ノ鬼ハ攝津ノ田舎ニ住ム綱ノ伯母ニ化ケテ訪問シ來リ、見セスト云フ腕ヲ強ヒテ出サシメ之ヲ奪ヒ還シテ去ル。事ハ既ニ赤本乃至ハ風ノ繪ニ詳カナリ。羅城門ニハ古クヨリ樓上ニ住ム鬼アリテ悪キ事バカリヲ爲シ居タリシガ、一旦其毛ダラケノ腕ヲ箕田源二ニ切ラレシ頃ヨリ、頓ニ其勢力ヲ失ヒシガ如クナレバ、多分ハ夫ト同ジ鬼ナランカ。而シテ其取戻シタル腕ハ歸リテ後之ヲ接ギ合セタリヤ否ヤ、後日譚ハ此世ニ傳ハラズト雖、鬼ニモ角ニモ近代ノ河童冒險談ト頗ル手筋ノ相似タルモノアルハ争フベカラズ。羅城門及ビ腕切丸ノ寶劍ノ話ハ、予ノ如キハ四歳ノ時ヨリ之ヲ知レリ。頼光サント太閤サント同ジ人カト思ヒシ頃ヨリ之ヲ聞キ居タリ。全國ニ於テ之ヲ知ラヌ者ハアルマジト思ヘリ。然ルニ、海ヲ越エテ佐渡島ニ行ケバ、

此話へ忽ち變ジテ駄栗毛左京ノ武勇談トナリテ傳ヘラル。左京へ佐渡ノ本間殿ノ臣下ナリ。或年八月十三日ノ夜、河原田ノ館ヨリノ歸リニ、諏訪大明神ノ社ノ傍ヲ通ルトキ俄ノ雨風ニ遭フ。乘リタル馬ノ些シモ進マザルニ不審シテ後ノ方ヲ見レバ、雨雲ノ中カラ熊ノ如キ毛ノ腕ヲ延バシテ馬ノ尾ヲ掴ム者アリ。大刀ヲ拔キテ之ヲ斬拂ヘバ鬼女ノ形ヲ現ジテ遁レ行キ、其跡ニ一本ノ逞シキ腕ヲ落シテ在リ。之ヲ拾ヒテ我家ニ藏シ置キタルニ、其後毎晩ノヤウニ彼ノ處ニ來テ戸ヲ叩キ哀願スル者アリ。九月モ中旬ニ及ビテ終ニ對面ヲ承諾シタル處、這奴ハ又化ケズトモ既ニ本物ノ老婆ナリキ。羅城門ノ鬼ノ如ク詐欺拐帶ヲモセズ、又何等ノ禮物ヲモ進上セザリシ代リニハ、散々ニ油ヲ取ラレテ閉口シ、悉ク其身上ヲ白狀シタル後、イト、萎ビタル右ノ古腕ヲ貰ヒ受ケテ歸リタリ。彼女ノ言ニ依レバ、以前ハ越後國彌彦山附近ノ農夫彌三郎ナル者ノ母ナリ。惡念增長シテ生キナガラ鬼女トナリシ者ナルガ、駄栗毛氏トノ固キ約束モアリテ、再ビ此島ニハ渡ラヌ等ニテ國元ヘ還リ、後ニ名僧ノ教化ヲ受ケテ神様トナル。今ノ彌彦山ノ妙虎天ト云フ祠ハコ

老女

妙虎天

ノ彌三郎ガ老母ナリ〔佐渡風土記〕。越後方面ニ傳ヘタル噂ニ依レバ、神ノ名ハ妙多羅天トアリ。岩瀬ノ聖了寺ノ眞言法印之ヲ濟度シ、今ハ柔和ナル老女ノ木像ト成ツテ阿彌陀堂ノ本尊ノ脇ニ安置セラル。但シ話ノ少シク相違スルハ、腕ハ我子ノ爲ニ斬ラレタリト云フコト也。越後三島郡中島村ニ彌三郎屋敷ト云フ故迹アリ。鬼女ハ此地ノ出身ナリト云フ。彌三郎或夜鴨網ニ出掛ケテ鳥ヲ待チ居タルニ、不意ニ空中ヨリ彼ノ頭ノ毛ヲ掴ム者アリ。持ツタル鎌ヲ振ヒテ其腕ヲ斬取り家ニ歸リシガ、母親ハ腹ガ痛ムト言ヒテ納戸ニ

姥神脇侍

錄

臥シ起キ出デズ。翌朝戸ノ外ヲ見レバ鮮血滴リテ母ノ窻ニ入レリ。老婆ハ片腕無キ爲ニ鬼女ナルコト露顯シ、終ニ家ヲ飛出シテ公然ト惡行ヲ營ムコト、ナリタリト云フ〔越後名寄四〕。此話ニハ言フ迄モ無ク前型アリ。今昔物語ノ中ニモ之ト似タル鬼婆ノ腕ノ話アリテ、悴ガ「スハ此カ」ト切りタル片腕ヲ母ノ寢處ニ擲ゲ込ミタリトアル話ナリ。而モ彌三郎婆ノ話ハ越後ニハ甚ダ多シ。刈羽郡中鯖石村大字善根ニテハ、狼ニ成ツテ漆山ト云フ處ニテ人ヲ食ヒ、後ニ我子ノ爲ニ退治セラレテ八石山ニ入ルト傳フ。赤キ日傘ニ赤キ法

狼

衣ノ和尚ガ葬式ニ立ツトキハ、サテノ有難イトムラヒチヤト云ヒテ棺ヲ奪ヒ中ノ屍骸ヲ食フ故ニ、飛岡ノ淨廣寺ノ上人ノ代ヨリ青キ日傘ニ青キ法衣ト改メタリ〔日本傳説集〕。或ハ又妙太郎婆ノ話トナリテモ傳ヘラル。妙虎妙多羅妙太郎ノ名ノ由來ハ未ダ之ヲ明カニスルコト能ヘズ。從ツテ鬼カ火車カ、本體ヲ究ムルコト難ケレドモ、狼ノ老女トナル話ハ古クシテ且ツ弘シ〔郷土研究一ノ十二〕。越中婦負郡櫻谷村大字駒見ノ古傳ニ依レバ、昔此里ニ「ユウユウ」ト云フ老尼アリ。夜ハ犬トナリテ様々ノ妖怪ヲ爲シケルガ、或時山伏ニ足ヲ斫ラレ、ソレヨリ此里ニ住マズ。其後三年ホド經テ射水郡ノ荒山ト云フ所ヨリ駒見ノ八右衛門ナル者ノ家ヘ書面ヲオコセタリ。犬ノ手跡トテ、人皆之ヲ見タリト云フ〔越中舊事記〕。然ルニ此話ニハ又一異傳アリ。此ヨリモ時代稍古ク且ツ土地ノ人ノ手ニ成リシ著書ニハ、之ヲ狼ナリト云ヘリ。昔駒見村ノ「ヨウユウ」ナル者ノ家ニ年久シク召使ヒシ姥ハ、狼ノ化ケテ人トナリシ者ナリキ。或山伏夜更ケテ吳服山ノ古阪ヲ通りシニ、狼群レ來ツテ附纏フ。山伏怖レテ喬木ニ攀上リケレバ、狼アマタ打重リ其上ニ姥跨ガリ

火車

犬
山伏

手紙

片腕

テ彼ヲ引下サントス。山伏短刀ヲ拔キ其姥ノ肘ヲ打落セバ、下ノ狼モ散々ニナリテ遁去リタリ。夜明ケテ山伏樹ヨリ降り、駒見村ヲ見掛ケテ暫ク憩ハント、カノ「ヨウユウ」ガ家ニ立寄りシニ、姥ハ傷痛ミテ叫キ號ビ打臥シ居タリシ處ニテ、山伏ノ姿ヲ見ルヤ否、逃出シソレヨリ行方ヲ知ラズ。此事御郡ノ舊記ニ出デタリトアリ〔青楓泉邊錄十五〕。サレバカノ八犬傳ノ赤岩一角ノ如キモ、不運ナル化物ニハ相違ナキモ、其決シテ天下唯一ノ例ニ非ザリシコトハ、此等ノ話ニ由リテ十分ニ明白ニテアルナリ。

赤岩一角

右ノ駄栗毛左京ノ話ハ、妻鹿孫三郎ノ話又ハ大森彦七ノ話ナドト同様ニ、勿論羅城門或ハ一條戻橋ノ怪談ノ一變形ナルベキモ、二箇ノ極メテ肝要ナル點ニ於テ、甲州下條及ビ常州芹澤ノ河童ノ話ト相接近シ、二種類ノ昔話ノ中間ニ立ツ者トシテ大ナル價值アリ。其二點ト言フハ、一ハ鬼ガ馬ニ向ツテ惡戯ヲ試ミ失敗シタルコトナリ。二ニハ閉口謝罪ノ後腕ノ平穩ナル還付ヲ受ケテ退散シタルコトナリ。此二點ハ共ニ羅城門系統ノ話

化物謝罪

鬼

ニハ見ル所ナクシテ、多數ノ河童談ニハ皆之ヲ具フ。但シ河童ト鬼トハ如何ニモ縁遠キ

ノミナラズ、此等ノ話ニ在リテハ、馬ハ未ダ重大ナラザル一端役ヲ勤ムルニ過ギズ。猶追々ト話ノ筋ノ進ムニ從ヒテ、始メテ其關係ノ偶然ニ非ザルヲ知り得ルナリ。

馬ニ惡戯シテ失敗シタル河童

明治四十三年ニ出版セシ遠野物語ノ中ニ左ノ如

姪子

キ一話アリ。陸中遠野ノ町ニ近キ小島瀨川ノ姥子淵ノ邊ニ新屋ノ家ト云フ家アリ。或日

既

馬ヲ淵ヘ冷シニ行キ馬曳ノ兒ハ外ヘ遊ビニ行キテアリシ間ニ、河童川ヨリ出デテ其馬ヲ引込マントシ、却ツテ馬ニ引キズラレテ家ノ既ノ前ニ來リ馬槽ニ覆ハレテアリキ。家ノ

者馬槽ノ伏セテアルヲ怪シミ、些シク之ヲモタゲ見ルニ河童ノ手見エタリ。村中ノ者寄集マリ殺サンカ宥サンカト評議セシガ、結局今後ハ村ノ馬ニ惡戯ヲセヌト云フ堅キ約束ヲサセテ之ヲ放シタリ。其河童今ハ村ヲ去リテ相澤ノ瀧壺ニ行キテ住メリ(以上)。此話ノ中ニテ新シキ部分ハ河童ノ引キタルハ馬ノ尻尾ニ非ズシテ口綱ナリシコト、及ビ途中ニテ手ヲ切ラレシ代リニ既ノ戸口ニ於テ不覺ノ生恥ヲ晒セシコトナリ。此類ノ話ハ諸國ノ村里ニ何程モ傳ヘリ、而モ何レノ村ニ於テモ皆之ヲ我處ノ歴史ナリト信ジ居リ、偶、同

口碑ノ争

ジ傳説ノ他地方ニ存スルヲ聞ケバ、互ニソレハ我村ノヲ持去リシナラント言フ。多クノ中ニハ旅人ナドガ他國ニテ聞キ歸リテ話シタルヲ、子孫ノ者之ヲ村内某地ノ出來事ナリト誤リタルモ無シトハ言ヒ難ケレド、元來此傳説ノ如キハ實ハ夙クヨリ全國ノ共有物タリシナリ。仍テ茲ニハ如何ナル程度ニマデ此話ノ分布シテアルカヲ明白ニセント欲ス。

山伏

先ヅ舊日本ノ北端ヨリ始ムベシ。羽後仙北郡神宮寺町ノ花藏院神宮密寺ハ八幡宮ノ別當寺ナリ。京ヨリ快絲法印一名ヲ咽法印ト云フ山伏下リテ此寺ニ住ム。或時河童ヲ生捕ニシテ嚴シク之ヲ戒メシニ、手ヲ合セ涙ヲ流シテ詫ラスル故ニ放シ遣ル。其德ニ因ツテ以來此一郷ニハ決シテ河童ノ災ナシ(月乃出羽路六)。此話ニハ馬ハ出デ來ラズ、又何故ニ捕ヘ且ツ戒メラレタルカハ舊記ニハ見エズ。岩代河沼郡ノ繩澤ハ不動川ノ岸ニ在ル村ナリ。昔喜四郎ト云フ農夫、此川ノ盲淵ト云フ處ニ於テ馬ヲ引込マントシタル河童ヲ捕ヘシガ、他日再ビ惡戯ヲセザルコトヲ誓ハシメテ一命ヲ宥シ放シタリ。ソレヨリ後ハ村ニ水ノ災ニ死ヌ者一人モ無シト云フ(新編會津風土記)。此邊ニテハ人ノ水ニ死ヌヲ悉ク河童

水死

野飼

ノ所業ト考ヘタリシガ如シ。越後三島郡桐島村大字島崎ノ農家ニテ、馬ヲ野ニ放シ置キタルニ、例ナラズ馳セ還リテ既ニ飛込ミ大ニ嘶キケレバ、家ノ者怪シミテ近ヨリ見ルニ、馬槽伏セアリテ口取綱ノ端ヲ其下ヘ引入レタリ。馬槽ヲ引起セバ河童アリ、馬ノ綱ヲ身ニ卷附ケテ小サクナリテ居ル。村ニ桑原嘉右衛門ト云フ剛膽ナル男アリ、之ヲ引捉ヘテ

桑原

直ニ其腕ヲ抜ク。河童悲シミテ曰ク、命ヲ助ケ腕ヲ返シ給ヘルナラバ、今後ハ永ク此里ノ人ヲ取り申スマジキ上ニ、血止骨接ノ妙術ヲ御傳ヘ申サント。因ツテ其願ニ任セテ抜キタル腕ヲ返却シ、桑原ハ勇氣ノ獲物トシテ件ノ妙術ヲ以テ代々ノ家ノ寶ト爲スコトヲ得タリ。此ハ藥劑ニハ非ズ、何カ雙六石ノ如キ七八分ノ一物ナリ。金創ノ血ガ止ラズ百

如意石

計盡キタル際ニ桑原ヲ招ケバ、彼ノ物ヲ懷中シ來リテ席ニ著クヤ否ヤ血ノ出ヅルコトヲ止ム。多クノ場合ニハ取出シテ示スニモ及バヌ位ナレバ、從ツテ現物ヲ見タリト云フ人モ無シ。此村ノ者ガ其後決シテ河童ニ取ラレザリシハ勿論ノコト也〔越後名寄三十一〕。信濃上伊那郡ノ天龍川端ニ羽場ト云フ村アリキ。今ノ何村ノ中ナルカ知ラズ。「ハバト」ハ

川ノ岸ノ如キ傾斜地ヲ意味スル地名ナリ。天正ノ頃此村ニ柴河内ト稱スル地侍住居ス。或時此家祕藏ノ名馬ニ害ヲ加ヘントシタル不心得ノ河童アリ。此モ結局失敗ニ終リ大ニ

名馬

池

詫言シテ他所ニ立退キタリト云フ〔小平物語〕。飛驒大野郡清見村大字池本ノ農家ニテ、或日今ノ鬼淵ト云フ處ノ邊ニ馬ヲ繫ギ置キシニ、暫クシテ其馬一散ニ走リテ家ニ歸ル。何

河童赤シ

故ゾト見レバ馬ノ綱ノ先ニ身體赤キ異様ノ物、腰ニ其綱ヲ卷附ケタルマ、引カレ來ル。

ガオロ

大ニ驚キテ之ヲ捉ヘ何物ゾト問ヘバ、我ハ「ガオロ」ト云フ物ナリ。馬ヲ捕ヘントシテ却

鐵器ノ忌

リテ捕ヘラル。速カニ助ケタマヘ、助ケ給ヘ、其禮トシテ毎朝川魚ヲ持來ルベシ。但シ

鎌

其處ニ双物ヲ置キ給ヘ、我來ルコト能ハズト云フ。此約束ニテ之ヲ赦シテ後、毎朝川魚ノ貢絶ユルコトナカリシガ、或時農夫誤リテ鎌ヲ其處ニ置キケレバソレヨリ其事止ミタリ。其「ガオロ」ノ住ミシ所ヲ鬼淵ト名ヅケ今モ金屬ヲ忌ムト云フ〔日本宗敎風俗志補遺〕。

鬼

「ガオロ」ハ河童ノ事ナルニ、此ニテハ之ヲ鬼ト恐レシガ如シ。少々ノ魚ヲ貰フヨリハ寧ろ双物ヲ置クヲ以テ安全ナリト考ヘシ者アリシヤモ測ラレズ。美濃惠那郡付知町ノ豪農

葦毛馬

田口氏ノ祖先ハ遠山玄蕃ト云フ武士ナリ。曾テ飼フ所ノ葦毛ノ駒ヲ、夏ノ日川ノ淵ノ邊ニ放シ置キシニ、俄ニ走りテ既ニ歸リ入ル。下人等出デテ見レバ、一人ノ小兒其馬ノ側ニ踞リ居タリ。ヨク見レバ則チ河童ナリ。水中ヨリ手ヲ延バシテ馬ノ足ヲ掴ミシニ、馬驚キテ一目散ニ馳セ歸リ之ニ引摺ラレシモノト見エタリ。下人等ノ打殺サント云フヲ制止シ、他日重ネテ人畜ヲ害セザルコトヲ約セシメテ玄蕃之ヲ宥ス。其淵ノ名ヲソレヨリ馳馬淵ト云フ。葦毛ノ馬ガ高名シタル場處ナレバ其名譽ヲ表彰スル爲ノ地名カト思ヘル〔濃陽志略〕。口綱ナラバ兎ニ角、馬ノ脚ナラバ直ニ手ヲ放セバ可ナランニ、思ヘバ不細工ナル河童ナリ。シカシ此モ足ハ誤傳ニシテ、他ノ多クノ例ト共ニ手綱ノ端ヲ以テ自縛セシモノカモ知レズ。

和尚慈悲

東京近傍ニ於テハ武藏北足立郡志木町、舊稱ヲ館村ト稱スル地ニ於テ、引又川ノ河童寶幢院ノ飼馬ヲ引カントシテ失敗ス。馬ノ綱ニ搦メラレテ既ノ隅ニ倒レ馬ニ蹴ラレテ居リ、和尚ノ顔ヲ見テ手ヲ合ハス故ニ、同ジ誓言ヲサセテ後之ヲ宥ス。此河童モ甲斐飛騨

其他ノ同類ノ如ク、翌日ノ夜明ニ大ナル鮒ヲ二枚和尚ノ枕元ニ持來リ、當座ノ謝意ヲ表シタリト云ヘリ〔寓意草上〕。僧侶ニ魚ヲ贈ルガ如キ、無意味ナル因習ニ拘束セラル、ヲ見テモ、河童ガ決シテ新奇ナル妖怪ニ非ザリシヲ察シ得ベシ。相模ノ大山街道間角川ノ河童ハ、馬ニ對スル惡計露顯シテ打殺サレントセシヲ、間角村ノ三輪堀五郎左衛門ノ先祖、例ノ如ク命乞ヲシテ放還ス。鎌倉時代ノ出來事ナリト傳フ。此時ノ禮物モ鱸ガ二本ト酒德利ニシテ、其德利ノ酒ハ酌メドモ盡クルコト無カリシ

德利 打出小槌



河童ノ德利 寶曆現來集卷廿一ヨリ

由。今ハ既ニ空德利トナリ、魚ノ圖ト共ニ永ク家ニ傳ヘタリシヲ、天保二年四月ニ至リ、江戸本所ノ彫物師猪之助ナルモノ、實見シ來リテ人ニ語ルトイフ〔寶曆現來集廿一〕。其末

馬ニ惡戯シテ失敗シタル河童

養老酒

孫三輪堀啓助君へ今高坐郡茅ヶ崎町ニ居住シ、家實ノ河童ノ德利ヲ縣ノ民政資料展覽會ニ出品シ、先祖孝行ノ賞トシテ酒ヲ入レテ河童ノ贈リシモノト稱ス。此ハ大正二年ノ傳説ナリ〔神奈川縣民政資料小鑑〕。東海道ハ駿州ノ吉原ガ未ダ今ノ地ニ移ラザル前、瀧川ノ

四十九

既ノ柱

押出シト稱スル物凄キ落合ノ淵ニ河童四十九匹住ス。或大名此宿ニ一泊シ乘馬ノ足ヲ川水ニ冷サシム。河童其馬ノ尾ヲ搦メテ之ヲ水底ニ引入レントセシガ、馬恐レテ往還マデ馳セ出シ、河童ハ尻尾ニ纏ヘレテ引出サレ、土地ノ者之ヲ捕ヘテ既ノ柱ニ一夜縛リ附ク。此河童ノ謝罪條件ハ不明ナリ。翌日大將立ヲサセ之ヲ放ツトアリ〔田子乃古道〕。三河ノ河童ノ話ハ後ニ之ヲ述ベシ。近江ノ河童ハ犯情異ナレドモ刑罰ハヨク似タリ。此國野洲郡北里村江頭ニテ、或百姓ノ留守宅ヘ河童亭主ニ化ケ來リテ其妻ト合宿ス。後ニ眞ノ夫還リ争ヒテ化ケタルコト現ヘレ打殺サントセシヲ、色々ト詫言シテ宥シテ貰ヒ、其恩報ジニ德附ケ得サセント、大鮎ヲ二枚ツツ二日目三日目ニ持來リ、被害者此ガ爲ニ身上良クナレリ。十年ホドノ後、河童來リテ曰ク、近頃ハ新田多クナリ魚ヲ捕ルコト殊ノ外不

萬ノ葉

野飼

河童怠狀

自由ナリ。モハヤ宥シ給ベト言ヒ其後ハ持來ラズ〔觀憲交話下〕。山城宇治ノ龜ノ茶屋ハ最初ハ幸齋ト云フ百姓ノ家ナリ。或夕馬ヲ川端ニ野飼シテ置キシニ、河童之ヲ水中ニ引入レントシテ綱ヲ幾重ニモ身ニ巻附ケ、惣身ノ力ヲ以テ曳キケレドモ、却ツテ馬ニ曳キ勝タレテ幸齋ガ家ノ厩ニ轉ガリ込ミテ遁グルコトナラズ。近所ノ人々モ出合ヒテ打殺サントセシガ、或者仲ニ立チテ幸齋ニ詫言シ、以來此家ノ者ハ申スニ及バズ、宇治中ノ者ニ仇ヲスマジキ由ノ怠狀立ヲ、自問自答ノヤウニサセテ宥スト云ヘリ。之ヲ以テ推セバ、元吉原ノ河童ノ大將立ト云フハ此ニ謂フ怠狀立即チ宣誓ヲ爲サシムルコトナランカ。サテ右ノ宇治川ノ河童モ他國ノ例ト同ジク、其翌朝ヨリ三箇年ノ間毎朝未明ニ魚ヲ二ツ三ツツ幸齋ガ戸口ヘ持來リ置キテ恩報ジヲ爲セシガ、其後ハモハヤ來ラズ。或時幸齋大坂ヘ下ラントテ夜船ニ乘リ鵜殿ノ邊ヲ過ギシニ、幸齋々々ト喚ブ者アリ。夜中不思議ナリト思ヒツ、篷ヲ擧ゲテ見レバ、川除ノ上ニ五六歳ノ小兒ホドノ者アリ、彼ニ向ヒテ言フニハ、何時ゾヤ命ヲ御宥シアリシ恩ヲ三年ハ報ジ候ヘドモ、宇治邊ニ居リ候テハ水早

河童引越 クテ魚ヲ捕ルコト易カラズ、我身ノ養ヒサヘナリ難ク候故、此處ヘ住居ヲ換ヘ候、此ヨリ宇治ヘハ程遠ク候程ニ心ナラズ無沙汰ニナリ候、モハヤ御宥シ候ヘト斷リヲ言ヒテ川ヘ入りケルト也〔落穂餘談四〕。阿波那賀郡平島村大字赤池ノ庄屋ニ勝瀬某ト云フ者アリ。

ガタロウ

馬駿足

二百年ホド以前、此家ノ奴僕馬ヲ那珂川ノ澗^{ホトリ、ミツカ}ニ飲ヒ川端ニ繋ギテ家ニ還ル。此川ノ河太郎其綱ヲ解キテ身ニ纏ヒ引込マントセシガ、馬ガ駿足ナリシカ却ツテ河童ヲ引摺リテ既ニ歸ル。人々集リテ殺サントスルヲ、主人制止シテ之ヲ解キ放チ去ラシム。其夜主人ノ夢ニ河太郎來テ言フニハ、命ノ恩ニハ毎朝井戸ノ側ラノ竹棚ニ鮮魚ヲ捧ゲ置キ申スベシ。但シ又物ヲ忌メバ決シテ之ヲ棚ニ置キ給フナ云々。ソレヨリ久シク言フ所ノ如クナリシヲ、二三年ノ後新參ノ下女アリテ菜刀ヲソコニ置キ忘レシヨリ、終ニ河童ノ貢物ハ絶エ

水難禁呪

タリ。サレド河邊ノ者川ヲ渡リ水ヲ泳グニ、自ラ勝瀬氏ノ子孫ナリト名乗レバ河太郎嘗ヲ爲スコトナカリシト云ヘリ〔阿州奇事雜話二〕。土佐ニハ予ガ知ル限りニ於テ此話三アリ。其一ハ元祿年中ノ出來事ナリ。長岡郡五臺山ノ麓ナル下田ト云フ所ノ百姓、野飼ノ爲馬

ニ三十尋バカリノ繩ヲ附ケテ川ノ岸ニ放シ置キシニ、四邊ニ人ノ居ラヌヲ見スマシ、河童其繩ヲ端ノ方ヨリ身ニ卷キ、残り六尺ホドニナリシ時之ヲ川ノ中ヘ曳ク。最初ハ馬モ之ニ附キテ行キシガ、深ミニナリテ驚キテ跳リ上リ、河童ハ川原ノ上ニ投出サル。百姓等之ヲ發見シ多勢打寄リテ散々ニ打擲シ既ニ殺スバカリナリシヲ、老人タチ先ヅ了簡ヲ爲シ、將來コノ下田村ニ於テ人ニハ勿論牛馬鶏犬ニ至ル迄決シテ害ヲ加ヘヌカト、十分河童ノ祭ニ念ヲ押シテ放シ遣リ、其代リニハ毎年六月十五日ニ河童ノ祭ヲ村ニテ營ムコトニ定メ、

愈以テ此地ニハ河童ノ害ヲ見ヌコト、ナレリ〔土州瀨岳志〕。河童ヲ祭ルト云フ一段ハ外ノ地方ニハ見エザルモ注意スベキコト也。此ト略同ジ時代ニ、土佐ノ西部幡多郡津大村大字藤ノ川ノ今城八兵衛方ニ於テモ、川端ニ繋ギ置キシ飼馬同様ノ厄ニ遭ヘリ。此河童ハ兩三日ノ間既ノ前ニ繋ギ捨テタル後、以來人馬ヲ傷フベカラザル由ヲ固ク戒メテ川ヘ放ス。其翌朝ヨリ何人ノスルトモ知ラズ軒ニ釣リタル手水桶ノ鍵ニ毎日魚ヲ持來リ引掛ケ置ク者アリ。年月ヲ經テ此鍵損ジ鹿ノ角ヲ以テ之ニ換ヘタルニ、河童ハ性トシテ鹿角ヲ

長ルル故ニ、之ヲ見テ遁ゲ去リシモノカ、其邊ニ魚ヲ棄テ、行キシマ、以後其事止ミタリト云フ(土佐海)。又吾川郡御墨瀨村ノ千屋惣之進ガ家ニハ、先代ガ河童ノ命ヲ助ケ還セシ時彼ガ報謝トシテ持來レリト云フ一ノ珍器ヲ傳フ。越後島崎ノ桑原氏ノトハ異ナリ、此ハ皿ノ如キ一物ナリ。水難除ノ外ニ痲瘡平癒ノ厭勝トモナルト稱シ非常ニ有名ナル物ナリキ(同上)。右ノ河童ノ皿ハ些シク我々ガ聞ク所ノ物ト異ナリ、通例皿ト云フハ彼ガ頭ノ頂ノ窪ミノコトナリ。河童ニ取リテハ大切ノ物ナルハ同ジケレド、引放シテ人ニ呉ルルコト能ハズ。此窪ミニ水溜レル間ハ強力人ニ數十倍スルコト「サムソン」ノ髪の毛ノ如シ。曾テ肥前佐賀郡ノ三溝ト云フ地ニ於テ、農民其馬ヲ樹ニ繫ギ置キシニ、河童水ヨリ出デ其綱ヲ解キテ身ニ絆ヒ之ヲ水際マデ引行キケレバ、馬驚キテ大ニ跳ネ、乃チ河童ノ皿ノ水ヲ覆ス。河童忽チ力弱リ却ツテ馬ニ引招ラレテ既ニ至ル。主之ヲ既ノ柱ニ繫ギ其由ヲ母ニ語ル。母ハ洗濯ヲシテアリシガ、大ニ罵リテ盥ノ水ヲ河童ニ打掛ケタレバ、其水少シク皿ノ中ニ入り、河童力ヲ復シテ馬ノ綱ヲ引切りテ逸シ去リ、終ニ片手ヲ失フニ

駒繫木

既ノ柱

モ及バズ、又詫狀モシクハ藥ノ祕傳ノ沙汰ニモ立至ラズ(水虎考略後篇三)。從ツテ此地方ニハ河童ノ侵害後世ニ至ルマデ中々多カリキ。九州ノ河童ハ一般ニ智巧進ミタリト見えテ、人間ノ逆襲ヲ受ケタリト云フ記録アマリ多カラザルモ、古キ昔ノ物語トシテハ同種ノ事蹟ヲ傳フルモノナキニ非ズ。例ヘバ薩州川邊郡川邊村大字清水ノ一部落モ、亦河童トノ約束アリテ水ノ災ニ罹ル者決シテ無シ。昔此村清水川ノ櫻淵ノ上ニ川邊家ノ館アリシ時代ニ、河童此家ノ女ヲ引込ミタルコトアリ。主人大ニ怒リ早速其淵ヲ埋メテ水ヲ濁シ之ヲ退治セントセシカバ、河童ノ頭目閉口シテ謝罪ニ來リ、永ク邑人ニ害ヲ爲スマジキ旨ヲ誓ヒテ漸ク宥サル、コトヲ得タリシ也(三國名勝圖會)。肥後ノ加藤モ小姓ヲ河童ニ取ラレテ大討伐ヲ企テシコトアリ。後段ニ之ヲ述ベントス。清正ホドノ鬼將軍ニ敵マレテハ勿論河童ハ之ニ楯突クコトノ出來ル者ニ非ザル也。

河童ノ訛證文

其時代ノ河童ハ神代ノ草木ト同ジク能ク人語ヲ解シタリト見ユ。又人間ト同ジク或ハ泣キ或ハ叩頭シ、甚シキハ人間ト對等ニ不行爲ノ契約ヲ締結セリ。

詮證文

其契約モ單ニ口頭ノモノノミナラズ、時トシテハ書面ヲ以テ差出シタルヲ以テ察スレバ、約ニ背キ若シクハツイ失念シテ相濟マヌコトナドモ、ヤハリ人間竝ニテアリシカト思ヘル。出雲八束郡川津村大字西川津ニモヨク似タル話アリ。昔此村水草川ノ河童、馬ヲ引込マントシテ例ノ如ク失敗シ、色々ト村民ニ陳謝シ辛ウジテ助命ヲ得タリ。此時ノ河童退治ハ全ク村ノ氏神宮尾明神ノ神德ニ因ルト云ヘリ。雲陽志ニハ此顛末ヲ記載シ且ツ曰

氏神

エンコウ

ク、ソレヨリ後此里ニテハ猿猴災ヲ爲スコトナシ。其故ニ世人ハ此社ヲ猿猴ノ宮ト稱ス。猿猴トハ俗ニ謂フ「カハコ」ノコト也。又「カハツバ」トモ「カハタロウ」トモ、國々ニテ名ノ相違アリ。水中ニ住ミテ人ノ害ヲ爲ス者ナリ云々(以上)。近代ノ傳承ハ之ト若干ノ變化アリ。猿猴トハ言ハズシテ河瀬ト稱ス。河瀬馬ノ綱ヲ身ニ纏ヒテ之ヲ引込マントシ、却ツテ馬ノ爲ニ引摺ラレテ棉畠ノ中ヲ轉ゲ廻ル。村ノ者之ヲ見ツケテ河子々々ト騒ギ立テ、終ニ之ヲ捕ヘタリ。河瀬ガ手ヲ合セテ拜ムニヨリ、殺サントセシ命ヲ宥シ、河瀬ハ其儘村ニ奉公シテ田畠ノ仕事ヲ爲セリ。然レドモ本來人間ノ生贖ヲ拔クヲ好ムヲ以テ、

御尻用心 奉公中モ其癖ヤマズ。折モアレバ村ノ者ノ臂ノ邊ニ手ヲ出ス故、始ノ程ハ各自ニ瓦ヲ當

テテ用心ヲセシモ、アマリ度々ノ事ニテ氣味ガ悪クナリ、相談ノ上河瀬ニ證文ヲ入レサ

水難祭呪

セテ之ヲ放ス。村ノ宮ニ祀レルハ實ニ此時ノ證文ナリ。今モ土地ノ人ハ水泳ノ時ニ雲州

西川津ト唱フルヲ常トス。是レ河子除ノ呪文ナリ(日本傳説集)。河童ト河瀬トヲ混同スル

例ハ他ニモ存ス。中國西部ノ諸縣ニ於テ今モ河童ヲ「エンコウ」ト呼ブハ、殊ニ我輩ノ肝

要ト認ムル所ナリ。長門ノ萩ニ近キ阿武郡椿郷西分村ニ於テハ、亦雲州ノ西川津ト同ジ

手形

ク、古クヨリ「エンコウ」ノ手形ナルモノヲ傳フル神社アリ。之ヲ板行シテ信心ノ徒ニ施

守札

ス、牛馬安全ノ護符トシテ有效ナリト云ヘリ。此手形ニ關シテモ同種ノ由來記アリ。寛

永年間ト云ヘバイト古キコトナリ。「エンコウ」或家ノ馬ヲ水中ニ引入レントシテ相變ラズ失敗ス。手形ハ即チ其河童ガ、再度此村ノ牛馬ニ對シテ非望ヲ抱カザルベシト云フ誓約書ナルガ故ニ、之ヲ寫セシ印刷物マデモ、牛馬ヲ保護スルノ效力アルモノト認メラレシ也(長門風土記)。

河童敗衄ノ記録ハ右ノ外ニモ猶多シ。例ヘベ同ジ長門ノ大津郡向津具村ハ出島ナリ。

水邊ノ牧

村ニ杉谷池ト云フ池アリ。毎年領主ノ馬ヲ預リテ此池ノ堤ニ野飼スルヲ例トス。又河童

手印

アリ。手續ハ型ノ通りニシテ馬ニ引摺ラレテ既ノ中ニ轉ゲ込ム。隣人等集リ來リ、後代

ニ至ルマデ向津具一庄ノ中ニ住ムマジキ由ノ券文ヲ代書シ、彼ガ手ニ墨ヲ塗リテ之ヲ押

サシメテ放シ還ス。此ガ爲ニ庄内ニ河童永ク跡ヲ絶ツト云フ。貞享年中ノ出來事ニシテ、

其證文ハ少クトモ寛政ノ頃マデ村ノ産土ウツノノ社ニ之ヲ藏メタリキ〔著樂園隨筆〕。河童ガ無筆

河童自筆

ニシテ代書ヲ必要トセシコトハ無理モ無キ話ナリ。然ルニ或地方ニテハ其證書ヲ以テ彼

ガ自筆ニ成ルモノ、如ク傳フ。現ニ江戸深川入船町ニ於テモ斯ル例アリ。安永年間ノコ

ト也。或男水ヲ泳ギ居タルニ、河童來リテ害ヲ加ヘントシ、亦捉ヘラレテ陸ニ引上ゲラ

ル。三十三間堂ノ前ニテ打殺サントセシヲ、見物ノ中ニ仲裁ヲ試ミタル人アリ。河童詫

手印

證文ヲ出シテ宥サル。其一札ニハ以來此邊ニテ一切害ヲ爲スマジキ由ノ文言アリ。且ツ

河童ノ手判ヲ墨ヲ以テ押シタルモノナリキト云フ〔津村氏譚海〕。九州ハ肥前佐賀ノ藩士大

河童角力

須賀道健ガ被管、佐賀郷百石村ノ某ト云フ者、東淵ト云フ處ヨリノ歸途ニ、一人ノ小僧

來リ逢ヒ強ヒテ角力ヲ取ランコトヲ求ム。某之ヲ諾シテ取組ミシニ、負ケナガラ段々ト

水ノ方ニ近ヨル。サテハ河童ト心ニ悟リ、此物人間ノ齒ヲ怖ル、コトヲ豫テ知リタレバ、

早速ニ其肩ノアタリニ嚙附ケバ、聲ヲ立テ、水底ニ遁レ去ル。其夜河童ノ來リテ家ヲ透

リテ哀號スルコト、他國ニテ腕ヲ斬ラレタル場合ト同ジク、何トゾ此傷ヲ治シテ下サレ

ヨト云フ。其仔細ヲ聞クニ、嚙ミタル人ガ手ヲ以テ其疵ヲ摩ルニ非ザレバ到底癒エヌモ

ノト見エタリ。汝若シ此近邊ノ人ヲ取ラズト誓フナラバ其請ヲ允スベシト云ヘバ、河童

欣々トシテ敬諾シ、終ニ紙ヲ乞ヒテ券ヲ作り手印ヲ押シテ之ヲ差出ス。汝ガ如キ者ニハ

手ヲ汚スヲ欲セス、足デ澤山ナリト威張り足ヲ展ベセバ、ヌルリトシテ觸ル、所アリト

云フ話ナリ。此券文モ永ク勇者ガ家ニ傳ヘレリ。其體略文字ノ如クナレドモ讀ミ難ジト

化物文書

ナリ〔水虎考略後篇〕。此話ナドハ取分ケ虚誕ラシケレド、天狗ノ書ト云ヒ狸ノ自筆ナド稱

スルモノ諸國ニ例多ケレバマダ何トモ申シ難シ。播州佐用郡ノ某地ニ一種ノ骨繼藥ヲ出

野飼

猿

河童ノ手

ス舊家アリ。此家ト縁故アル河童ノ如キハ、前者ニ比シテハ稍正直ニ見ユ。此ハ寶永中ノコト、稱ス。七月下旬ノ殘暑ノ勞ヲイタハルトテ、愛馬ヲ野飼ノ爲ニ川邊ニ出シ置キシニ、此亦綱ノ端ニ一河童ヲ引摺リテ既ニ走り入ル。仲間怪シミテ往キ見ルニ、既ノ片隅ニ猿ノヤウナル物手綱ヲ身ニ搦メテ居リ、駒ハ向ウノ方ニテ息ヲ繼ギ居タリ。其物ヲ熟視スレバ猿ニ似テ猿ニ非ズ、頭上ニ窪ミアリテ髪ハ赤松葉ノ如ク也。且那歸リテ此始末ヲ聽キ大ニ怒リ、此川原ニテ折々人ヲ取ルハ必定汝ナルベシト、忽チ脇差ヲ抜キテ河童ノ手ヲ切落ス。河童シホクトシテ、ドウカ命ヲ助ケ給ヘ、今ヨリ此村ノ衆ニハ指モ差シ申スマジト言ヘバ且那、其方ヲ殺シタリトテ手柄ニモ非ズ、宥シ遣ハスベシ訛證文ヲ書ケトアリ。私ハ元來物書クコトモナラヌ上ニ、手ヲ御切り成サレタレバ愈以テ書ケマセヌ。御慈悲ニ免シ給ヒ其手モ返シテ下サレ、持ツテ還ツテ藥デ繼ギマスト云フ。且那思慮ヲ廻ラシ其藥ハ己ガ調合スルノカト問ヘバ、ナル程拵ヘ申スト答フ。然ラバ手ヲ戻シ助クルニヨリ其藥方ヲ我ニ傳ヘヨ。命ノ代リナレバ安キ御事ト、人ヲ拂ハセテ備ニ

河童藥

河童ノ手

秘法ヲ口授シテ去ル。其法甚ダ奇ニシテ子孫勿論之ヲ相續スト云ヘリ〔西播怪談實記〕。此一條ニ由ツテ察スルニ、訛證文ト藥方ト片腕トハ、河童ノ主觀ニ在リテハ兎モ角モ、人間ニ取ツテハ其價值略同等ナリキトオボシ。證文ガ書ケズバ秘傳ヲ、片手ガ欲シケレバ藥方ヲト云フ中ニモ、手ハ河童ニハ最モ大切ニシテ人間ニハ比較的無用ナリ。渡邊綱ニシテ強情ヲ張ラザリシナラバ、何カ有利ナル「コンミツション」位ハ得ラレシ筈ナリ。其證據ト云フモ妙ナレドモ、近世ニモサル例アリ。山城伏見ノ和田某ナル者、曾テ淀川ノ堤ニ遊ビシニ、河童出デテ足ヲ取り引入レントス。和田強氣ノ男ニシテ其手ヲ捉ヘ腰刀ヲ以テ之ヲ切レバ、キヤツト叫ビ水中ニ入レリ。歸リテ其手ヲ人ニ示スニ、何レモ彼ガ剛勇ヲ感ゼザルハ無シ。此河童モ夜深ク出直シテ來リ、切ニ片手ヲ返却ヲ求ムルコト既ニ六夜ニ及ブ。七日目ノ夜ハ殆下閉口シテ、今夜御返シ下サレズバ最早接グコトモ相成ラズト、打明ケテ懇願ニ及ビタルニモ拘ラズ、頑トシテ之ニ應ゼザリシカバ、茲ニ至ツテカ河童大ニ恨ミ、此報ニハ七代ノ間家貧窮ナルベシト咀ヒテ去ル。而モ其手ハ永ク和

足洗

田ガ家ニ傳ヘルト云フ〔諸國便覽〕。和田氏貧乏ノ言譯トシテハ、目先ノ變リタル思附ナレドモ、而モ天下ノ勇士ハ多クハ河童ノ豫言ヲ待タズシテ貧乏ナリ。殊ニ干涸ビタル河童ノ手ヲ家寶トスルガ如キ氣紛レ者ハ、金持ニナレヌ性分トモ云フベシ。但シ河童ノ手ノ評判、如何ニシテ世ニ傳ヘルニ至リシカハ、考ヘテ見ル値アリ。今ハ如何ニナリシカラ知ラズ、以前筑後ノ柳河藩ノ家老某氏ノ家ニモ一本ノ河童ノ手ヲ藏セリキ。此家ノ側ニ近ク大ナル池アリテ、家人時トシテ四五歳ノ小兒ノ猿ニ似テ猿ニ非ザル者ガ水ノ濤ニ立ツヲ見タリ。或時家來ノ者足ヲ洗ヒニ行キテ河童ニ引込マレントシ、之ト闘ヒテ其腕ヲ斬リテ持歸ル。其河童ハ如何ナル仔細アリテカ手ノ返却ヲ求メニ來ラズ、故ニ今モ此家ノ寶物ナリ。毎年夏ノ始ニナレバ取出シテ之ヲ水ニ浸シ、親族朋友ノ家ノ子供ヲ集メテ其水ヲ飲マシム。斯クスレバ永ク河童ノ災ニカ、ルコト無シトノコト也〔水虎録話〕。伏見ノ和田氏ナドモ子孫貧苦ニ迫リ、此一物ヲ筐底ヨリ取出シテ世ノ中ニ吹聴シタリトスレバ、其動機必ズシモ初代ノ武功ヲ誇ルニ止ラザリシナランカ。此モ亦有リ得ベカラザ

ル推測ニハ非ズ。

此ノ如ク論ジ來レバ長門ノ一村ニ於テ、「エンコウ」ノ手形ヲ印刷シテ望ミノ者ニ分與スト云フハ非常ニ意味ノアルコトナリ。蓋シ河童ニシテ村ノ祭ヲ享クル程ノ靈物ナリトセバ、斷然トシテ詮證文ノ作成ヲ拒絶シ、「イヤ僞ハ人間ニコソアレ」ト高ク止リテアリ得ベキ筈ナレドモ、既ニ手モ無キ術策ニ馬脚ヲ露ハシ、ウチカフ内甲ヲ見透カサレシ以上ハサウモナラズ、ヲメ／＼ト昔ナラバ大恥辱ノ一札之事ヲ差出シテ引下リシハ、誠ニ器量ノ惡キ次第ナリ。併シナガラ是レ決シテ河童バカリノ身ノ上ニ非ズ。例ヘバ本朝故事因縁集卷四ニハ、四國ニ狐ノ住マザル理由ヲ説明シテ左ノ一話ヲ載ス。伊豫ノ河野家ニテ不意ニ同ジ奥方二人トナリ、其何レカ一方ハ狐ニ相違ナカリシ時、僅カナル舉動ニテ狐ノ奥方看破セラレ既ニ打殺サレントセシヲ、散々ニ詫ヲシテ命ヲ助ケラル。其折ノ謝リ證文ニハ將來四國ニハ一狐モ住ムマジキ由ノ誓言アリ。乃チ數艘ノ船ヲ借用シテ悉ク本土ニ押渡ル云々(以上)。上陸地點ハ中國ノ何レノ海岸ナリシカ、如何ニモ迷惑ナルコトナ

狐崎

リシナラン。備後鞆町ノ狐崎ハ寶曆年間迄狐ノ形シタル赤石アリキト云ヒ、又狐多ク群レ居ルトモ言ヘド、一説ニハ昔四國ニ狐狩アリシ時狐多ク浪ニ浮ビテ此崎ニ著キシヨリノ地名トモ謂フ〔沼名前神社由来記附録〕。或ハ其様ナル事モアリシカモ知レズ。而シテ右ノ證文ハ今モ必ズ河野氏ニ於テ之ヲ保存シテアルコト、信ズ。何トナレバ若シ此文書ニシテ亡失セバ、狐ハ再ビ四國ノ島ニ來リ住スルコトヲ得ル約束ナリケレバナリ。

疫病神

近クハ文政三年ノ秋ノコトナリ。江戸愛宕下田村小路ナル仁賀保大膳ト云フ武家ノ屋敷ヘ、疫病神アリテ窺ニ入込マントセシヲ、同家ノ次男金七郎之ヲ見咎メ、右様ノ者我方ヘハ何シニ入來ルゾ、打殺スベシト怒リシニ、疫病神何トソ一命ヲ宥シタマハレト申ス。然ラバ書附ニテモ差出スベシト云ヘバ、早速別紙ノ如キ證文ヲ認メ置キテ立去ルト云フ〔竹抓子二〕。

差上申一札之事

兩人

私共兩人心得違ヲ以御屋敷江入込段々被仰出候趣奉恐入候以來御屋敷内竝金七郎様御名前有之候處江決而入込間敷候私共ハ申不及仲ケ間之者共迄モ右之趣申聞候依而一命御助被下難有仕合奉存候爲念一札如件

文政三年九月廿二日

疫病神

仁賀保金七郎様

疫病神ノ方デハ無論ゴク内々ノツモリナリシナランモ、當時ハ疫病大流行ノ折柄トテ、爲ニスル者ノ手ニ由ツテ此證文ハ意外ニ弘ク流布シタリト覺シク、隱居老人ナドノ隨筆ニモ採録セラル、ニ至レリ。或ハ此モ亦長門ノ「エンコウ」ノ手形ト同ジク、板行シテ信者ニ施シタリシカモ測リ難シ。

元來訛證文ナルモノハ勝チタル方ノ言分ヲ何處マデモ通シ得ルモノナレバ、右ノ如ク至極念人ナルモ別ニ不思議トスルニ足ラザレドモ、苟クモ仁賀保金七郎ノ名ヲ掲グルニ於テハ、其眞偽ヲモ問フコト無ク、常ニ疫病神總員ノ營業ヲ禁止シ得ト云フニ至ツテハ、

聊カ過酷ノ嫌無キニ非ザルナリ。唯舊來ノ緣故如何ニ拘ラズ勝チタル強者ヲ以テ保護者ト頼ムハ、言ハマ封建時代ノ餘風ナリ。「ヒヤウスヘ」ノ社、又ハ「エンコウ」ノ宮ノ御札ノ如キモ、要スルニ近世海船ノ國旗ト同ジク、一種庇護ノ權力ヲ標識スル徽章ニ他ナラズ。而シテ又相手ガ文字ニ疎キ河童ナルコトヲ考慮シ、今一段簡單ナル方法ヲ以テ之ヲ表示シタル例アリ。昔三河ノ某地、清水權之助ナル人ノ領内ニ於テ、河童馬ヲ襲ヘントシテ亦大ニ失敗シ、助命ノ條件トシテ約束ヲ爲ス。即チ手拭ノ端ヲ紅ク染メタルヲ持ツ人ニ對シテハ害ヲ加フマジト云フコトナリ。是ヨリ以後此附近ノ人民ハ我モノト紅手拭ヲ携帯スルコト、ナレリト云ヘバ（水虎考略後篇二所引）、此モ亦稍濫用セラレタリト見エタリ。又一説アリ。此話ノ異傳ナルカ否カヲ知ラザルモ、同ジ三河國ニ設樂某ト云フ強力ノ勇者アリ。「カハツバ」ト組合ヒ取ツテ押ヘ突殺サントシケル時、「カハツバ」下ヨリ言ヒケルハ、命ヲ御宥シ候ヘ、御子孫竝ニ御一家ノ分殘ラズ水ノ難ヲ遁レシメ申スベシ。日本國中ノ「カハツバ」ハ皆我等ガ一類ニテ候間、何方ニテモ我等ガ御約束申シタリ

紅手拭

河童一黨

ト聞キ候ヘマ、川ニテ守護仕ルベシト言ヒケル故、然ラバ宥ス、證據ハ如何トアリシカバ、乃チ歌ヲ教ヘタリ。

「ヒヤウスヘ」ハ約束セシヲ忘ルナヨ川立チ男氏ハ菅原

設樂氏

設樂氏元ハ菅原氏ナリ。之ニ因ツテ設樂氏ノ人ハ川ノ難無シ。又此歌ヲ唱フレバ他氏ノ者モ難ヲ遁ルト云ヘリ（落穂餘誌四）。此河童ハ別ニ馬盜人ニテモ無カリシ如クナルニ、兎ニ角ニ大ナル言質ヲ取ラレタリ。右ノ「氏ハ菅原」ノ歌ノ如キハ、河童自筆ノ手形ヲ眼前ニ突附ケタルニ比ブレバ、幾分證據力ニ乏シキモノナリシナランモ、若シ律義ナル河童ナラバ夫ノミニテモ以前ノ約束ヲ思出サシムルニハ十分ナリシナリ。世間尋常ノ瘡癩神ノ如キハ、居ル筈モ無キ昔ノ勇士ノ名ヲ署シテ人ノ門戸ニ張り置ケバ、サテハ此家ハ鎮西八郎爲朝閣下ノ御宿ナルカト言ヒテ通り過ギ、又ハ此家ニモ「サ、ラ」三八殿ガ同居シテゴザルノカト、殊々家ノ内ヲ覗キモセズニ歸リ去ルヲ常トセリ。之ヲ思ヘバ人ノ方ガ遙カニ人惡シ。如何ニ相手ガ害敵ナリトハ言ヒナガラ、毎回此手段ヲ以テ彼ヲ欺クナ

サ、ラ三

リ。但シ印刷シタル降參狀又ハ謝罪ノ口供ハ決シテ此類ノ陰險ナル策ニ非ズ。汝ノ一類ニハ會テ此ノ如ク敗北ノ恥ヲ晒セシ者アル也。人間ハ決シテ侮リ得ベカラザル動物ナルゾ。馬モ亦然リ。心得違ヒラスルコトナカレト豫戒スル迄ノ事ナリ。河童ニシテ若シ文字アリトセバ、馬屋牛小舎ノ守護トシテ、此ホド穩當且ツ適切ナル警備手段ハ、決シテ他ニ求ムルコトヲ得ベカラザルナリ。

諸國河童誌ノ矛盾

サテモ此世ノ中ニ河童ト云フ一物ノ生息スルコト、既ニ動カスベカラザル事實ナリトスレバ、次デ起ルハ其河童ハ動物ナリヤ、ハタ又鬼神ナリヤト云フ一問題ナリ。此問題ノ解決ニ付テモ、諸國ニ於ケル河童捕獲ノ記録ハ尙且ツ有リナリ資料ナリ。今ヨリ僅カニ百餘年ノ前、即チ文化文政ノ頃ハ、人間ト河童トノ交渉最モ頻繁ナル時代ナリキ。露西亞ノ「ガローニン」ガ遭厄日本記事ニスラ、河童ノ題目ヲ看過セズ。天下ノ一奇書水虎考略ガ世ニ公ニセラレタルモ亦此前後ノ事ナリ。所謂太平ノ餘澤ナリシカ否カ、九州地方ノ河童ニ就キ系統的ノ研究ヲ試ミシ人アリ。此書ハ則チ其人

河童研究

ノ手ニ成リシモノ也。ソレヨリ少シ以前ニ常陸水戸ノ海濱ニ於テ漁夫ノ網ニ掛リテ一頭ノ河童捕殺セラレ。其又數十年ノ前ニハ越前某村ニ於テ河童ヲ生擒シ之ヲ將軍家ニ獻

赤子

河童ノ毛



童河ルタヘ捕テニ海ノ戸水

上セシ者アリ。河童ノ生メル子ハ頗ル人間ノ赤兒トヨク似タリト謂ヘリ。更ニ寛永某歲ノ昔ニ於テモ、豊後ノ日田ニテ捕ヘタリト云フ河童アリ。此等ハ何レモ立派ナル寫生ノ繪圖アリテ今日ニ傳ヘリ、殆ド疑ヲ容ルベキ餘地無キニモ拘ラズ、何分ニモ合點ノ行カザル一點アリ。即チ諸國ノ河童ノ形狀及ビ生活ニハ地方ニヨリ餘程ノ相違アルコト是ナリ。例ヘバ九州筑後川流域ノ河童ハ肌膚褐色ニシテ總身ニ毛アルニ反シテ、三河越前等ノモノハ青黒クシテ毛無ク、

所謂「オカツバ」ノ部分ニノミ、人間ノ小兒ト同ジキ毛ヲ頂ケリ。豊前北部ニ於ケル報告ニ依レバ、河童ハ海月又ハ白魚ノ如ク、水中ニ在ツテハ透明ニシテ形ヲ見ル能ハズト云

甲良

フニ、常陸ノ海ノ河童ハ眞黒ニシテ而モ背ニハ頑丈ナル甲良ヲ被レリ。琉球ニテハ河童ヲ「カムロー」ト云フ。水陸兩棲ノ動物ニシテ形三四歳ノ童子ノ如ク、面ハ虎ニ似テ鱗甲アリト云フニ〔沖繩語典〕、和漢三才圖會ニ記述スル九州中國ノ川太郎ハ、十歳バカリノ小兒ノ如ク裸形

ニシテ能ク立

行シ人語ヲ解

ストアリ。予

顔色

ハ河童ノ顔色

ハ青黒キモノ

ト信ジ居タル



童河ノ川後筑ム好ヲ摸相

ニハ陸中其他ニ於テハ其面朱ノ如ク赤シト言傳フ〔遠野物語〕。越後新潟邊ノ河童ニ至ツテハ常ニ龜ト同ジク匍行スル怪物ナルニ反シテ、九州ノ河童ノ人ト相撲ヲ取ル事ヲ好ム

者ハ往々ニシテ華美ナル犢鼻褌ヲヒケラカシテ濁歩スルアリ。此等ハアマリニ顯著ナル差異ニシテ、到底單ニ河童文明ノ地方的優劣ノミヲ以テ之ヲ説明シ去ルコト能ハザルニ似タリ。而シテ右ノ如キ記述ノ矛盾ヲ解決スルノ方法ハ唯一ツアルノミ。即チ今迄ノ人ガ河童ナリト認メテ寫生シタル物ノ一二又ハ全部ハ正眞ノ河童ニテハ非ザリシコト是ナリ。例ヘバ常陸ノ漁夫ガ海上ニ於テ打殺セシ動物ノ河童ナリシコトハ如何ニシテ之ヲ知リタルカ。何レノ地方ニテモ予ハ河童ト云フ者ナリト名乘リタル河童ハ有ルマジケレバ、此ノ如キ誤リタル想像ハ有リ得ベキ道理ナリ。總體此物ノ特性又ハ生活狀態ニ關スル吾人ノ視察ハ、未ダ十分ニ精細ナリト言フコト能ハズ。河童ノ記録ハ諸國共ニ豐富ナルニモ拘ラズ、此ニモ亦頗ル著シキ相違ノ説アリ。故ニ若シ記述ノ些カニテモ區々ニ互レル部分ヲ不確實ナリトシテ排除ストセバ、此物ノ存在ハ次第ニ茫漠トナリ行クヲ免レ難シ。殊ニ河童出現ノ事實ノ書史ニ見ユルモノ、甚シク近世ノ二三百年間ニ偏レルコトハ、誠ニ凡庸ノ歴史家ニ取リテハ大ナル疑ノ種ナリトス。下學集以前倭名鈔以後、歴代

記録乏シ

ノ語彙ニ其名目ヲ掲ゲズ、渡來發現等ノソレラシキ記事ヲ見出ス能ハザルガ爲ニ、今後尙幾多ノ臆説ヲ存立セシメ得ベキ餘地アリ。併シナガラ前ニ列擧セル多クノ馬引失敗記ヲ見テモ明瞭ナルガ如ク、何人モ認メザルベカラザル一事アリ。何ゾヤ。曰ク、諸國ノ碧潭ニ棲ミテ、時々馬又ハ人ノ子ヲ水ニ引込マントスル物ハ河童ナリ。

河童ニ異名多シ

河童トハ本來何物ナルカ。少クモ我々ノ多數ハ之ヲ何物ナリト

ガタロ
カハタロ
ウ
カワラン
川小僧
川小法師
川原小僧

信ジツ、アルカ。此問題ニ答ヘンガ爲ニハ、是非トモ順序トシテ河童ノ別名又ハ方言ヲ比較考察セザルベカラズ。予ハ此迄ハ便宜上東京語ヲ用キテ之ヲ「カツバ」ト呼ビタレドモ、是レ單ニ此物ノ名稱ノ一種ニシテ、比較的弘ク採用セラレテアル者ト云フニ過ギザルナリ。予ガ如キモ幼時之ヲ「ガタロ」ト稱ヘタリ。「ガタロ」ハ恐クハ川太郎ノ義ナラシ。カハタロ」ハ即チ川童ニシテ、「ワツバ」トハ小兒ヲ意味スル近世ノ俗語ナリ。畿内及ビ九州ノ一部ニテハ「カハタロウ」、尾張ニテハ「カワランベ」又ハ川小僧、伊勢ノ山田ニテ川小法師、同ジク白子ニテ川原小僧ト云ヒ〔物類稱呼ニ、本草綱目釋義四十二其他〕、筑前

カウラワ
ロウ
ガアラツ
カウコ

ニ「カウラワロウ」、肥後ニ「ガアラツバ」ナドト云フモ同ジ事ニテ、要スルニ此物ノ人間ニ比シテ形小ナルコトヲ意味スルノミ。備前備中等ニ於テ之ヲ「カウゴ」ト呼ブハ、出雲ニ於テ河子ト稱スルニ同ジク、川ノ子ト云フ義ナルコト疑ナシ。備中ニテモ松山ニテハ「カハコウ」ト云ヒ、岡田ニテハ「ガウコ」ト云フ。同國吉備郡川邊村ノ川邊川ノ流ニ河子岩アリ。元ノ名ハ吉田岩、元龜年中松山落城ノ際ニ、吉田左京ガ腹ヲ切ツタル岩ナレドモ、後世ニハ「カハコ」ガ出テ引クゾナドト小兒ヲ嚇スヤウニナリテ、終ニ此名ニ改マリシナリ〔備中話十二〕。同ジ地名ハ遠近ノ諸國ニモ亦多ク存ス。

備前兒島郡藤戸村大字天城字川子石小字川子石

美作久米郡鶴田村大字和田南字年貢田小字川子岩

丹後熊野郡久美谷村大字板谷字カハゴ石

信濃北安曇郡八阪村字川古石

甲斐南都留郡船津村大字大富字土堀小字川子石

相模中郡大磯町大字大磯字高麗道下小字川子石

武藏比企郡七郷村大字越畑字川後石

神護石

ノ如キハ其例ナリ。近年評判ノ「カウゴ」石ナル者ハ、勿論悉ク河童ノ故跡ナリトハ云フ能ハズ。或者ハ革籠石ト書シ又ハ香合石ト書シテ、其形狀ノ革籠又ハ香合ニ似タルガ故ノ名稱トシ。或者ハ皇后石ト書キテ神功皇后ノ御遺蹟ナドト言ヒ、其他ニモ區々ノ説アレド、要スルニ古クヨリ土地ノ人ノ注意シ尊敬シ居タル石ニシテ、尋常ノ場所ニ非ザリシコトノ外、何等確乎タル説明ヲ見出ス能ハズ。而シテ神籬對山城説ノ八釜シキ石ノ圓形ノ圍障ハ、此「カウゴ石」ト無關係ナルコトハ次第ニ明白トナレリ。

カハノト

水神

九州ノ或地方ニテハ、河童ヲ「カハノト」ト呼ブト聞ク。南ハ日向大隅邊ニテハ之ヲ「ヒヤウスヘ」ト云ヒ、又「スキジン」(水神)ト云フ。此等ハ何レモ尊敬ヲ極メタル稱號ニシテ、正シク一般ノ河童動物説ヲ否定スルニ足ルモノナリ。之ニ反シテ越中富山ニ於テ河童ヲ「ガメ」ト稱スルハ、即チ之ヲ龜又ハ鼈ノ部類ニ屬スルモノト認メタルガ爲ナル

ガメ

カハツソ

川瀧神

コト、曾テ越後新潟ニ於テ捕ヘタリト云フ河童ノ寫生ヲ見テモ想像ニ難カラズ。佐賀縣ニテハ河童ヲ「カハツソウ」ト云フ由(佐賀縣方言辭典)。「カハツソウ」ハ川ノ僧ノ義ニモ非ズ、水ノ神タル川瀧神トモ直接ノ關係無ク、全ク河童ヲ以テ川瀧ノ類ト考ヘタル爲ノ名稱ナルガ如シ。出雲ニテ昔ノ「エンコウ」ヲ今ハ川瀧ト爲セルコトハ前ニ述ベタリ。川瀧ハ小獸ナレドモ亦淵ノ底ニ住ミテ惡事ヲ爲ス。馬ヲ害セシ話ハ未ダ聞カザルモ、人ヲ騙カシテ水ニ引込ムナドト傳ヘラル。海ニモ亦瀧ノ住ム地方アリ。佐渡ノ兩津町附近ニテハ、海瀧ハケンカラヌ詐術ヲ以テ人ノ命ヲ奪フト信ゼラレ、其一名ヲ「ウミカプロ」、即チ海ノ童兒ト云フトアレバ(佐渡志)、通稱ニ於テモ亦河童ト相似タリ。播州明石ノ海岸ナドニテハ、今日「ガタロ」ト云フ物ハ河童ニハ非ズシテ鯨ノ事ナリト云フ(内藤吉之助君談)。此外ノ異名ニシテ由來ノ尙不明ナルハ、熊野又ハ但馬ニテ「ガウライ」、北陸ノ或地方ニテ「カワラ」、「ガワラ」又ハ「テガワラ」。此ハ或ハ「川ワラ」ハノ義ナランカ。加賀ミヅシ 能登其他ニ於テ河童ヲ「ミツシ」ト云フコト(本草啓蒙)、サテハ陸中陸奥ニ於テ之ヲ「メ

メドチ ドチ」ト云フニ至リテハ〔南部方言集〕、猶數段ノ討究ヲ重ヌルニ非ザレバ其理由ヲ明白ニ
 ミンツチ スルコト難シ。「アイヌ」ノ古言ニハ、河童トヨク似タルモノヲ「ミンツチ」ト云フ由ハ次
 コマヒキ ニ言ハントス。而モ江差松前ノ舊城下ニ於テハ、又河童ヲ「コマヒキ」ト呼ビシ時代アリ
 〔サヘツリ草〕。此事ニ就テモ後ニ猶考察ヲ加フベキ機會アルナリ。

九州ノ河童ニ付テハ更ニ一異説アリ。曰ク河童ハ夏バカリノ物ナリ、冬ハ山中ニ入り
 テ「ヤマワロ」(山童)トナルト〔西遊記其他〕。山童ヲ目撃シタル者ハ愈、少ナケレド、昔ハ
 往々ニシテ之ニ遭遇シタル者ノ記事アリ。山ニ入りテ其足跡ヲ見ルガ如キハ殆ド普通ノ
 不思議ナリキ。山童ハ童ト謂フハ名ノミニシテ隨分ノ大男ナリ。川小僧輩ノ中々企ツル
 コト能ハザル大入道ナリシナリ。但シ此トハ或ハ別種カト思ヘル、山ノ神ノ部類ニ、「セ
 コ」〔觀惠交話〕、又ハ木ノ子ナドト稱スル物アリ〔扶桑怪異實記〕。愛ラシキ童形ニシテ群
 ヲ爲シテ林中ニ遊ビ杣木地挽ノ徒ニ惡戯ス。山男ト同ジク木ノ葉ヲ綴リテ着ルトモアレ
 ド、或ハ又青色ノ衣服ヲ着テアリトモ云ヒ、ヨホド動物バナレノシタル者ナリ。紀州熊

木ノ子

足跡

ボカシヤン

野ニテハ、河童ハ冬ハ山ニ入ツテ「カシヤンボ」ト云フ物ニナルト云フ。「カシヤンボ」ハ六
 七歳ホドノ小兒ノ形、頭ハ芥子坊主ニシテ青キ衣ヲ着ス。姿ハ愛ラシケレドモ中々惡事
 ヲ爲ス。同國東牟婁郡高田村ニ高田權頭・檜杖冠者ナド云フ舊家アリ。此中ノ或家ハ毎
 年ノ秋河童新宮川ヲ上リテ挨拶ニ來ル。姿ハ見エザレドモ一疋來ル毎ニ一ノ小石ヲ投込
 ミテ著到ヲ報ジ、ソレヨリ愈、山林ニ入りテ「カシヤンボ」ト成ルトイヘリ〔南方熊楠氏報〕。
 「カシヤンボ」牛馬ノ害ヲ爲スコト多シ。或ハ木ヲ伐リニ山ニ入りシ者、樹ニ繫ギ置キタ
 ル馬ヲ取隠サレ、漸クニシテ之ヲ見出デタレドモ、馬苦惱スルコト甚シク、大日堂ノ護
 摩札ヲ請ヒ受ケテ、僅カニ助ケ得タルコトアリ。或ハ水邊ヨリ出デ來リテ夜々牛小屋ヲ
 襲ヒ、涎ノ如キ物ヲ吐キテ牛ノ身ニ塗リ附ケ之ヲ苦シム。試ミニ小屋ノ戸口ニ灰ヲ撒キ
 置ケバ、水鳥ノ如キ足趾一面ニ其上ニ殘レリ〔同上〕。「カシヤンボ」ハ火車ヨリ轉ジタル
 名稱カト南方氏ハ言ハルレドモ未ダ確證ヲ知ラズ。兎ニ角夏ノ間里川ノ水ニ住ム者ヲモ
 同ジク「カシヤンボ」トモ呼ブト見エタリ。之ニ反シテ九州ノ南部ニテハ、冬季山ニ住ス

足跡

鍋

ル彼ヲモ亦河童ト稱ス。薩州出水郷ノ獵師八右衛門、夜山ニ入りテ辨當ヲ使ヒテアリシトキ、闇ノ中ヨリ四五本ノ手出デテ食ヲ求ム。八右其河童ナルコトヲ知り持チ來リシ海鰻イサヲ與ヘテ其禮ニ猪ヲ追ヒ出サシメ、結局僅カナル食物ヲ以テ大キニ利得ヲシタリ。次ノ夜モ亦此通りナリシガ、手多クシテ海鰻イサ足ラズ、乃チ戯レニカキ桐ノ火ヲ最後ノ者ノ掌ニ載セタルニ、聲ヲ放チテ走り去リ、ソレヨリ山ドヨミ樹木ノ折レ倒ル、音頻リニシテ物凄ジクナリタレバ遁ゲ還ル。其後山ニ入レドモ河童百方妨ヲ爲シ、獵物無レバ終ニ其業ヲ罷メタリト云ヘリ〔水虎録話〕。此話ハ他ノ諸國ニテハ常ニ山男ニ就キテ語り傳ヘラル。

山男

奥州ニテ有名ナル白髮水ノ傳説ニモ、白キ石ヲ燒キテ餅ヲ求ムル山男又ハ山姥ニ食ヘセシト云フコトアリ〔遠野物語〕、山姥ノ者ノ焚火ノ傍ニ立寄ルト云フ話ハ、山人トシテハ決シテ珍シキ例ニ非ズ。唯之ヲ名ヅケテ河童ト云フヲ以テ奇ナリトス。又日向地方ニ於テモ、河童冬ハ山ニ入りテ棲ムト云ヒ之ヲ山童トハ言ハズ。其形狀宛モ熊野ノ「カシヤンボ」ノ如ク、又「セココ」木ノ子ナド呼バル、物ニ似タリ。山人ノ墨斗スミツボヲ欲シガルコト甚

墨斗

シク、天壺ト云フ物ヲ怖ル。天壺トハ高鍋邊ノ方言ニテ芋ヲ編ミテ造リタル器ナリ。山ニ入ル者常ニ之ヲ肩ニシテ行ク。墨斗ヲ天壺ノ上ニ載セテ差出セバ河童驚キテ飛ビ退クト云ヘバ〔水虎録話〕、彼縣ニテハ之ヲ見タル人多キナルベシ。然ルニ一方ニハ同ジ地方ニテ、河童ハ夏ニナルト海邊ヨリ山手ニ向フガ如ク語ル者アリ。初夏ノ雨ノ夜ニ數百群ヲ爲シ、ヒヨウ／＼ト鳴キテ空ヲ行ク者ヲ河童ノ山ニ入ルナリト言ヒ、秋ノ央ニナリテ同ジ聲ヲシテ海ノ方ニ鳴キ過グルヲ、河童山ヲ出デ來ルト云フ。會テ其姿ヲ見タル者無シト云ヘバ、思フニ一種ノ渡鳥ナルベシ〔郷土研究二卷三號〕。筑肥海岸地方ノ河童ハ、毎年四五月ノ頃筑後川ノ流ヲ溯リ、豊後ノ日田ヲ經テ阿蘇ノ社僧那羅延坊ナラエンベウガ許ニ伺候スト云フ。是モ亦同ジ鳥ノ聲ナドニ由リテ起リタル説ナランカ。那羅延坊ハ古クヨリ俗ニ河童ノ司ト稱ス。代々人ニ頼レテ河童ヲ鎮ムル祈禱ヲ爲シ、又折々近國ノ田舎ヲ巡回ス〔水虎考略後篇所引蓬生談〕。其由緒ハ久留米ノ尼御前ヨリモ古キガ如シ。何ハトモアレ九州ノ河童ハ、眷屬大群ヲ爲シ且ツ移動性ニ富ムコトヲ以テ一特色トス。佐賀白山町ノ森田藤

兵衛ナル者、曾テ對馬ニ渡リ旅宿ニ在リ。夜分家ノ前ヲ通行スル者ノ足音曉ニ至ルマデ止マザルヲ怪シミ、明日亭主ニ向ヒテ何故ニ斯ク人通り多キヤト問ヘバ、亭主ノ答ニアレハ皆河童デゴザリマス。河童日中ハ山ニ居リ夜ニ入レバ海ニ行キテ食物ヲ求ムルニテ、人間ニハ害ヲ爲サズト云ヘリ〔水虎新聞雜記〕。今ヨリ八九十年以前、日高謙三ト云フ

海ト河童
人日向ノ耳川ノ上流ナル一山村ニ往キテ滞在セシニ、毎夜四更ノ頃ニ及ベバ恠シキ聲川上ニ起リ、暫クアリテ對岸ニ達シ忽チ又下流ニ去ル。曙ノ比ハ復ビ岸ニ沿ヒテ還ルガ常ナリ。土地ノ人ノ説明ニ、是ハ河童ガ山ヲ下リ海ニ浴スルナリト也〔日州水虎新話〕。此輩ハ何レモ山ノ方ヲ本居トスル河童ナルカ、然ラザレバ亦何ゾノ鳥ノ聲ノ誤リテ斯ク信ゼラレタルモノ也。河童群ヲ爲シテ來去スト云フ者ハ、未ダ曾テ其姿ヲ見タリト言ヘズ。高鍋附近堤ノ番人、永年此河童ノ聲ヲ聞キテ曾テ之ヲ見シコト無シ。或士ノ勇氣アル者深夜ニ物陰ニ之ヲ覗ヒ、聲ヲ的ニシテ闇ニ鐵砲ヲ放シタルニ、一發ニシテ忽チ行方ヲ知ラズト云フナド〔水虎錄話〕、如何ニモ鳥ヲシキ話ナリ。サレバ河童ヲ「ヒヤウスヘ」ト云フ

ヒヤウス
ヘ

ハ其ノ鳴ク聲ノヒヨウ／＼ト聞ユル爲ト云フ説ノ如キ、未ダ何分ニモ信ヲ執ル能ハズ。某地方ノ山中ニ住スル「セコ子」ハ、一二十群ヲ爲シテ往來シ、其語音ヒウ／＼トノミ聞ユト云ヘリ〔觀惠交話〕。但シ此「セコ子」ハ、顔ノ眞中ニ大キナ眼ガ一ツナリト云ヘバ、アマリ當ニモナラヌ話ナリ。

エンコウ

河童ト猿ト

河童ヲ「エンコ」又ハ「エンコウ」ト云フ地方ハ、出雲石見周防長門伊

河童言話

豫土佐等ナリ。九州ニテモ河童ニ出逢ヘリト云フ者ニシテ、其大サモ形モ共ニ猿ノ如クナリシト報告スル者多シ。或ハ又全身ニ短キ毛アリ、人間ヲ詭カサントスル時ハ最初ニハ人ノ如ク物ヲ言ヘドモ、之ヲ聞返セバ二度目ニハ「キイ／＼」ト云フバカリニテ、何ノ事カ判ラズトモ云ヒ、又悲シミテ泣ク聲マルデ猿ナリキト傳フル地方アリ〔水虎考略〕。然ルニ一方ニハ又河童ト猿トハ仇敵ナリト云フ説アリ。河童ハ猿ヲ見レバ自然ニ動クコトガ不能トナル。猿モ此物ヲ見レバ捕ヘズニハ承知セヌ故ニ、猿牽ガ川ヲ渡ル時ニハ用心ノ爲是非トモ猿ノ顔ヲ包ムト云フ事ナリ〔笈埃隨筆一〕。加藤清正ガ肥後ノ領主タリシ時

猿牽

河童首領

寵愛ノ小姓ヲ八代川ノ河童引込ミテ殺ス。清正大ニ之ヲ憤リ、早速令ヲ領内ニ下シテ多數ノ猿ヲ集メ、河童討伐ヲ計畫ス。河童ハ到底猿ノ敵ニ非ザリケレバ、之ヲ聞キテ大恐慌ヲ引起シ、中ニモ河童九千ノ頭目ニ其名ヲ九千坊ト呼ブ者、一族ヲ代表シテ或僧ニ仲裁ヲ頼ミ、永ク人間ニ害ヲ加フマジキ旨ヲ約束シテ、僅カニ鬼將軍ノ怒ヲ解クコトヲ得タリト云フ〔本朝俗話〕。

既ノ猿

河猿

猿ガ河童ニ勝ツト云フコトハ今ハアマリ聞カヌ話ナレド、其由來ハ中々複雑ナルモノアルニ似タリ。此事ハ獨リ西國地方ノ俗信ナリシノミニアラス、江戸ニテモ河童ノ災ヲ避クル爲ニハ猿ヲ飼ヒ置クヲ可トスルノ説アリキ〔竹爪子四〕。自分ノ推測ニ依レバ、是レ既ノ猿ヲ飼ヒテ牛馬ノ災ヲ拂フ古來ノ慣習ト因縁アルモノ、如シ。仍テ今少シク其問題ヲ講究セント欲ス。蓋シ近代ノ河童ニモ頗ル猿ニ似タル特徴ハアリシナレド、中古ハ猶一段此二ツノ物ガ接近シ居タリト覺シク、或ハ今ナラバ直ニ河童ト呼ブベキ水底ノ怪物ヲ、河猿又ハ淵猿ト名ヅケタリシ例アリ。例ハ遠江榛原郡ニハ河猿ト云フ怪獸住ス。

釜淵
淵猿
頭ノ皿

虬

水ノ岸ニ現レ出ル物ニテ、馬之ニ遭ヘバ忽チ斃レ死ス。何レノ川筋ニテモ河猿出レバ馬ノ種ハ絶ユ。恐クハ馬ノ疫病神ナランカト云ヘリ〔三河雀〕。毛利公爵ノ祖先ガマダ藝州ノ吉田ニ在リシ頃、其臣下ニ井上元重通稱ヲ荒源三郎ト云フ武士アリ。時ハ天文三年ノ八月、吉田川ノ釜淵ノ水底ニ入ツテ、人畜ヲ害スル淵猿ト云フ怪物ヲ退治シ、武勇ノ名ヲ天下ニ施セリ。源三郎七十人力アリシモ淵猿ニハ百人力アリ。唯幸ニシテ怪物ノ強キハ全ク頭ノ中央ノ窪ミニ水ノアル爲ナルコトヲ前以テ知リシガ故ニ、取敢ズ其首ヲ擱ミテ左右ニ振廻ハシ、水ヲ翻シテ之ヲ無力トシタル後、容易ニ生擒シ得タルハ最モ智慮アル手段ナリキ〔老嫗茶話〕。但シ此淵猿ハ所謂怠狀立ラシテ釋放セラレタリヤ否ヤ、後日譚ノ傳ハラヌハ遺憾ナリ。此話ハ大昔仁德天皇ノ御代ニ、吉備ノ川島河ノ淵ニ於テ笠臣ノ祖縣守ト云フ勇士ガ虬ヲ退治セシ顛末ト、ヨク似タレドモ多分ハ偶合ナルベシ。武家高名記陰德太平記志士清談等ニモ之ヲ載録ス〔南方熊楠氏報〕。藝藩通志ノ高田郡吉田村釜淵ノ條ニハ、荒源三郎ガ猿ヲ生獲シタル故跡ナリト見エタリ。

猿

猿ノ水中ニ住ムト云フコトハ何分ニモ信ジ難キ話ナレドモ、兎ニ角昔ノ人ハ此ノ如キ一種ノ猿ヲ見聞セシ者多カリキト覺シク、今モ府縣ノ地名ニ猿ヶ淵又ハ猿猴淵ナドト云フモノ少カラズ。例ヘバ

石見美濃郡匹見下村大字落合字矢尾小字猿猴ヶ淵

同 邑智郡長谷村大字長谷字山中小字猿猴淵

土佐長岡郡天坪村大字北瀧本字エンコウ淵

同 幡多郡下川口村大字宗呂字エンコウ淵

下野下都賀郡富山村大字富田字猿淵

武藏入間郡南高麗村大字下直竹字猿淵

越前足羽郡東郷村大字下毘沙門字猿ヶ淵

美作苦田郡東一宮村大字東一宮字猿淵

エンコザル

等ノ如シ。我々ノ幼時ニハ、文人畫ニ畫カル、一種手ノ長キ猿ノミヲ「エンコザル」ト呼

ビタリキ。猿猴ノ月ヲ捉フル話ハ必ズシモ物ノ譬ニハアラス。大和ノ猿澤池ノ如キハ昔多クノ猿集リ手ト手ヲ組ミテ梢ヨリ水ノ月ヲ取ラントセシガ、最初ノ猿手ヲ放チシ爲悉ク池ニ落チテ死ス。其猿共ヲ埋メテ驗ノ松ヲ栽エ今モ存スト云ヘリ〔所歴日記〕。其顛末ノ越中駒見ノ狼婆ト似タルハ一奇ナリ。右ノ猿猴淵ト云フ地名ノ由來モ、恐クハ亦此物水底ノ月ヲ採ラントセシ故跡ナドト説明スル老人アルベケレド、實際ハヤハリ他ノ地方ノ河童淵又ハ川子淵ト同様ニ、其地ニハ曾テ此ノ如キ猿ノ住ミシ時代アリシモノト解スベキナリ。美作ノ猿淵ハ一宮中山神社ノ猿ナルベシ。此社ノ猿ハ今昔物語以來有名ナリ。今モ明神ノ神使トシテ崇敬セラレ、一宮村ノ贊殿谷又ハ同郡西苦田村大字小原ニ猿ノ祠アリ。毎月十二日ノ夜ハ一宮ノ靈猿必ズ黒澤山ニ登リ佛殿ノ中ニ宿ス。風雨霜雪ノ夜ト雖缺クコトナシ。之ヲ名ヅケテ通夜猿ト云フ。一宮村大字東田邊ノ石原川ニモ猿淵アリ

中山神

通夜猿

(或ハ前ノ猿淵ト同ジキカ)。一宮神社ノ使ノ猿此村ノ湯原山王ニ來ルトキ、毎ニ此淵ニ入リテ齋浴スル故ニ此名アリト云フ〔作陽志〕。若狹遠敷郡宮川村大字加茂字大戸ト、同

賀茂明神 郡野木村大字上野木トノ境ノ山ノ麓ニ、猿陪淵ト云フ處アリ。太古賀茂明神降臨ノ折ニ之ニ供奉シタル白猿此淵ニ姿ヲ現ハス。淵ノ底ニハ明神ノ冠石ト云フ一箇ノ小石アリ。早魃ノ年ニハ雨乞トシテ水中ヨリ右ノ小石ヲ抱キ上グレバ驗アリ〔若狹郡縣志〕。此等ノ白猿又ハ靈猿ハ御伽噺ノ中ノ猿ノ如ク、水ノ中ニ入ルコトヲ意トセズ。恐クハ即チ安藝ノ淵猿ヤ三河ノ河猿ト同族ニシテ、其昔何カ然ルベキ由緒アリテ、土地ノ者ヨリ永ク尊崇ヲ受クルニ至リシナランカ。而シテ其尊崇ノ起原ニ至リテハ後ニ猶説アリ。

川牛 淵ハ兎ニ角ニ怖シキ處ナリ。アノ紺青ノ水ノ底ニハ動物學ノ光モ未ダ透徹シ得ザルガ如ク、此外ニモ非常ナル物之ニ住ムト云ヘリ。例ヘバ信濃ノ犀川ニハ犀ト云フ獸住ム。東筑摩郡片丘村牛伏寺ノ古傳ニハ、此邊古クハ水湛ヘテ大ナル湖ナリシニ、神人犀ニ乘リテ下降シ、巖石ヲ切開キテ今ノ流ト爲シタリト云ヒ〔日本宗教風俗志〕、或ハ又泉小太郎犀ニ乘リテ三清路ノ岩ヲ突破リ、又水内橋ノ下ノ岩ヲモ蹴破リテ水ヲ千曲川ニ落シテ平地ヲ造ル。其犀ヲバ犀口ト云フ處ニ祀ルトモ語り傳ヘタリ〔信濃奇勝錄〕。近江ニ

犀

獸裂

テハ今ノ愛知郡葉枝見村大字新海ノ川尻ニ、昔ハ深キ淵アリテ犀龍住メリ。弘安中黒井覺海ナル者此地ニ來リテ件ノ犀龍ヲ亡シ、淵ヲ埋メテ田地ト爲シ新開村ト號シ、己モ新開氏ヲ稱セリ。同ジク東淺井郡虎姫村大字大寺、正八幡ノ境内ニ昔ヨリ犀ケ窪ト云フ處アリ。今ハ田地ノ字トナル。曾テハ此地大ナル淵ニシテ老犀住ミテ往來ノ人ヲ惱マス。淺井備前守ノ家士ニ入海彦之庄司ト云フ者、彼ノ犀ヲ捕ヘテ既ニ之ヲ殺サントス。犀誓ヒテ此地ヲ去ルトアレバ、此亦謝罪ヲ以テ助命ヲ得タルナルベシ。彦根町長光寺裏ノ外濠ヲ犀ケ淵ト云フ。水湧出デ大旱ニモ絶ユルコトナシ。北青柳村大字長曾根等ノ堰水ト爲ス〔以上淡海木間撰〕。遠江濱松ノ北方ニモ、犀ト云フ獸ノ出デタルニ因ツテ犀ケ崖ト呼ブ處アリ。三方原南端ノ絶壁ニシテ樹木ニ隠レテ下ヲ流ル、水アリ。元龜ノ有名ナル古戰場ナリ〔遠江風土記傳〕。東京ニテハ早稻田ノ西北ニ亦一箇ノ犀ケ淵アリテ、現ニ百年バカリ前マデ、時々「サイ」ノ出現セシコトアリ。高田ノ面影橋ノ一ツ上流ニシテ但馬橋ノ下ナリ〔十方菴遊歷雜記三編中〕。今ハ附近ニ下宿屋ナド出來タレド、ツイ先頃マデハ物凄キ

道ノ神

靈キ又泉

川 牛

水牛

魔所ナリキ。薄暮ニ水中ヨリ半身ヲ顯ハスヲ遠ク望ミ見タル者アリト稱シ、或ハ幅三間
 ばかりノ小川ナレバ獸トシテハ調子ガ合ハヌヨリ、「サイ」ト稱スル惡魚ナドトモ記載シ
 タル者アリ。日本ニハ犀ハ居ラヌ筈ナリ。犀ハ山野ニ住ム獸ナレドモ、別ニ水犀ト稱シ
 テ三本ノ角アル者ハ水牛ニ似タリト支那ノ書ニ見ユル由、朝鮮ニテハ犀ヲ誤ツテ水牛ノ
 コト、解スル者アリト云ヘリ〔雜言覺非三〕。日本ニテモ或ハ亦此誤訓ヲ傳ヘタルモノカ。
 但シ臺灣ノ外ニハ今ハ犀ト誤ルベキ水牛モ存在セザレバヨホド不思議ナリ。蓋シ「サヘ」
 又ハ「サヘト」ハ、往古境ノ神ヲ祭リシ畏ロシキ場處ノコトナレバ、或ハ此ガ爲ニ「サイ」
 ト云フ怖ルベキ一物ヲ作り出シ、之ヲ處々ノ碧潭ニ住マシムルニ至リシヤモ亦測ルベカ
 ラズ。

道祖土

諸國ノ海川ニハ、「サイ」トハ言ハザル水牛ノ住メリト云フ處アリ。其水牛モ格別人ヲ
 害セザルモ要スルニ怪物ナリ。土佐ノ近海ヲ航行スル船、曾テ船底ヲ水牛ノ爲ニ突カレ
 タリ。大阪著船ノ後船體ニ折込ミ居タル水牛ノ角ヲ取り、藥種商ニ高ク賣リ渡シタリト

一角獸

水底ノ牛

云フ〔土佐瀧岳志中〕。此等ハ往々ニシテ犀角ト混同セラル、所謂「ウニコール」(一角獸)ノ
 所業ナリシナランカ〔大物新志〕。併シ大隅始良郡牧園村大字中津川ニ於テ、約三十年目毎
 ニ犬飼川ノ水底ヨリ出デタリト云フ牛ノ如キハ正眞ノ牛ナリ。最近ニ出現セシハ黄牛ナ
 リキ。角ハ短クシテ太ク、毛ハ甚ダ美麗ニシテ眼光射ルガ如シ。人近ヅキテモ通グズ、
 人モ亦靈物トシテ敢テ侵サズ。陸上ニ遊ブコト二三日ニシテ復水中ニ還リタリ〔三國名勝
 圖會〕。正徳四年六月ノ中旬、大阪城ノ追手門ト京橋口トノ間ノ堀ニ頭ト背トヲ水中カラ
 現ハセシ怪物ハ、頭ハ牝牛ノ大サトアレド金色ノ鱗アリ。但シ堀ノ中ヲウロ／＼ト歩ミ
 去ルトアリテ甚ダ龍ラシカラズ〔月堂見聞集七〕。武州秩父郡金澤村字出牛ニテハ、見馴川
 ノ流ニ牛ケ淵アリ。昔此淵ヨリ牛出デタルコトアリテ地名ヲ出牛トハ謂フナリ〔新編武藏
 風土記稿〕。羽後平鹿郡横手町、朝倉城址ノ南方ニ牛沼アリ。沼ノ名ノ由來トシテハ、或
 ハ此堤ニ築キ込メタル牛令ニ至ルマデ靈アリト云ヒ、或ハ神社建築ノ材木ヲ負ハセタル
 牛此沼ニ沈ムトモ云ヒ、又一説ニハ「ウシ」トハ棟木ニ用キル大材木ノコトナリ、其材

牛ケ淵
牛沼

沼ノ主

水ノ底ニ沈ミテ眞ノ牛ト化シ、終ニ沼ノ主ト成リテ折々背ヲ現ハスコトアリトモ傳ヘタリ〔雪乃出羽路十三〕。勿論取留メタル話ニハ非ザレドモ、各地ニ於テ水中ニ靈牛住ムト云フ點ノミハ一致セリ。獨リソレノミニアラズ、牛ハ又自由ニ地下水ノ流ニ從ヒテ土中ヲモ往來スルコトアリ。陸中和賀郡更木村大字更木ノ牛クリガ淵ハ、北上川ノ流ニ在リテ

牛ク、リ

隣村平澤トノ境ニ近シ。「牛クリ」ハ即チ「牛ク、リ」ノ轉訛ナリ。或年ノ夏民家ノ牛ヲ此

牛野飼

岸ニ放チ置キシニ、牛ハ暑サニ堪ヘズシテ淵ノ底ニ入り、沈ミタルマ、出デ來ラズ。牛

主ハ既ニ死シタルモノト思ヒテアリシニ、水中ヲ潛リタリト見エテ同村大字臥牛ノ觀音

堂ノ下ノ淵ニ浮ビ出デ、岸ニ上リテ潛マリ居タリ。故ニ又其地ヲ「ヒソウシ」ト謂フナリ

〔和賀稗貫二郡郷村誌〕。此話ニハ河童ハ出デザレドモ、事ノ筋ニハ注意スベキ脈絡アルコ

ト尙後段牛馬藪入ノ條ニ之ヲ説クベシ。陸奥下北郡東通村大字白糠ノ山ニハ大穴ト云フ

處アリ。昔野飼ノ牛此窟ニ入りテ終ニ出デ來ラズ、遙カニ隔タリタル上北郡横濱村ノ中

ニ現ハレタリ。故ニ其地ヲ牛ノ澤ト呼ブトカヤ〔眞澄遊覽記八〕。牛ガ窟ノ中ニ入りシ話ハ

窟ト牛

今昔物語ニモアリテ、極メテ古キ來歴アルナリ。

水神

今昔物語ニモアリテ、極メテ古キ來歴アルナリ。

神ガ川牛ノ背ニ乘リテ出デラレタル話アリ。下總北相馬郡文村大字押付ノ水神社ハ蠶

養川ノ岸ニ在リ。此神ノ正體ハ川牛ニ乘リタル木像ニシテ、其牛ノ右ノ角折レタリ。御

影ノ版畫モ亦此ノ如シ。其由來ハ昔隣村ノ大字大平ニ御大平様ト云フ異人アリ。今日大

神ノ争

平權現ト稱シテ村ニ祭ル者即チ是ナリ。此御大平様、アル日水神ノ社ノ下ニ來テ釣ヲ垂

レタルヲ、水神怒リテ川牛ニ乘リテ出現シ其釣竿ヲ奪ヒ取ラントス。異人ハ驚キテ傍ノ

藤蔓ヲ取り之ヲ投附ケタルニ、川牛ノ頭ニ引掛リテ右ノ角折レタリ。ソレ故ニ神體ノ牛

ニ片角無キナリ〔利根川圖志二〕。日本ニテハ珍シキ話ナレド支那ニハ之ニ似タル川牛ア

リ。勾漏縣ト云フ地方ニハ大江ノ中ニ水牛ノ如キ獸住シ、水ヨリ出デテヨク鬪争ス。其

角ハ陸ニ在リテハ軟キコト押付水神社ノ川牛ノ如ク、江水ニ却リ入レバ角堅クナリテ復

石ノ窟

出ツトアリ〔西陽雜俎續集八〕。東京小石川ノ牛天神ノ牛石ハ、石ノ上ニ窪ミアリテ昔ハ之

ニ鹽ヲ供ヘタリト云フ。或ハ又海中ヨリ出現セシ天神ノ乗物ノ化石シタルニハ非ザル

カ。同市向島ノ牛御前^{ウシノミゼ}ナドハ川牛ノ記念トシテ一箇ノ牛ノ玉ヲ保存セリ。若シ彼社ノ縁起ノ文ニ誤無シトスレバ、昔建長ノ二年ニ淺草川ノ底ヨリ牛鬼ノ如キ物飛出シ、天下ニ疫病ヲ流行セシム。牛頭天王ノ降魔ノ力ニ由リテ、右牛鬼類似ノ物ハ此社ニ飛込ミ、一國忽チニシテ平穩ニ復スト云フ〔十方遊歴雜記第二編中〕。此社ノ神體ハ即チ牛頭天王降魔ノ異形ト云フコトナルガ、ソレニシテハ被征服者ノ名ヲ以テ其御社ニ名ヅクルコト、聊カ解シ難キニ似タリ。

牛ケ淵牛沼ノ類ハ諸國ニ多ケレドモ、必ズシモ之ヲ以テ川牛又ハ牛鬼ノ如キ珍奇ナル動物ノ産地ト目スルコト能ハズ。安藝高田郡志屋村大字志路ノ黃牛淵^{アウゴノヅメ}ノ如キハ、曾テ河童ノ爲ニ村ノ黃牛^{アウウシ}ヲ此水ニ引込マレシコトアリシヨリ此地名アリ〔藝藩通志〕。蘆毛淵^{アシゲノヅメ}又ハ馬子淵^{ウマコノヅメ}ナドト稱シテ、河童ガ蘆毛馬又ハ馬ノ子ヲ引込マントセシ故跡ナリト傳フル例ハ外ニモアレド、其地名ノ由來トシテハ被害者ノ緣故ヲ引クコトハ多少不自然ノ嫌ナキニ非ズ。故ニイツト無ク牛淵ハ牛ノ居ル淵ト説明スル者多クナリタルナリ。牛ニ似タ

蘆毛馬

ル水底ノ怪物ガ、河童乃至ハ淵猿ト同ジク、人ヲ引込ミテ殺シタリト云フ例ハ外ニモ存ス。甲州北巨摩郡旭村上條北割組ノ甘利山ノ山中ニ、佐原池ト呼ブ池アリ。甘利左衛門尉ノ一子此池ニ漁シテ池ノ主ノ爲ニ命ヲ失ヒ、其亡骸ヲスラ見出スコト能ハズ。甘利氏ハ郷内十村ノ百姓ヲ驅リ集メ、池ノ中ヘ大木ヲ投ゲ込マセ且ツ不潔ナル物ヲ沃^ツガセタルニ、池ノ主ハ赤牛ノ姿ニ化シテ水中ヨリ走り出デ、更ニ山奥ナル大笹池ヘ遁入りタリト云フ〔甲斐國志〕。同郡安都玉村村山北割組字八牛^{ヤウウシ}ノ牛池ニモ之ニ似タル口碑アリ。昔時角ノ八箇アル赤牛此池ヨリ飛出シ、八嶽ノ方ヘ走り行キシ故ニ、地名ヲ八牛トモ牛池トモ云フナリ〔同上〕。方三間バカリノ小池ナレドモ、水ノ色ノ清濁ヲ以テ晴雨ヲ占フ風習存シ、池ノ岸ニハ應仁二年ノ年號アル六地藏アリト云ヘバ、年久シキ靈場ナルコト疑無シ。

池

赤牛

サハリ池

池ノヌシ 池沼ノ主トシテハ、釜鏡鏡又ハ馬ノ鞍ノ如キ眼鼻モ無キ物マデガ往々ニシテ其威力ヲ逞シクセリ。況ヤ始ヨリ生アル物ノ中ニテハ、鰻^{ウナギ}ノ如キ靈物ハ勿論、鯰^{サマシ}モシクハ

犬神
ヲサキ
クダ
狐
土瓶
神

白田螺ノ類ニ至ルマデ、所謂劫ヲ經タルモノハ皆化ケ且ツ人ヲ捕ルナリ。其例ヲ列擧スルハアマリナル枝葉ナレバ略ス。要スルニ學者ノ分類記述ヨリ超脱シテ、今尙色々ノ動物ノ存在スルハ事實ナルガ如シ。例ヘバ犬神及ビ之ニ類似スル「ヲサキ」狐・「クダ」狐又ハ人狐ノ如キ、或ハ「トンボ」又ハ「トウビヤウ」ト云フ蛇ノ如キハ、恰モ是レ顯微鏡發見前ノ「バクテリア」ナリ。「クダ」ハ體細クシテ管ノ中ニ入ルベク、犬神ハ鼠ニ似テ群ヲ爲シテ人家ニ住ミ、總テ皆身ヲ隠スコト自在ナリ。「トウビヤウ」ハ酒瓶ノ中ニ住ミテ時ニ出デテ人ニ憑キ、身ニハ蚯蚓ニ似タル頸輪アリ。一定ノ家筋ニ屬シテ能ク人ノ爲ニ恨ヲ報ズルノ力アリ。之ヲ見タル人多クシテシカモ動物學ノ書ニ見エズ。地上ニスラ既ニ此ノ如シ。況ヤ碧潭ノ底深ク牛ノ住ムナドハ決シテ驚クニ足ラズトス。武藏川越城ノ三芳野天神ノ下ナル外濠ハ伊佐沼ノ水ト下ニ通ズ。コノ泥深キ堀ノ主ハ何カハ知ラズ「ヤナ」ト名ヅクル怪物ナリ。當城危急ノ際ニ於テ敵兵擣手ノ堀端マデ迫リ來ル時ニハ、忽チ霧ヲ吐キ雲ヲ起シ魔風ヲ吹カセテ四方ヲ暗夜ト爲シ、且ツ洪水ヲ汎溢セシメテ寄手ニ

ヤナ

川熊

方角ヲ失ハシムベシト云フ話ナリ〔十方菴遊歷雜記第三編下〕。實驗モセズシテ此作用ヲ承知シ、之ヲ防衛ニ利用シタルハ、智慧伊豆守ニ非ズンバ則チ太田道灌ナルベシ。又川熊ト名ヅクル水中ノ獸アリ。其話ヲ聞クニ陸地ノ熊ト似タル所甚ダ少ナシ。少年ノ頃姫路ノ城ノ堀ニハ藪熊ト云フ怪物住ミテ人ヲ騙カスト聞キシガ、此モ熊トハ思ハレヌ生活狀態ナリキ。文政十年七月、名古屋大須ノ門外ニ於テ、勝川ニテ生捕リタル猪熊ト名ヅケテ見セ物ニシタル獸ハ、實ハ木曾街道ノ中津川ニテ取リタル川熊ト云フ物ナリシヲ、川ハ水ニ縁アレバ雨が降りテハ惡シト、忌ミテ之ヲ「キノクマ」ト呼ビシナリ。毛ハ鼠色ニシテ澤アリト云ヘリ〔見世物雜誌三〕。羽後ノ雄物川ニモ川熊ノ住ミシ證據アリ。秋田侯ノ先代ニ諡ヲ天英院ト謂ヒシ人、船ニテ此川ニ獵ヲセシ時、水底ヨリ黒キ毛ノ手ヲ出シテ、殿ノ鐵砲ヲ奪ヒシ怪物アリ。其後水練ノ達者ナル人アリテ、此川隨一ノ魔所タル洪福寺淵ノ底ニ入り一挺ノ鐵砲ヲ拾ヒ上ゲタリ。佐竹家ノ什寶ニ川熊ノ御筒ト稱セシハ即チ是ニシテ、以前藩主ガ水中ノ獸ニ奪ハレタリシモノ、現ニ川熊ノ掘ミシ痕存スト云フ〔月

怪物ノ手

乃出羽路五。此下流ノ河邊郡川添村大字椿川ニハ又川熊ノ手ト名ヅクル物ヲ傳フ。曾テ椿川ノ舟子、雄物川ノ岸ニ船繋リシテアリシニ、深夜ニガバト浪ノ音シテ舷ニ雙手ヲ掛クル物アリ。驚キテ舵ヲ揮ヒテ之ヲ斬リ、朝ニナリテ見レバ此手舟ノ中ニ落チタリ。一見猫ノ手ノ如キ物ナリキト云フ〔同上〕。河童ナラバ即刻ニ返付ヲ哀訴スベカリシ品物ナリ。

カハコマ

駒引錢

秋田ノ人ノ話ニ、今日彼地方ニ於テ「カハコマ」ト稱スルハ、水ノ神ノ別名ナリ〔山方石之助氏談〕。「カハコマ」ハ或ハ川駒ニハ非ザルカ。果シテ然リトスレバ川牛ト相對立シテ、話ニ幾分カ筋道ガ立ツカト思ヘル。但シ斯ク言ヘバトテ、勿論右ノ黒キ毛ノ手ヲ以テ直チニ馬ノ脚ナリト主張スルニハ非ズ。松前地方ニ於テ河童ヲ「コマヒキ」ト云フコトハ前ニ之ヲ述ベタリ。河童ニシテ深キ毛皮ヲ被リタル川獺ノ類ニ非ザル限、北海道ノ雪氷ノ下ニ冬ヲ送り、三尺ノ童形ヲ以テ牛馬ニ對シテ熊以上ノ暴威ヲ振フト云フコトハ、靈物ニ非ザレバ到底企テ能ハザル藝ナリ。之ニ就キテ案出シタル予ガ一説アリ。乞フラクハ之ヲ演ベシメヨ。東京ノ附近ニハ駒引澤又ハ馬引澤ト云フ地名多シ。思フニ

駒引澤

馬塚

昔關東ノ平原ニ盛ナリシ馬ノ牧ト關聯シテ、何カ然ルベキ由緒アル土地ナルベク、屢馬ニ就キテノ信仰ヲ存ス。例ヘバ玉川電車ニ接近セル駒澤村ノ馬引澤ニハ賴朝ノ愛馬ノ塚アリ。府中ノ對岸關戸村ノ駒引澤ニハタシカ古キ藥師堂アリテ、堂ノ前ナル路ハ馬ニ乘リテ行クコト能ハズ、乗打ヲスレバ必ズ怪異アリシ故ニ駒ヲ曳キテ通行セリ。藥師堂ノ西下東ニ各「ゴクラク」ト云フ地名ノ存スルハ、此處マデ來レバ最早馬ニ乘リテモ差支無カリシ爲ナリト云フ〔林義直氏談〕。馬上咎メヲスル神ハ、蟻アリトキ通明神以來甚ダ多カリシナリ。ソレヲ駒引ト名ヅケタル例ハ外ニモアリ。羽後平鹿郡植田村大字越前字駒引ハ、

馬上咎メ

館村ノ八幡ノ鳥居ノ正面ニシテ、乗打ヲスル人ハ誰ト無ク落馬セシガ故ニ、何レモ畏レテ馬ヲ曳キテ通りシヨリノ地名ナリ〔雪乃出羽路九〕。駒ヲ曳クトハ乘ラズシテ口綱ヲ取ルコトナリ。後世馬追ヲ業トスル田舎者ナドハ、曳クト云フ古語ヲ誤解シテ、鼠ガ鏡餅ヲ引クナドノ引クカト思ヒ、從ツテ終ニ牛馬ヲ水底ニ誘ヒ殺スト云フガ如キ迷信ノ發生ヲ促シタルヤモ圖リ難ケレド、其昔ノ意味ハ必ズ別ニ存シ、河童ノ人格ハ或ハ今日ノ如ク

繪錢

賤劣ナルモノニハ非ザリシカト思ハル。

前代ノ穴錢ノ中ニ駒引錢ト稱スル一種ノ繪錢アルコトモ、亦何等カノ因縁無シトハ言フベカラズ。今日ノ通説ニ依レバ、日本ノ繪錢ノ始ハ足利時代ノ末所謂六條錢ノ頃ニ在リテ、元和以後殊ニ寛永通寶ノ鑄造ニ伴ヒテ一層盛ニナリタリト云ヘリ。又取留メテ此ト云フ目的ハ無ク、錢座ノ開業祝ニ職人等ガ慰ミ半分ニ作りシモノカ、又ハ物好ナル鑄物師輩ガ最初ヨリ樂錢即チ玩弄品トシテ鑄タルモノニテ、別ニ信仰上ノ意味ナドハ無カリシガ如ク認メラル〔繪錢譜序〕。併シ此説ニ對シテハ疑ヲ插ムベキ餘地全ク無キニ非ズ。支那朝鮮ノ銅ノ豊富ナラザリシ地方ニテモ、竝ノ錢ヨリハ大キク且ツ手丈夫ニ、複雑ナル意匠ヲ以テ念入ニ澤山ノ繪錢ヲ鑄造セリ。是レ即チ所謂厭勝錢ニシテ、社會生活上通用錢ヨリハ一層大ナル意義ヲ有セシガ故ニ此ノ如キ也。錢ヲ神ト祀リ又ハ祈禱ト占ノ用ニ供セシ例ハ我邦ニモ乏シカラズ。日本ノ繪錢ノ中ニモ橋辨慶トカ紋畫シトカノ類ハ或ハ只ノ玩具ナリシナランモ、繪錢譜ノ大部分ヲ占ムル駒錢ニ至リテハ、單ニ道樂半分ノ

錢神

錢何正

所業トシテハ餘リニ數多ク且ツ系統アリ。或ハ又錢十文ニ付キ一枚ヅツノ駒引錢ヲ交ヘタリシ故ニ百文ヲ十疋ト云フトノ説アレド、更ニ根據無キ想像説ナルノミナラズ、少ナクモ駒ノ繪錢ヲ鑄造セシ起原ヲ説明スル能ハズ。疋ヲ以テ錢ヲ數フルノ風習ナキ支那ニ於テモ馬ノ錢ハ甚ダ多シ。例ヘバ唐將千里追風又ハ白驥ナドノ錢文アルモノハ裏面ニ駒ノ畫ヲ鑄出シ、逐日腰泉ノ如キハ表面ニ之ヲ鑄出シ、更ニ又千里之能日行千里出入通泰等ノ錢ハ人ノ馬ニ騎リタル畫様ナリ〔鹽尻六十四〕。此等ノ錢文ヨリ想像スレバ、馬ハ即



子通用ノ迅速ナルコトヲ以テ其奔馳ニ譬ヘタルカトモ考ヘラル。此等ノ繪錢ハ多クハ錢背一杯ニ大キク馬ヲ描キ、恰モ射藝ノ草鹿ナドノ如ク馬ノ腹ノ部分ガ錢ノ孔ナリ。之ニ反シテ日本ノ駒錢ハ方孔ノ周圍ニ馬ヲ描キ、且ツ十中ノ八九マデハ口繩ヲ附ケテ之ヲ曳ク形ナリ。馬ノ首ノ右ニ向ヘルヲ入駒ト云ヒ、左ニ向ヘルヲ出駒ト云フ。馬ノ背ニハ或ハ俵トカ珠トカノ目出タキ荷物ヲ積ミ、神人又ハ農夫ノ之ヲ曳ケルモアレド、分ケテモ

出駒入駒



猿曳駒

注意セラルルハ裸馬ヲ猿ノ曳キ行ク圖ナリ。假ニ年代ノ前後ヲ忘却スレバ殆ド、河子「カシャンボ」ノ歴史ヲ畫ケルカトモ思ヘル、所謂猿曳駒ノ繪錢ナリ。

繪馬ノ猿

サテ右ノ如キ繪錢ハ果シテ如何ナル目的ノ爲ニ之ヲ使用セシカ。残念ナガラ今尙之ヲ明白ニスルコト能ハズ。又我輩ノ強ヒテ想像セントスル如ク、猿曳駒ノ一種ガ他ノ多クノ駒引錢ノ根源ナリシト云フコトモ甚シク證據ニ乏シ。併シナガラ兎ニ角自分ガ蒐集セシ諸國ノ河童ノ話ノ、右ノ繪錢ト若干ノ關係ヲ有スルラシキコトハ、恐クハ何人ニモ承認シ得ベキコトナラン。蓋シ猿ガ馬ヲ曳ク圖ハ獨リ繪錢ノ模様タルノミニ止ラズ、今日ノ田舎ニテモ些シク注意スレバイクラモ他ノ例ヲ見出スコトヲ得ベシ。神社ノ繪馬ニモ猿ガ之ヲ曳ク所ヲ描ケルモノアリ。自分ハ幼少ノ頃播磨ノ農家ニ於テ、既ノ戸口ニ印刷シタル此繪ノ貼附ケラレタルヲ多ク見タリ。多分ハ同國印南郡ノ生石子神社、俗ニ石ノ

生石子神

寶殿ト稱スル宮ヨリ出シタル牛馬ノ守護符ナリシカト思ヘド、其點マデハ記憶セズ。九州地方ニテハ又他ノ神社ヨリモ此繪札ヲ配リシモノアリシガ如シ。其神ノ名ハ聞洩ラシ

既ノ猿



石生磨子神子神守札 中山神佛社集卷十ヨリ

タレドモ、必ズシモ猿ヲ使令トスル山玉ノ社ナドニ
 限リタルコトニ非ザリシカト思ハル。
馬樞神ト馬歩神 猿ヲ既ノ守護トスル風習ハ
 起原ノ最モ古キモノナリ。我々ノ同胞ハ猿曳駒ノ繪
 札ヲ既ノ軒ニ貼附スル以前、實物ノ猿ヲ畜舎ニ繋グ
 ヲ以テ有效ナル家畜保護ノ手段ト認メタリキ。此慣
 習ハ支那ニモアレバ暹羅ニモ存シ、佛經結集時代ノ
 天竺ニモ亦行ハレタリト云フ〔南方熊楠氏報〕。馬ヲ大
 事ニセシ武家時代、馬經ヤ安驥集ノ類ヲ片端ヨリ翻
 譯セシ時代ニ、此モ亦支那モシクハ朝鮮ヲ經テ我邦
 ニ輸入シタル迷信ナリト言ヒ得ザルニハ非ザルモ、
 日本ノ既ノ猿モ決シテ新シキ外國ノ模倣トハ認ムベ

猿ノ舞

カラズ。讃州高松ノ某氏ニ傳ヘタル古キ馬ノ口籠ノ金物ノ彫刻ニ、猿ノ首ニ繩ヲ附ケテ
 柱ニ繋ギタル所ヲ表ヘセルモノアリ〔集古十種馬具三〕。昔足利家ノ先祖左馬入道義氏朝臣
 ハ、美作國ヨリ舞ノ巧ナル一頭ノ猿ヲ求メ得テ之ヲ將軍ニ獻上ス。顯文紗ノ直垂小袴ニ
 鞆卷ヲ差シ烏帽子ヲ着テ、鼓ノ調子ニ合セテ面白ク舞ヒ、舞終リテハ必ズ纏頭ヲ乞ヒケ
 リ。件ノ猿ヲ能登守光村預カリテ既ノ前ニ繋ギ飼ヒケルニ、如何シタリケン馬ニ背中ヲ
 嚙マレ、其後舞フコトセザリケレバ皆人念無キコトニ思ヘリト云フ〔古今著聞集二十〕。今
 ヨリ七百年バカリ前ノ事實ナリ。同ジ頃流行セシ野曲ノ章句ニモ亦一ノ例證アリ。曰ク
 御既ノ隅ナル飼猿ハ、キヅナ離レテサソ遊ブ、木ニ登リ、常磐ノ山ナル檜柴ハ、風
 ノ吹クニゾチリトロ搖ギテウラガヘル〔梁塵秘抄二〕

猿ハ馬飼

サテ何故ニ猿ヲ既ニ繋ゲバ馬ノ爲ニ善カリシカ。肥後ノ阿蘇ニテハ馬ハ元來猿ノ飼フ
 ペキモノナリト云フ。人間ハ猿ニ學ビテ始メテ馬ヲ牽クコトヲ知レリ。其故ニ今モ馬屋

ハ申ノ方ニ向ケテ建テ、百姓ハ決シテ猿ヲ殺スコト無シ。野飼ノ駒ニ猿ガ耳ヲ掴ミテ乗
レルヲ見タル人少ナカラズトナリ〔郷土研究一卷二號〕。他ノ地方ニモ此類ノ口碑存スルヤ
否ヤ未ダ之ヲ詳カニセズ。古ク輸入シタル支那書ノ記事ニモ、或ハ獼猴瘟疫ノ氣ヲ去ル
ト云ヒ〔補註相續經六所引畜養本草〕、獼猴ノ皮ハ馬ノ疫氣ヲ掌ルト稱シ〔同上靈類本草〕、能ク
惡ヲ避ケ疥癬ヲ去ルト云ヒ〔同上虎骨經〕、又ハ常ニ獼猴ヲ馬坊ニ繫ゲバ惡ヲ辟ケ百病ヲ消
スナドトモアリテ〔同上圖像馬經及爾雅翼〕、其理由トスル所區々ニシテ且ツ曖昧ナレド、結
局其效用ハ災ヲ免カルト云フ、消極的ノモノナルコトニ一致セリ。古クハ東晋ノ大將軍
趙固ナル者アリ。馬醫中ノ扁鵲トモ言フベキ道士郭撲ノ力ニ由リテ、愛馬ノ危キ命ヲ取
留メタリ。此馬ハ不思議ノ病ニ罹リテ俄カニ狂ヒ死セシヲ、人ガ三十人長キ桿ヲ持チテ
三十里東ノ方ノ森林ニ入り、其桿ヲ以テ森ノ樹ヲ叩ケバ猿ニ似タル一疋ノ獸現ハレ出ヅ。
其獸ヲ連レ來リテ死馬ノ前ニ置ケバ、鼻ヲ馬ノ軀ニ當テ、息ヲ吸ヒ、馬ハ忽チニシテ蘇
生スト云ヘリ〔獨異志〕。郭撲ノ時代ハ即チ「パンチャタントラ」ガ印度ニ於テ編述セラレ、

馬醫

馬ノ神

又菩薩本行經ガ支那ニ於テ翻譯セラレタル時代ナリ。而モ佛典ノ既ノ猿ニハ何ノ爲ニ之
ヲ繫グカヲ説明セザルニ反シテ、道士教ノ行法トシテハ此ノ如ク記述セラレタリ。馬ニ
災ヲ與フル神アルコトハ更ニ其以前ヨリノ支那ノ信仰ナリシニ似タリ。馬歩ト云フガ即
チ其神ノ名ニシテ、毎年冬季ニ既ノ司ノ之ヲ祭リシコト周禮校人ノ章ニ見ユ。馬歩神ノ
歩ハ醜ニ同ジ。馬ノ病又ハ田ノ蟲ノ發生シタル時ニ祭ルベキ災害ノ神ナリ〔補註相續經七〕。
後世趙宋ノ代ニ至リテハ馬歩神ニ對シテ馬樞神ガ祭ラレ、民間ノ信仰ハ善惡二道ノ分立
ヲ示セリ。馬樞神ノ樞ハ既ニ於テ馬ヲ繫グ木ノコトニシテ、日本ニテハ之ヲ「サル木」ト
云フ。此神ノ像ハ人ノ形ニシテ兩手ニ劍ヲ持チ、兩足ノ下ニ猿ト鶴トヲ踏ミテ立ツト
云ヘリ〔應添壘抄三〕。猿ハ則チ災害ヲ除クト云フ神ノ力ヲ表現シタルモノナランガ、鶴
ハ全ク其趣旨ヲ解スル能ハズ。或ハ是レ馬ノ神ト水ノ神トノ相互關係ヲ推測セシムベ
キ材料ニハ非ザルカ。未ダ旁證ヲ知ラズト雖一應之ヲ假定シテ進マント欲ス。馬樞神ト
云フ唐ノ神ハ我邦ニモ正シク之ヲ輸入セリ。例ヘバ野州ノ大蘆川ノ谷、武州秩父ノ山村

サル木

蝗ノ神

馬力神

ナドニ於テ、馬力神ト刻シタル路傍ノ石塔ノ近年ノ建設ニ係ル者ヲ見ル。是レ察スルニ馬ニ牽カシムル荷車ヲ人ノ曳ク人力ニ對シテ馬力ト呼ブニ至リシ新時代ノ一轉訛ニシテ、馬標神ノ神號ガ文字無キ平民ノ耳ニ馴レタル語ナリシ證トスルニ足ル。陸奥三戸郡三戸町大字川守田村字元木平ノ宗善ノ祠ハ、明治維新後改メテ馬力神社ト稱ス。寛保三年ニ立テタル春砂國ノ名馬ノ碑アリ。中央ニ馬頭觀世尊ト刻シ、其傍ニ鹿毛二百九歳長五尺九寸五分トアリ。天和二年ニ四代將軍ヨリ贈ラレタル「ハルシヤ」ノ種馬ニテ、死後此地ニ瘞メ今モ正月十六日之ヲ祭ル。塚ノ上ニ南向ノ松アリ。馬ノ靈故國ヲ慕フガ故ニ枝葉皆南ニ靡ケルナリト云ヘリ〔藤部五郡小史〕。

勝善神

名馬長壽

猿

猿舞由緒

猿ヲ既ニ繫グノ風習ニ次ギテ、第二ニ考察スベキハ猿牽即チ既ニ來テ猿ヲ舞ヘシムル職業ノ事ナリ。今日ニ於テハ猿牽ハ將ニ猿芝居ニ進化セントスルノ觀アレドモ、其本來ノ役目ハ實ニ既馬安全ノ祈禱ニ外ナラザリシナリ。毎年正月三日ノ伊勢兩大神宮ノ猿ノ舞、同ジク禁裏ノ御物始ノ三番ハ、何レノ世ヨリ始リシカハ知ラズ、兎

猿屋町

ニ角猿飼ノ徒ノ眉目トスル所ナリキ〔遠習軒記上〕。但シ此ニハ既ノ祈禱ヲ目的トセシコトハ見エザレドモ、其他ノ場合ニハ常ニ武家百姓ノ既ニ來テ舞ヒシナリ。徳川將軍家ノ出入ノ猿屋ハ淺草猿屋町ニ住セシ瀧口長太夫ナリ。天正十八年入部ノ節ヨリノ由緒アリテ幾度ト無ク城内ニ出頭シテ馬ノ病ヲ祈禱セシ猿屋ナリ。常ノ年ニモ正五九月ノ三度ツツ大小ノ武家ヲ廻リテ猿ヲ舞ヘシム〔彈左衛門書上〕。駿府靜岡ニ於テモ猿屋町ト云フ處ニ猿屋惣左衛門ト云フ今川家以來ノ既師居住セリ〔駿國雜志七〕。紀州ニテハ海草郡貴志村大字梅原ノ大歲神社ノ南ニ猿舞師ノ有名ナル者住ス〔紀伊國續風土記〕。家ノ名ヲ小山ト云フ。小山氏單ニ和歌山ノ城下ニ出ヅルノミナラズ、廣ク上方地方ニ於ケル猿引ノ本山タリ。近江犬上郡高宮村ノ猿引式部ハ本名ハ小山右京、彦根井伊家ノ代々ノ猿屋ナリ。藩祖ニ隨伴シテ上野ヨリ來ルト云フ。最初今村小兵衛ノ下ニ附キテ其長屋ニ住ミ、後ニ高宮ニハ移リシナリ。例年正月ノ三日ニハ井伊家御厩ノ祈禱ヲ勤メ、次ニ今村氏ニ行キソレヨリ諸家中ヲ廻ル。神祇官ヨリ特ニ烏帽子白丁ヲ許サレ、正月五日禁廷ノ猿能ニハ猿引ノ惣司武

猿能

猿屋部落

井兵庫頭ヲ助ケ五人ノ役者ノ一人タリ。高宮ノ小山右京ハ笛、尾州清須ノ小山左京ハ太鼓ノ役ナリ云々〔淡海木間撰二〕。加賀金澤ノ既ノ祈禱ハ、越中射水郡二上村ノ山町ト云フ部落ヨリ出ル猿舞之ヲ勤ム。毎年正五九月ノ三度先ヅ前田家ノ既ニ於テ猿ヲ舞ハシメ、ソレヨリ家中村々ヘモ廻ル。其猿屋ノ名前ハ昔ヨリ七ト呼ベリ〔越ノ下草下〕。上杉家ノ猿牽ハ米澤市猿ヶ町ニ住スル高田彦兵衛外四人ノ者ナリキ。家祿トシテ御藏米二俵ヅツヲ下サレ、春ハ城ヘ出デテ御厩ヲ祝ヒ、次ニ御大家ヲ廻リ、町方ニテハ寺島半七郎、在方ニテハ馬持百姓ノ家々ヲ廻リタリ〔米府鹿子四〕。此等ノ由緒アル猿牽ドモハ其後如何ニ成リシヤラン。貴志ノ小山甚兵衛氏ノ末裔ノ如キハ、今モ立派ナル役人ナレドモ、家ノ歴史ハ夙ニ忘却シ了ルト云ヘリ。其他ノ地方ニ至リテハ思フニ一層激烈ナル變遷ヲ經タルナルベシ。

世中大平ト成リテ牛ガ増加シテ馬ガ減少シ、而モ猿屋ノ眷屬ハ次第ニ國々ニ多クナリシ結果トシテ、由緒ヲ重ンジ馬ヲ大切ニスル大名タチガ猿舞師ヲ扶持シテアリシ時代ニ

猿屋家筋

スラ、彼等ハ既ニ人ノ既ノミヲ譽メテハ暮スコト能ハザリシナリ。況ヤ今ハ生活ノ烈シキ新時代ナリ。轉業廢業ヲ敢テスルニ非ザレバ則チ追々ト所謂猿芝居ノ方ニカヲ用キ、猿ニ女ノ鬘ナドヲ被ラセテ、馬以外ノ者ノ心ヲ樂シマシメネバナラヌハ自然ノ傾向也。但シ世ノ季ニナリテモ昔ト變ラザルコト唯一ツアリ。即チ猿牽ノ職業ガ終始一定ノ家筋ニ限ラレテアルコト是ナリ。此ハ必ズシモ此職ノ下賤ナルガ爲ニハ非ザルベシ。人間ニ似タリト言フトモ到底猿ハ獸ナリ。之ヲ教育シテ舞ヲ舞ハシムル迄ニハ多クノ口傳ト練熟トヲ必要トス。誰ニテモ即座ニ猿屋トナルト云フコトハ不可能ナリ。加之既ノ祈禱ニハ猿ノ舞ト共ニ更ニ六ツカシキ修法アリ。昔ハ猿引ガ馬相及ビ馬醫ノ術ヲ兼ネ行ヒシガ如シ。即チ近キ頃マデ博勞ノ徒ノ從事セシ職務ナリ。猿舞ト馬醫トノ間ニ分業ガ行ハレテ後モ、尙猿屋等ハ此種ノ故實ニ通ジタリシ上ニ、更ニ既ノ神トシテ勝善神ト云フ神ヲ祀リ、勝善經ト云フ經ヲ讀ムガ其常ノ任務ナリシナリ〔猿屋惣左衛門傳書〕。勝善又ハ蒼前ト云フ神ハ奥羽地方ノ村里ニ於テ馬ノ保護者トシテ今モ崇祀セラル。其由來ハ不明ナレ

馬醫

勝善神

葦毛馬

ドモ、自分ノ推測ニテハ聽^{ソウセン}即チ葦毛^{ヨウモ}四白^{ヨウジロ}ノ馬ナラント思フ。葦毛ハ古來ノ馬書ニモ七
 聽八白トアリテ、齡八歳ニ達スレバ白馬トナル。馬ノ最モ靈異ナルモノト認メラレ、多
 クノ地方ニ於ケル馬ノ神ノ正體ナリ。既師ノ猿牽ハ言ハマ之ニ仕フル巫祝ニシテ、現今
 ノ思想ニ於ケル遊藝人ニテハ非ザリシナラン。西京ニテハ因幡堂藥師ノ町ニ住スル山本
 七郎右衛門、及ビ伏見ニ住スル猿牽ノ如キモ、晴ノ儀式ニハ裝束ヲ着ケテ出頭セリ〔遠碧
 軒記上。併シ片田舎ノ猿牽例ヘバ甲州西山梨郡千塚村ノ守山野太夫ノ如キハ、刀ヲ差シ
 麻上下ヲ着テ其上ニ袈裟ヲ掛ケタリト云フ〔裏見寒話四〕。其出立チノ此ノ如ク頗ル異様ノ
 モノナリシヲ見テモ、伊達ヤ物好ニテハ無カリシコトヲ察スルニ足レリ。

守札ヲ配ル職業

維新以前ニハ右ノ甲州ノ猿牽ト同様ニ、半僧半俗トモ謂フベキ

鉦打ノ類

生活ヲ營ム一種ノ階級ノ人民頗ル多カリキ。關東ニテハ鉦^{カネウチ}打又ハ磬^{ケウ}叩ト云ヒ、西國ニテ
 ハ茶筌又ハ鉢屋ナドト云フ者モ皆此類ニ數フベシ。其他「エビス」ト云ヒ、「ソキ」ト云
 ヒ、「シユク」ト云ヒ、「シキ」ト云ヒ、婦人ニテハ「イタコ」「モリコ」ナド呼ブ者アリ。

初穂

名稱ニモ業務ニモ無數ノ種類ハアリシガ、一般ニ在家ニ住ミ配偶者ヲ持チナガラ本尊ヲ
 人ニ拜マセ、祈禱ト占ノ術ニ通ジタル者多ク、常ハ農作ヲ營メドモ主タル生活ハ宗教的
 ノモノニシテ、殊ニ色々ノ護符ノ類ヲ遠近ノ民家ニ配リテ僅カヅツノ初穂ヲ集ムルヲ專
 ラトス。明治ノ代トナリテ法令ヲ出シ、此徒ノ全部ニ對シテ職業ノ繼續ヲ禁止セシガ、
 其以前徳川幕府ノ時代ニ於テモ、既ニ大社大寺ノ勢力ニ壓迫セラレテ著シク其數ヲ減ジ、
 或ハ又家傳ノ由緒ヲ忘却シテ次第ニ尋常物實ノ仲間ニ零落セシ者無キニ非ズ。併シ壓迫
 ノ比較的輕微ナリシ種類又ハ地方ニ在リテハ、此者ノ一類モ頗ル蔓延シテ、單ニコソコ
 ソト札ヲ配リテ廻ルノミニ非ズ、村人ニ勸メテ色々ノ神ノ爲ニ小サキ祠ヲ建テサセ、自
 分ノ家ニモ夫々權現ヲ祀リテ信心ヲ誘ヒタリシ例多シ。近世ニ及ビテ彼等ガ中ニモ佛教
 ト結合シ、寺院ノ庇護ノ下ニ立チテ社會上ノ地位ヲ維持セントセシ者アリキ。之ヲバ特
 ニ修驗者行人又ハ行者ナドト呼ベリ。山ニ臥ス故ニ山伏ト云フ者即チ是ナリ。所謂山伏
 ニモ寺ト似タル住所アリ、其生活ハヨホド僧侶ト似タル處多クナリシヨリ、今ノ人ハ之

山伏

ヲ僧侶視スルガ常ナレドモ、所謂本當二山ノ山伏ナルモノハ後世ノ從屬ニシテ、此以外ニモ何レノ佛教ニモ附隨セズ、低キ身分ニ居タル野山伏ナル者近キ世マデ田舎ニ有リテ、琵琶法師ソレ等ハ亦全然札配リヲ以テ生計ヲ立テタリシナリ。又盲法師ノ琵琶ヲ彈ク者モ此類ナリ。彼等ガ一部ハ殆ド信ジ難キ由緒ヲ主張シテ直接ニ江戸幕府ノ保護ヲ受クルコト、ナリ、何ノ札ヲモ配ルコト無クシテ唯從來ノ配當ノミヲ徵集シ居タリシモ、此同類ニモヤ

ハリ別ニ一派ノ在野座頭アリテ、昔ノ儘ニ土地ノ神籠ノ神ニ琵琶ノ曲ヲ手向ケテ祈禱ヲ爲シ、札ヲ配リテ其生活ヲ續ケ居タリシナリ。

此等ノ配札者ハ昔ハ悉ク陰陽師ヨリ分レ出デタリシモノ、如ク、後世マデモ其多數ハ陰陽道ノ總管長タル土御門家ノ支配スル所ナリキ。例ノ猿牽職ノ如キモ亦梓巫ヤ萬歳師ナドト共ニ、正シク其中ノ一種ナリ。此徒ハ何レモ自分ノ持場々々アリテ、祈禱ヲシタル札ヲ配布シテアルク外ニ、宗教家ニモ似合ハズ舞ヲ舞ヒ歌ヲ歌ヒテ家々ヲ巡ルガ常ノ業體ナリシナリ。後世歌舞ト配札トガ次第ニ各一方ニ分ル、コト、ナリタレドモ、猶籠

拂ト云フ巫女ノ如キハ近キ頃マデ民家ニ札ヲ配リニ來リ、且ツ籠ノ前ニ於テ鈴ヲ振り舞ヲ舞ヘリ。舞神子家職ニ關スル安永二年ノ田村八太夫掟書ニハ、珠數占相勤ムベキ事繪馬配ルベキ事ナドトアリ〔祠曹雜識三十六〕。寺社方ニ勤務シタル稻葉丹後守ノ手控ニハ、同

ジク梓女ノ家職トジテ、繪馬ト申シテ猿馬ヲ牽キ候繪ヲ正月配リ候事トアリ〔寺社雜徑〕。之ニ由リテ思フニ、右ノ猿牽職ノ輩モ以前ハ既ノ守護ノ札ヲ配リ居タリシ者ナルベシ。備後ノ福山領ニテハ以前ハ正月ニ猿牽猿ヲ負ヒテ農家ニ來ル。或ハ馬屋ノ祈禱トテ猿ヲ連レ參リ、鹽ヲ振り何カ唱ヘテ猿ヲ牽ク人ノ畫ヲ貼附ク。猿牽ニハ頭アリ。今ノ蘆品郡有磨村大字有地ニ居住セリ。此者藩主ノ馬ノ祈禱ヲスルニ、正五九月帶劍袴ニテ既ヘ罷リ出デ、幣四本馬ノ繪四枚差上ゲ何カ唱ヘゴトヲ爲セシトナリ〔風俗問狀答書一〕。蓋シ猿ガ御幣ヲ擔ギテ片手ニ馬ノ綱ヲ曳ク所ノ繪紙ノ如キハ、元ハ皆此者ノ手ヨリ貰ヒ受ゲテ之ヲ既ノ戸口ニ貼リシモノナラン。古代ノ板繪ハ無造作ニ粗末ナル者多シ。今若シ武藏西多摩郡西秋留村大字引田ノ山王社ノ天正十七年ノ繪馬ノ如ク、御幣ヲ手ニセザル猿ガ



馬繪古社王山田引州武

リヨ稿記土風武國新

馬ヲ曳ク繪札
ノ古キモノア
リキトセバ、
河童駒引ノ傳
説ノ如キハ之
ヲ發生セシム
ルコト極メテ
容易ナリシナ
ルベシ。即チ
馬ガ急病ノ爲
ニ騰リ狂フ處
ヲ猿ガ取鎖メ

武州多西引田村。當領主日奉之朝臣。平山右衛門大夫也。此家中其令知行當所内、有山王權現。古跡中絶平久者也。亦信心事得心。過去因現在未來業。今歲天正十七己丑。奉再興新廟一字。次其自男角藏者。十七歳而刺之。奉寄海當社也。仍而如件。甲州鶴郡萬川祖生。志村肥前守。所願成就皆令満足。

引田眞照寺

景元(押)

ントシテ居ルモノカ、ハタ又猿ニ似タル獸ガ馬ヲ捕ヘ殺サントスルヲ馬驚キテ之ニ抵抗セントスルノ圖ナルカ、由來ヲ忘却シタル者ニハ一見シテ之ヲ判別スルコト容易ナラス。或ハ猿ノ形ガ甚ダ小サクシテ如何ニモ力無ゲニ見エ、且ツ馬ノ方ニ向ヒテ垂レ下ルヤウニシテ居ルヲ見テ、此ハ是レ怪物敗北ノ様ヲ描キタル歴史畫ナルベシト速斷セシ者無キヲ保セザルナリ。而シテ猿ハ河童ノ強敵ナリト云フ一説、又ハ紀州田邊邊ニ於テ猿ト河童トハ兄弟分ナリト云ヒ、猿河童ヲ見レバ急ニ水中ニ飛入ラントスルガ故ニ、猿牽ハ何レモ川ヲ渡ルコトヲ非常ニ忌ムト云フ説ノ如キ(南方熊楠氏報)、亦此繪札ヲ猿牽ガ配リシカト想像セシムベキ一材料ナリ。又多クノ厩ノ守札ノ中ニハ、駒曳ノ外ニ鶴鴿ヲ蹈マヘタル馬標神ノ像モアレバ、或ハ單ニ勝善經ナドノ呪文ノミヲ書シタルモアリテ、此ダニ貼置ケバ牛馬ノ災難ハ決シテ無シト信ゼシコトガ、終ニハ此札ヲ以テ河童降參ノ怠狀ノ如ク言傳フル原因ト爲リシモノカ。長州椿郷ノ河童ノ手形ノ如キモ、之ヲ板行シテ希望者ニ頒チタリト云フ以上ハ、恐クハ亦右ノ配札ノ一種ニシテ、此等猿屋ノ手ニ由ツテ馬

手形ハ守札

守札ヲ配ル職業

持百姓ノ家ニ配布セラレシモノナルベシ。長門又ハ周防ノ山村ニハ、猿牽ガ猿ヲ調教訓練スル猿ノ學校ノ如キモノアリ。入學者ハ多ク九州方面ヨリ來ルトノコトナリ〔石黒忠篤氏報〕。兎ニ角所謂「エンコウ」ト縁故ノ淺キ地方ニ非ザルコトハ確カナリ。

鞆猿根原

既ノ祈禱ニ關係スル巫祝ノ中ニ、今一種ノ部類アリ。ソハ今日モ隨分

萬歳師

鞆猿

數多キ春ノ初ノ萬歳師ナリ。河童ノ手形ト誤ラレタル牛馬安全ノ守護札ヲ民家ニ配リシハ或ハ此輩ノ所業ナリトモ想像スルコトヲ得。而シテ此ニモ亦少々ナガラ猿ノ因縁ハアルナリ。能ノ狂言ニ鞆猿ト云フ一曲アリ。アル我儘ナル大名、猿牽ノ猿ヲ見テ鞆ニ張りタケレバ其皮ヲ呉レヨト言フ。猿牽ハ驚キテ色々ト詫言ヲ爲シ辛ウジテ勘辨シテ貰ヒ、其禮ニ猿ヲ舞ハスト云フ趣向ナリ。此狂言ノ猿屋モ腰ニ御幣ヲ挿シタリ。歌ノ文句ニハ既ヲ譽メ馬ヲ祝スル語多シ。狂言ハ必ズシモ有力ナル史料ト認ムル能ハザルモ、之ヲ見レバ鞆舞ノ根原ハ此時ノ猿ノ皮事件ニ在ルガ如クモ考ヘラル。然ルニ右ノ「ウツボ」ノ舞ナルモノハ、實ハ古クヨリ存在セシ既祈禱ノ爲ノ宗教上ノ舞ナリシナリ。越前今立郡味

野大坪

間野村ノ野大坪及ビ上大坪ノ二大字ハ、所謂越前萬歳ノ郷里ナルガ、此地ノ住民ガ自ラ記録シタル由緒書ヲ檢スルニ、地名ノ大坪ハ即チ右ノ宇津保舞ノ「ウツボ」ニ同ジ。彼等ノ先祖河内首某ナル者ハモト朝廷ノ馬飼部ナリキ。或時皇子御寵愛ノ馬物ニ驚キテ、秣モ食ヘズ病附キシヲ、此者其馬ノ前ニ進ミテ宇津保ノ舞ヲ舞ヒシカバ、忽チニシテ氣力ヲ恢復シ一命ヲ取留メタリ。ソレヨリ吉例トナリテ御既ノ祈禱役ヲ命ゼラレ、野宇津保萬歳ノ稱號ヲ賜ヘル。其後賴朝公ノ將軍時代ニハ鎌倉ニ召サレ、正月御初乗ノ式ニ祝言ノ禱ヲセシ功ヲ以テ、證文士ト云フ位ヲ授ケ且ツ萬歳樂ヲ舞フコトヲ許サル云々〔今立郡誌〕。此宇津保ノ舞ハ人ガ舞フモノニテ、猿トハ關係無キガ如クナレドモ、彼等ガ其家ノ神トシテ天鈿女命即チ世ニ猿田彦神ノ妻トモ謂ヒ又猿女君ノ祖先トモ謂フ女神ヲ祀リテアルコトハ頗ル注意ニ値セリ。此徒ノ既ノ舞ガ何故ニ古クヨリ宇津保ト稱セシカハ誠ニ決シ難キ問題ナリ。試ミニ僅カナル手掛リニ由リテ想像ノ說ヲ立テンニ、鞆ニ猿ノ皮ヲ張ルコトハ決シテ狂言ノ大名ノ思附ニ非ズ。既ニ源平盛衰記ノ中ニモ猿ノ皮ノ鞆ト云フ

猿皮鞆

コト見エタリ。而シテ猿ニハ限ラヌコトナレドモ、總テ鞆ニ毛皮ヲ掛ケタルヲ名ヅケテ騎馬鞆ト云ヒ、其他ノモノヲ大和鞆ト云ヘバ〔武家名目抄〕、馬ニ騎ル武士ハ特ニ猿ノ皮ヲ掛ケタル鞆ヲ携ヘテ馬ノ守護ト爲シ、馬ノ病ナドノ折ニモ自然ニ之ヲ用キテ舞フコトトナリシヨリ、其舞ヲモ「ウツボ」ト名ヅケシモノナランカ。

骨足ラズ

同ジ野大坪ノ記録ノ中ニ又左ノ如キ一節アリ。曰ク鎌倉殿ヨリ頂戴セシ證文士ノ免許狀ハ扇子ノ面ニ認メテアリキ。然ルニ不幸ニモ其扇ノ骨ガ一本損ジテアリシ爲ニ、且ツハ自分等ガ品格ヲ重ンジテ近村ノ農民トノ交際ヲ避ケタリシ爲ニ、世ニハ誤リテ野宇津保證文士ハ骨一本足ラズト唱ヘテ此部落ヲ輕蔑擯斥シ、サモく賤民ニテモアルカノ如キ取扱ヲ受ケ來リシハ残念ノ事ナリトアリ。此記事ヲ裏面ヨリ觀レバ、當ト不當トハ別問題トシテ、世間ニテハ此仲間ヲ目シテ、所謂骨ノ一枚不足セル種族ト爲セシ事實ハ明カナリ。萬歲ト「シヨモジ」ト同類ナルコトモ之ニ由リテ知ルコトヲ得タリ。「シヨモジ」ハ普通ニハ唱門師ト書キテ、二百年ホド以前迄京都及ビ其近國ニ若主セシ特殊ノ部客ナ

唱門師

ヒジリ

リ。塵添壺囊抄卷十三ニモ、家々ノ門ニ立チ金鼓ヲ打チ妙懂ノ本誓ヲ唱ヘ阿彌陀經ヲ誦スル者ナレバ門ニ唱フト書クベキナリトアリテ、今ハ多ク之ニ從ヘリト雖、其名稱ノ由來ハ峯相記ナドニ「闇證ノ禪師誦文ノ法師」ナドトアル誦文師ナランカト思ハル。即チ經文ヲ暗誦スルモ、學ナク問シテ一宗ノ趣ヲ解セザル身分低キ「ヒジリ」ノコトナルベシ。此モ亦夙クヨリ陰陽家ノ支配ノ下ニ立チ、正月ノ左義長又ハ土用ノ水合セノ折ニハ、宮廷ノ御階近クマデモ罷出デタリシト云ヘリ〔和訓栞〕。而シテ其子孫ト云フ者今ハ何レノ地方ニモ殘存セザルハ、多分ハ「ハカセ」トカ、「キンナイ」トカ、「シユク」トカノ別種ノ名稱ヲ以テ呼バレタル結果ニシテ、此ト共通ナル業ヲ營ミ乃至ハ唱門師ノ一類ナリト稱セラル、者ハ近キ頃マデ多ク存セシナリ。此等ノ輩ハ何レモ未ダ既ノ祈禱ニ關係セシ證據ヲ見出サザレドモ、越前ノ宇津保舞ノ故事ヲ考ヘ合ストキハ、猿ガ馬ヲ曳ケル繪札ナドヲ配リシ者ハ、必ズシモ專門ノ猿屋ノミニハ限ラザリシヤモ知リ難シ。カノ梓神子ノ一派ガ此札ヲ持チテアルキシ外ニ、關東ニテハ神馬ノ守札ハ舞太夫モ「エビス願人」モ亦

ハカセ
キンナイ

エビス願
人

之ヲ配リタリシナリ。サレバ所謂駒引錢ノ中ニ神主又ハ農夫體ノ者ガ口綱ヲ取居ルモノノ如キハ、必ズシモ沐猴ノ冠シタル者ニハ非ズシテ、右ノ證文士一輩ノ在野巫祝ノ生活ヲ寫セシモノトモ見ルコトヲ得ベキナリ。

河童ノ神異

サテ立戻リテ愈々河童傳説ノ結末ヲ附ケント欲ス。猿ハ既ニ既馬ノ保

護者ナリトスレバ、假令毎回ノ計畫ハ失敗ニ終リタリトハ言ヘ、常ニ馬ノ害敵ヲ以テ自ラ任ズル河童ヲ指ザシテ、猿ヨリ變形シタルモノナリト断定スルハ無理ナルニ似タリ。

善神惡神

併シナガラ日本ニハ限ラズ、多クノ國ノ民間ノ神様ニハ佛様ト違ヒテ往々ニシテ善惡ノ二面アリ。而モ人ノ生活ト最モ多ク交渉スルハ、神ノ本來ノ親切ニハアラデ其時々ノ憤怒ノ威力ナリ。此性癖ノ殊ニ顯著ナルガ恐クハ所謂枉津日ノ神ニシテ、人ハ其兇害ヲ輕減セラレシガ爲ニ村ニ夥シク其祠ヲ齋ヒ、言ハ、惡神ノ消極的保護ヲ仰ギシナリ。思慮淺キ者ノ考ニテハ、善神ニハ何ノ祈願ヲ掛ケズトモ當然ノ恩惠ヲ期スルコトヲ得ベシ、之ニ反シテ惡神ノ方ハ早ク手ヲ廻シテ置カザレバ何ヲシタマフカ分ラズ。故ニ常ニ其御

神送り

機嫌ヲ取りテ良キ程ニ他ノ方面ニ注意ヲ轉ゼシムルノ算段ヲスルナリ。其神ニシテ移動性ノ神ナラバ鉦鼓歌舞ヲ以テ之ヲ村ノ境マデ送り出シ、若シ又土著ノ神ナラバ無慈悲ノ地頭ヲ戴キシ時ト同ジ格ニテ、最モ謹慎シテ年々ノ祭ヲ勤メ、聊カニテモ其怒ヲ起サズ其思遣リ無キ神罰ヲ蒙ラザルコトニ熱心ス。要スルニ憤ヲ抑ヘ恨ヲ寬恕スルコトモ亦大ナル神徳即チ人間ノ懇請スベキ神ノ好意ナリ。此故ニ假ニ馬ノ神ノ特質ニ中世何等ノ變遷無カリキトスルモ、猶河童駒引ノ傳説ヲ發生セシムルニ些シモ差支無シ。殊ニ所謂猿神ノ如キハ勿論神代ノ最初ヨリノ我神ニ非ズ。イヅレノ時代ニカ入り來リシ客神ノ一種ニシテ、十分ニ氣心ノ知レヌ神ナリ。從ツテ我々ノ祖先ガ如何ニ其信仰ヲ受傳ヘタリシカハ、到底想像ノ外ニ在リ。或ハ油斷ノナラヌ荒神ナルガ爲ニ、一應ハ其護符ヲ有難ク頂戴シタルモ、内心ノ不服ヲ自制スルコト能ハズシテ、寧ロ詫證文ノ誤解ヲ歡迎シ且ツ其詮議ニ手ヲ盡シ、モシクハ又其力量ノ必ズシモ怖ル、ニ足ラザルヲ感ズルヤ、頻リニ某地ニ於ケル「ヒヤウスヘ」ノ約束ヲ云々シテ、旗鼓堂々ト之ニ對シテ戰ヲ宣シタルモノ

ナリトモ見ルコトヲ得ベシ。

人ヲ化カ
ス動物

事茲ニ及ビテハ河童ハ到底動物學上ノ問題ニハ非ザルナリ。草木言問フ神代ナラバイ
ザ知ラズ、今時河童ガ人間ト會話ヲ爲シ、モシクハ人ヲ欺キ、或ハソコニ居リナガラ姿
ヲ見セズナドト云フガ如キ、是レ所謂靈異ニ非ズシテ何ゾヤナリ。我々祖父母ノ頃マデ
ハ、狐狸貉ノ類ハ獸ニシテ兼ネテ人ヲ魅スルノ力アルコトヲ許サレタリシモ、仔細ニ考
慮ヲ加フレバ、此ハ他ノ一面ニ動物ヲ神ニ齋クダケノ覺悟アリテ始メテ現ハレ來ルベキ
思想ナリ。木ノ神モ蟲ノ神モ皆同ジコトニテ、拜スレバコソ崇ルト云フコトモアルナレ。
語ヲ換ヘテ申サバ、惡ノ力モ世ノ進ムト共ニ漸ク衰ヘ行クベキモノナリ。此古風ナル信
仰ノ斷絶シテヨリ後ハ、傳説ノミガ其跡ニ取殘サレテ只ノ小説トシテ存在シ、假令最初
ニ之ヲ語リシ人ハ如何ニ眞面目ナリキトスルモ、後世ニ於テハ單ニ興味ノミヲ以テ之ヲ
語り傳ヘ、又興味ヲ以テ自由勝手ニ之ヲ變形シ行クコトモ無シトハ云フベカラズ。故ニ
諸國ノ澤山ノ河童談ヲ比較研究スルニ非ザレバ、何ノ爲ニ斯ル話ガ發生シタルカヲ理解

スルコト能ハザルハ當然ノ事ナリトス。

河童人ニ
憑ク

河童ノ社會上ノ地位ト云フベキモノニモ地方的ニ餘程ノ高下アリ。東北ノ河童ハ概シ
テ普通ノ獸類以下ニ取扱ヘル。化ケルトハ言ヒテモ狐ナドニ比レバ遙カニ拙劣未熟ナ
リ。之ニ反シテ西部日本ニ向フニ從ヒテ、次第ニ其神異的分子ヲ増加スルガ如シ。二三
ノ地方ニ於テハ河童ハ大神「ヲサキ」又ハ「トウビヤウ」ナドノ如ク自在ニ人ニ憑キ、頗ル
馬ノ因縁ヲ離レテ人間ノミヲ目ノ敵トスル風アリ。土佐ニテハ婚姻ノ相談ナドハ決シテ
之ヲ河童ニ聞カシムベカラズ。若シ不注意ニシテ彼等ノ立聞キスル所トナレバ、必ず嫁
入婿入ニ化ケ來リテ人ヲ迷ハス。故ニ一般ニ密談ヲスルニハ先ヅ弓弦ヲ鳴ラシテ此徒ヲ
退散セシムベキナリ〔土陽陰見記録下〕。肥後ノ葦北郡ナドニハ、他國ノ天狗話ノ多クヲ以
テ、「カゴ」即チ河童ノ所爲ニ歸セリ〔日本周遊紀談〕。肥前五島ノ富江ニハ河童ノ築キタリ
ト云フ城ノ城壁今モ存在スト云フ〔同上〕。又西國ニテ川ニ火トボリ芥ナドヲ燒クガ如キ
アリ。船近ヅクコト三四尺ニナリテ消エ、漕ギ過ダレバ又元ノ如シ。之ヲ「川ワラフ」ノ

カウゴ石

仕業ナリト云フ〔觀惠交話下〕。即チ不知火モ亦河童ノ力ニ出ヅトスルナリ。加藤清正ニ
二字ヲ奉リタル河童ノ頭目九千坊ノ如キモ、亦恐クハ一城ノ主ナルベシ。人間ノ武家ガ
迫毎ニ割據シテアリシ時代ニ、河童ノ方面ニハ既ニ或程度迄ノ中央集權行ハレ、此ノ如
キ大酋長ヲ推戴シテアリシナリ。

水神

河童ノ威風ノ最モ行ハレ居タル南部九州ニ於テハ、水神ト云ヘバ即チ河童ノコトナリ。
田島收穫ノ季節ニハ地面ノ西ノ方ヲ一鎌ダケ刈殘シ、之ヲ其水神ニ供フル慣習アリキ〔笈
埃隨筆二〕。肥後ノ北部ニ在リテハ、河童ヲ水邊ニ祭レドモ水神ハ河童ニ非ズ。毎年ノ夏
島ノ初物ヲ串ニ挿シテ溝川ノ堤ナドニ立テ、置ク〔高木敏雄氏談〕。此モ亦水神ノ信仰ニ基
クモノナレドモ、此ハ寧ロ河童ニ對抗スベキ勢力トシテ之ヲ祭ルガ如シ。但シ河童モ水
織ノ忌
ノ神モ共ニ鐵類ヲ忌ミ、水神ノ供物ト河童ノ供物トノヨク相似タルヲ見レバ、本來一ツ
ノ神ノ善惡兩面ガ雙方ニ對立分化シタルモノト解スルモ必ズシモ不自然ナラズ。河童ハ
植物ノ忌
又角豆ヲ嫌フ。近江ニテハ村童角豆ヲ袋ニ入レテ腰ニ下ゲ、河童ノ害ヲ防グ守トス。河

瓠

童來リテ相撲ヲ取ラント云フトキ、我ハ角豆飯ヲ食ヒタリト云ヘバ閉口シテ去ル〔土陽陰
見記録下〕。河童ハ又瓢箪ヲ甚シク嫌フ。仍テ之ヲ食ヒテ川ヲ涉ルトキハ害無シト云ヘリ
〔越後名寄十八〕。又同ジ國ニテ川々ノ渡守壺蘆ト胡麻トヲ作ラザルハ古クヨリノ習慣ナリ。
其仔細ハ川ニ潛ム河童トモ壺蘆ノ若キト胡麻ノ若葉トヲイタク忌ムト傳フル故ニ、之ヲ
作ラズシテ舟ニ乗ル人ノ安全ヲ祈ルナリ〔越後風俗志七〕。之ニ由リテ思フニ、大昔笠臣
ノ祖ガ川島川ノ虬ヲ試ミタリシ三ノ全キ瓠、或ハ河内ノ人茨田連衫子ガ河伯ヲ欺キ
得タル兩個ノ瓠ナル者ハ〔仁德紀〕、共ニ後世ノ河童ガ避ケ且ツ忌ミタル壺蘆ノ瓜ナルコ
ト大凡其疑無キニ近シ。河童ハ又麻ヲ忌ム。或人河童ヲ捕ヘ之ヲ斬レドモ通ラズ、麻穰
ヲ削リテ刺セバヨク通リタリ。又穢ノ香ヲ惡ムトモ云フ説アリ。或ハ法師ノ言ヒ始メシ
言ナランカ。河童ノ愛スル物ハ胡瓜ナリ。胡瓜アル島ニハ多ク來ル。胡瓜ヲ食ヒテ川ヲ
渡ル人往々ニシテ河童ニ取ラル、コトアリ。關東ニテハ六月朔日ニ胡瓜ヲ川ニ流シテ河
童ノ害ヲ攘ヒ得ベシト信ズル者アリ〔竹抓子四〕。此ハ恐クハ祇園ノ神ノ胡瓜ト何等カノ、

胡瓜

祇園

水天宮

關係アルベシ。自分等ノ郷里ニテハ祇園ノ夏祭ニハ胡瓜ヲ川ニ流シテ其神ニ捧ゲ、ソレヨリ後ハ中ニ蛇ガ居ルナドト稱シテ決シテ胡瓜ヲ食ハズ。此神ハ西京ノ本社ニ於テハ水ノ神トハ言ハザレドモ、田舎ニテハ此意味ヲ以テ祀ル處モアルナリ。今日ノ東京ニテハ水難除ノ守札ハ殆ド水天宮ノ一手專賣ナルガ、蟻穀町ノ流行神ガ東上シタルハ決シテ古キコトニ非ズ。有馬家ノ舊領久留米ヨリ芝ノ屋敷内ニ勸請シタルハ實ニ文化ノ某年ニ在リ。此神ノ守札ヲ碇ニ附ケテ水中ヲ探レバ、水ニ落ちタル物必ズ綱ニ掛リテ揚ル外ニ、産ニ臨ミタル婦人之ヲ載ケベ直チニ安産スナドトモ噂セラレキ(寶曆現來集七)。此神様モ亦些シク風變リナリ。郷里ノ筑後ニ於テハ元ハ尼御前社ト稱セラレ、城下ヨリ四里ホドノ上流ニ九十瀬川ト云フ處ノ水神ト夫插ノ神ナリトモ云ヒ、或ハ又九十瀬入道ハ即チ平相國清盛ニシテ尼御前ハ二位尼ナリトモ傳ヘラレ、此地方ニ分布スル平家隠里ノ傳説ト因縁ヲ結ビ附ケラレタリ(筑後志下)。今ノ久留米ノ本社ニ於テハ祭神ハ三座ナリ。中央ハ二位尼安德天皇ヲ抱キマツル像、一體ハ女院ニシテ他ノ一體ハ戎衣ヲ著ケタル平知盛

隠里

水難除

ナリ。而モ此尼御前ノ靈驗ハ弘ク水難ヲ救フニ在ルノミナラズ、殊ニ河童ニ對シテ有力ナル守札ヲ出スハ奇ト謂フベシ(校訂筑後志)。但シ此札ハ專ラ人間ノ腰ニ佩ビシムベキモノニシテ、牛馬ノ爲ニハ寧ロ冷淡ナルガ如クナレド、是レ恐クハ牛馬ノ多カラザル都會地ノ神ト爲リテ後ノ變遷ナルベシ。同ジ筑後ノ中ニテモ、八女郡光友村大字田形ノ釜屋神、即チ矢部川南岸ノ淵ニ臨ミテ構ヘラレタル水神ノ社ノ如キハ、農民ヲ相手ニ盛ニ牛馬安全ノ護符ヲ出シ、多クノ修驗者ハ其札ヲ持チテ村々ヲ廻リ、一匹一升ノ施米ヲ受ケツ、牛馬病難ト河童トノ防衛ヲ以テ任務トスル、神ノ德ヲ宣傳シツ、アリシナリ(筑後地鑑下)。

釜屋神

水神

水神ト河童トハ假ニ一步ヲ退キテ最初ヨリ別物ナリトスルモ、少ナクモ牛馬ノ災ヲ避クル爲ニ水神ニ祈禱スルノ風習ノ弘ク行ハレシ事ノミハ事實ナリ。毎年春ノ初又ハ夏ノ終ナドニ、牛馬ヲ引キテ川ニ入レ又ハ川原ニ於テ一日遊バシムルコトハ、其一年中ノ災ヲ攘フ爲ナリト信ゼラレ、農家ハ嚴重ニ此行事ヲ勤メタリ。馬少ナキ長門ニテハ牛ニ就

牛ノ正月 キテ盛ニ此事アリ。初春ニ行ハル、ヲ牛ノ正月又ハ牛ノ年越ト云フ。牛祭ト稱シテ二月

牛ノ禁忌 ニ入リテ此式ヲ擧グル村方アリ。牛神樂又ハ牛申シトモ名ヅケタリ。五月五日ト六月晦

日ト兩日牛ヲ使ハザル村ハ最モ多シ。大津郡俵山、美禰郡岩永、共和村大字青景等ニ於

テハ、端午以後八朔マデ他郷ノ牛ノ村ニ入ルコトヲ禁ジ、之ヲ犯シタル者ハ瓢箪ヲ頭ニ

ヒサコ 被ラセ牛ニ乗セテ村ヲ追放ス。又婦人ヲシテ牛ヲ使ハシメモシクハ農具ヲ掛ケタルマ、

牛ニ川ヲ渡ラシムルコトモ嚴禁ナリ。此等ノ禁條ハ農業ノ爲不利益ナリトテ、俵山ニテ

ハ天明四年ニ畔頭等ノ連判ヲ以テ之ヲ廢シタリシモ、尙且ツ人民ノ不安ヲ如何トモスル

能ハズ、四十年ノ後再ビ前ヨリモ一層八釜シキ禁止ヲ申合セタリ。此等ノ村々ニテハ六

月末日ノ牛ノ休ヲ夏越ト云フ。所謂柱松ノ行事モ夏越ト關係アリ、之ヲ行ハザレバ牛ノ

病難アリト信ゼラレ、此ヲ又牛燈ト稱ス。美禰郡赤郷村大字赤ニテハ、六月晦日ヲ夏越

ト唱へ、軒別牛馬ヲ山野ニ繋ギ休息仕ラセ候。同郡眞長田村大字長田ナドニテハ、此日

牛ノ祇園 牛馬ヲ川へ連レ行キ一日休息セシメ候云々。阿武郡大井村ニテハ六月十五日ヲ牛ノ祇園

ト稱シ、村民牛ヲ洗ヒテ地下ノ小社へ參詣仕リ、半日一日休息セシメ候ナド、何レモ村

牛ノ糞入 村ノ書上ニ見エタリ〔以上長門風土記〕。大阪附近ノ田舎ニテハ五月五日ヲ牛ノ糞入ト云フ。

鞍 例年此日ハ梅田堤へ近在ノ飼牛ニ新シキ鞍ヲ置キ、肩ニ色々ノ花ヲ結ビ附ケテ、朝ノ五

ツ時ヨリ一時バカリ此邊ノ野ニ放チ、ヤガテ牛ノ心ノマ、ニ家路ニ還ル。農民粽ヲ數多

持來リテ見物ノ人ニ之ヲ蒔散ラス。之ヲ得テ歸レバ小兒ノ疱瘡輕シトテ争ヒテ拾ヒ取ル

疱瘡 〔攝陽落穂集二〕。是レ今ヨリ百年バカリ前迄ノ風習ナリ。或ハ又之ヲ「牛カケ」トモ謂フ

牛カケ 〔攝陽見聞筆拍子三〕。紀州奥熊野ニ行ハル、「牛カケ」ハ、普通田植ノ後ニ田地ノ一部ヲ區

劃シテ之ヲ行フ。其有様餘程競馬ナドノ興行物ニ近クナレリ〔郷土研究一ノ五號川口氏〕。

洗馬 端午ノ日ノ競馬ハ必ズシモ賀茂社ノ模倣ノミニハ非ザルベシ。現在ハ如何ニモアレ、其

最初ノ動機ハ亦此邊ニ存スルニハ非ザルカ。之ニ由リテ思フニ全國ニ數多キ洗馬又ハ馬

牛首

之ヲ洗ヒテ祈禱ヲ爲セシヨリ起リシナルベシ。彼ノ陸中ノ「牛ク、リ淵」ノ如キモ、牛ヲ繫ギ置キシ水邊ノ地ト解スルコトヲ得。牛首ハ即チ牛絞ウシクビノ轉訛ニシテ、「クビル」トハ繋グト云フ方言ナラン。牛クビリ淵ト云フ地名モ亦多シ。多クノ牛池駒ケ池ノ類モ、此ノ如ク説明スルトキハ其傳説ノ全然夢語りニ非ザルコトヲ知り得ベキナリ。

河童ノ祭

所謂夏越祭又ハ牛ノ藪入ノ趣旨ハ多クハ牛馬ノ疫病ヲ防グ爲ナリト云フモ、又異ナリタル口碑ノ存スルアリ。例ヘバ備後ノ福山附近ニテハ、七月七日ニ牛馬ヲ海川ニ引入レテ置ケバ、年中河童ノ災難ニ遭フコト無シト信ゼラレタリ〔風俗問狀答書〕。曾テ河童ガ馬ヲ引込マントシテ失敗セシ古跡、土佐長岡郡ノ下田ナドニテハ、毎年六月十五日ニ家々ノ馬ヲ川端ニ引出シ、長キ綱ヲ以テ之ヲ杭ニ繫ギ置クヲ野牧ト稱シ、此日ハ又河童ノ祭ヲ營ム〔土州淵岳志〕。遭難當時ヲ記念スル爲ニ年々同ジ作法ヲ繰返スモノカ、但シハ又斯ル慣習アル爲ニ此傳説ヲ發生セシモノカ、之ヲ判斷セザルベカラザルハ我々ナリ。思フニ猿ノ水中ニ住ムニ至リシモ、段々ノ順序ヲ考ヘテ見レバ必ズシモ非常ニ不自然ニハ非

野牧

竈ノ祭

ズ。川ノ流ノ淵ヲ爲ス場處ヲ諸國ニテハ多クハ釜ト云フ。釜ハ英語ノ「ボット」ナドトハ別ニテ、周圍ヲ巖石ニテ圍ハレ一方ニノミ開ケルサマ、ホボ竈ノ形ニ似テ居ルガ爲ノ名ナルガ如ク、昔ヨリ之ヲ竈ノ神ノ祭場ニ用キタリシガ如シ。陸上ニテモ岩ノ形ノ竈ニ似タル處ヲ崇敬シタル例ハ多シ。巫女ノ宗教ニ於テハ生命ノ根原トシテ食物調製ノ爲ニ用キラル、竈其物ヲ祭ル風アリキ。貴人大家ナラバ家々ノ竈ニ就キテ其祭ヲ營ミシナランモ、一村一郷合同ノ竈祭ニハ、天然ノ地形ノ竈ニ似タル處、即チ前ニ屢々舉ゲタルガ如キ川々ノ淵、又ハ山中ノ岩組ノ中凹ナル處ナドヲ其祭場ニ選定セシモノナラン。而シテ竈ノ神ト馬トハ夙クヨリ深キ關係アリキ。此ハ馬ノ蹄ノ痕ガ昔ノ時代ノ竈ノ形ト似テ居タリシ爲カ、或ハ又竈ハ火ノ神ナルガ故ニ午ニ相當スル馬ヲ以テ其象徴トシタルモノカ、未ダ充分ニ其理由ヲ知ル能ハザルモ、兎ニ角二者ノ關係アリシコトノミハ疑無シ。馬ノ鞋ヲ作りテ初春毎ニ之ヲ竈ノ神ニ供ヘ、馬ノ繪札ヲ竈ノ傍ニ貼附ケ、或ハ又生レシバカリノ馬ノ子ヲ曳キテ竈ノ神ヲ拜マシムルガ如キ風習ノ、今モ各地ニ行ハル、モノ甚ダ多

馬ト竈

飯盛

シ。牛ニ就キテモ之ニ似タル例アリ。例ヘバ羽後北秋田郡阿仁合町ニテハ、十二月二十
 八日ニ竈ノ神ノ祭アリ。宮ノ神主ハ一枚ノ紙ニ三十六ノ牛ヲ印刷シタルモノヲ家毎ニ配
 リタリ。昔伊勢ニテ三十六頭ノ牛物ヲ運ビテ功アリ。御炊ノ神氷沼道主、三十六ノ「ヘ
 ツヒ」ノ神ヲ率キテ朝夕ノ大御食ヲ炊キ供フト云フ故事ニ基クカト云ヘリ（眞澄遊覽記ニ
 三）。但シ其故事何ニ見ユルカヲ知ラズ。此等ノ關係ヨリ察スレバ、竈ノ神ノ祭場ガ同時
 ニモシクハ時代ヲ經テ、牛馬ノ神ノ祭場トナルコト無シト云フベカラズ。而シテ所謂河
 童ガ牛馬ノ神トシテ常ニ水邊ノ祭場ニ居住スト考ヘシモ亦自然ノ推測ト謂フベキナリ。
 但シ氣紛レニ人間ノ子供ニ迄モ手ヲ出セシガ爲ニ、其正體ガ甚シク不明ト爲リ、此ノ如
 ク後世ノ研究者ニ手數ヲ掛クルニ至リシナリ。

虬ハ水神

河童ヲ猿ニ似タル物ト云フ説ノ、牛馬ノ保護ヲ祈禱スル信仰ニ出デタ
 ルコトハ、以上ノ解釋ニテ先ヅ明カニナリタリトシテ置クベシ。唯此ダケニテ濟マヌト
 感ゼラル、ハ、龜ダ川類ダト主張スル他ノ地方ノ異説ナリ。更ニ退キテ考フルニ、猿ヲ

河童ノ藥

水中ノ物トシタル理由モ單ニ竈ト馬トノ關係ヲ言フノミニテハ些シク不十分ナリ。故ニ
 今暫ク此問題ニ足ヲ駐ムルノ必要アラン。サテ河童ノ一名ヲ加賀又ハ能登ニテ「ミヅシ」
 ト呼ブコトハ前ニ唯一言セリ。能登ニテハ胡瓜ヲ食ヒテ水泳ギニ行ケバ「ミヅシ」ニ取ラ
 ルト云フ。羽咋郡堀松村大字末吉ノ川ノ邊ニ、淵端某ト云フ疍ノ藥ヲ賣ル舊家アリ。其
 家ノ先祖或日門前ノ川ニテ馬ヲ洗ヒ居タルニ、「ミヅシ」來リテ馬ノ脚ヲ纏ヒ陸ニ引揚ゲ
 ラル。捕ヘテ之ヲ殺サントスル時助命ヲ切ニ求メ、其禮トシテ疍ノ藥ノ製法ヲ教ヘタリ
 ト云フ。此藥今ハ遠ク北海道ニ迄モ販路ヲ有セリ（郷土研究一ノ四號）。コノ「ミヅシ」ハ南
 部地方ノ「メドチ」ト同ジキコト疑ナシ。南部ノ八戸邊ニテハ、川ニ泳ギテ「メドチ」ニ取
 ラレタリト云フ話、今モ毎夏絶エズアリ（石田收藏氏談）。然ルニ蝦夷ノ土人ノ中ニテモ、
 河童ヲ「メンツチ」ト呼ビ來レリ。金田一京助氏ノ話ニ、バチエラア氏ノ語彙ヲ見レバ、

メドチ

「ミンツチ」ハ單ニ湖又ハ川ニ棲ム半人半獸ノ靈物トノミアレドモ、「アイヌ」ガ之ニ就キ
 テ語ルヲ聞ケバ、全ク奥州ノ河童ト同ジク、三尺バカリノ芥子坊主ニテ其オ芥子ヲ煙管

瘡瘡神

デデモ打テバズ死ヌ者ダナドト云フ。彼等ガ傳承ニ從ヘバ、「ミンツチ」ハ元ハ草人形
 (チシナブカムイ)ナリ。昔「オキクルミ」天降りテ人間世界ヲ支配セシ時代ニ、沖ヨリ瘡
 瘡神渡リ來リ數多ノ「アイヌ」其爲ニ命ヲ殞ス。「オキクルミ」ハ乃チ六十一ノ草人形ヲ造
 リテ其瘡瘡神ト戰ヒ之ヲ逐ヒ退ケシム。其折討死シタル草人形、化シテ「ミンツチ」ト成
 ル。草人形ハ蓬ヲ十字ニ結ビテ人ノ形トシ、横ノ一本ハ即チ左右ノ手ナルガ故ニ、今モ

蓋

「ミンツチ」ハ片手ヲ拔ケバ兩手トモ拔ケルナリト稱ス。又紫雲古津ノ「アイヌ」ノ中ニハ
 又「ミンツチ」ガ人ノ家ノ好キ娘ニ掣入シタル物語アリ。「アイヌ」語ニテハ又「シリシヤ
 マイヌ」ト呼ビ、海川ノ漁獵ヲ掌ル神ナリト云ヘリ(郷土研究一ノ十二號)。此記事ノ中ニ
 テ殊ニ注意スベキハ亦例ノ河童ノ腕ノ話ナリ。内地ニテモ之ニ似タルコトヲ云フ。例ヘ
 バ強力ナル武士河童ヲ捕ヘ其腕ヲ引拔キシニ、後ニテ見レバソハ唯一本ノ藁稗ナリト云
 ヒ(日本傳説集)、又ハ河童ト相撲ヲ取りテ甚シク取リニクキハ、其兩手ガ一本ニテ左右ニ
 貫キ伸縮自在ナルガ爲ナリト云フガ如キ是ナリ。豊前耶馬溪宮園村ノ庄屋次右衛門曰ク、

河童ノ腕

河童ヲ捕ヘシ者ノ話ニ、其肩ノ骨一本ニシテ左右ニ通り、譬ヘバ手拭掛ノ臺ニ手拭ヲカ
 ケタルヤウニアリシ云々(水虎録話)。此等ノ話ノ奥羽ニ存セズシテ遙カニ九州ニ飛離レテ
 アルハ殊ニ奇ト云フベシ。中國ニテモ「エンコザル」トハ手長猿ノコトニテ、此猿ノ左右
 ノ手ハ貫通シテ一本ナルガ故ニ、梢ヨリブラ下リテ水中ノ月ヲ探ルニ便ナリナド、老人
 ノ語り聞カセシコトアルヲ記憶ス。而モ其由來ニ至ツテハ獨リ「アイヌ」ノミ之ヲ説明シ

手長猿

得テ、我々ハ未ダ之ヲ尋ネントモセザリシナリ。
 「ミンツチ」ハ日本語ノ「ミツチ」ト關係アルベキコト、「アイヌ」ノ音韻轉訛ノ法則ヨリ
 見テ露ホドモ疑ナシト、金田一君ハ言ハレタリ。奥州ノ「メドチ」ハ固ヨリナリ。加賀能
 登ノ「ミツシ」ニ至リテモ、之ヲ「ミツチ」ノ轉訛ト考フルノ外別ニ一案ノ存スル無シ。

「ミツチ」ハ我邦ニ於テハ古クヨリ之ヲ漢字ノ虬又ハ蛟ニ宛テタレドモ、單ニ其語原ヨリ
 見レバ未ダ之ヲ蛇類ニ屬スベキ理由ヲ知ラズ。本居氏ノ説ニハ、「ミツチ」ノ「ミ」ハ十二
 支ノ巳又ハ「オカミ」、「ヘミ」、「ハミ」ナドノ「ミ」ニ同ジク、モト龍蛇ノ類ノ總稱ナリ。

足摩乳
手摩乳
打出小槌

「ツ」ハ之ニ通フ辭ニシテ「チ」ハ尊稱ナリ。野槌ナドノ例ニ同ジトアレド、自分ハ其野槌ノ例ヨリ推シテ之ヲ水槌ノ義ナランカト思ヘリ。「ツチ」ノ靈物ヲ意味スルラシキ傍例ハ、出雲ノ國津神足摩乳手摩乳アリ。打出小槌ヲ如意ノ寶トスルコト、奥州ノ「イタコ」等ガ槌ノ子ニ由リテ巫術ヲ妨ゲラレシ話(佐々木繁氏談)、サテハ大地ヲ「ツチ」ト云フナドヲ思合セテ、此ノ如ク考フルナリ。歷代ノ文人タチ、其漢學ノ知識ヲ以テ頻リニ虬ノ字蛟ノ字ヲ以テ「ミヅチ」ニ宛テ、止マザリシモ、水邊ニ住スル平民ハ一向之ニ頓著セズ、何カ有リ得ベキ怪物ニ托シテ各自ノ水ノ神ヲ想像セシハ寧ロ正直ナリト云フベク、彼等ハ父祖十數代一タビモ遭遇セザル四脚ノ蛇ナドヲ、村ノ水中ニ養フコト能ハザリシナリ。而モ又否定スベカラザル一事ハ、毎年夏月ニ入ルニ及ビ、小兒婦女牛馬ノ類往々ニシテ淵ニ入りテ死シ、恰モ物アリテ其獲物ヲ求ムルガ如クナリシヨリ、「ミヅチ」ノ恐怖ハ久シキヲ經テ愈々深ク、神トシテ之ニ仕ヘ其意ヲ迎フルニ非ザレバ其災ヲ免ル、能ハズト信ズルニ至リシナリ。其時一人ノ英雄アリ、乃至ハ道力優レタル行者ノ村ヲ訪フ者アリ。

傳説ノ發
明

法ノ如ク出現シ來リ法ノ如ク兇神ヲ退治シ去ル。是レ即チ我々ガ所謂傳説ノ東雲ナリ。傳説ハ恰モ春ノ野ノ陽炎ノ如シ。能ク我等ガ望ム所ニ向ヒテ發展ス。唯夫レ陽炎ノ如クナルガ故ニ、從前ノ信仰ハ少ナクモ其形式ノ上ニ於テハ此ガ爲ニ一朝ノ變革ヲ受クルコト無ク、永ク其痕跡ヲ故土ニ留ムルナリ。天然ノ神々ガ人間ノ便宜ニ抵抗スル能ハズシテ徐ロニ其威力ヲ收メ、終ニハ腑甲斐無キ魍魎魍魎ノ分際ニ退却スルコトハ何レノ民族ニ於テモ常ニ然リ。而モ彼等ガ既ニ其結界ヲ明渡シ其犠牲ヲ思切リテ後モ、責メテハ型バカリノ昔ノ祭ヲ要求シ、且ツハ氣味惡キ儀式ヲ繰返シテ畏怖ノ記念ヲ新ナラシメ、且ツハ之ニ由リテ敗北ノ失望ヲ慰メラレントスルモノ往々ニシテコレ有リ。サレバ彼ノ馬ヲ水邊ノ枝ニ繫ギテ河童ノ祭ト稱スル土佐ノ例ノ如キモ、恐クハ又「ミヅチ」ニ對スル最少限度ノ養老金ノ類ニシテ、更ニ多クノ洗足池馬洗淵ノ地名ハ、由來不明ナル各地ノ駒繫松ナドト共ニ、年々馬ヲ水ノ神ニ供ヘタル上古ノ儀式ヲ、イット無ク農民ノ好都合ニ解釋シテ、之ヲ以テ其馬ノ災害ヲ除却スル一手段ト見ルニ至リシモノ、久シキヲ經テ再

センゾク
駒繫松

雨乞

ビ其理由ヲ忘ル、ニ至リシナルベシ。牛馬ノ首ヲ水ノ神ニ捧グル風ハ、雨乞ノ祈禱トシテハ永ク存シタリキ。朝鮮扶餘縣ノ白馬江ニハ釣龍臺ト云フ大岩アリ。唐ノ蘇定方百濟ニ攻入リシ時、此河ヲ渡ラントシテ風雨ニアヒ、仍テ白馬ヲ餌トシテ龍ヲ一匹釣上ゲタリト云フ話ヲ傳ヘタリ〔東國輿地勝覽十八〕。白キ馬ハ神ノ最モ好ム物ナリシコト、舊日本ニ於テモ多クノ例アリ。

馬蹄石

葦毛ノ駒

美濃ノ加子母^{カレモ}ニ於ケル河童駒引ノ故跡ハ、其地名ヲ葦毛淵ト云フコトハ既ニ述べ了シヌ。カノ猿神ガ馬ノ保護者ニシテ更ニ馬ノ害敵ナリシト同ジク、葦毛ハ馬ノ最モ靈異ナルモノナルト同時ニ、又最モ災厄ニ罹リ易キモノト考ヘラレシ時代アリ。例ヘバ馬ヲ襲フ魔物ニ、「ダイバ」又ハ「ギバ」ト云フ物アリ。今ノ今マデ達者ニ歩キシ馬

ダイバ

モ、此物ニ遭フトキハ忽然ト狂ヒ騰リテ死ス。江州大津ノ穢多ノ娘死シテ「ダイバ」トナルト云ヒ、大津馬仕合^{シテヘセシ}吉ト染抜キタル腹掛ヲ馬ニサセルト、其災ヲ防ギ得ト傳フ。美濃尾張邊ニテハ、「ダイバ」ニ懸ケラル、ハ白馬ニ限ルトモ、又ハ葦毛ノ駒ガ懸ケラレヤスシトモ謂フトナリ〔想山著聞奇集一〕。美作苦田郡二宮村ノ瓶淵^{カムガフナ}ニハ、河童ノ話ハ傳ヘザ

瓶
レド、往昔此邊ガ街道ナリシ時、瓶ヲ負ヒタル葦毛ノ馬水底ニ落テ沈ミタルヨリ土地ノ
名トス。寛永二年ノ旱魃ニハ國中ノ僧此淵ノ邊ニ集リテ雨乞ヲ爲セシコトアリ〔山陽美作

雨乞
上。前ニ擧ゲタル武藏荏原郡駒澤村大字馬引澤ニハ、目黒村大字上目黒トノ境ニ葦毛
塚アリ。是レ例ノ右大將頼朝ノ愛馬ニシテ、將軍巡歴ノ節此村ノ沼地^{ヤチ}ノ中ニ陥リテ斃ル
ト云フ。今ノ字葦毛田ハ即チ其故跡ナリ。同村字子神丸ニハ駒繫松アリ。曾テ其葦毛ヲ

駒繫松

繫ギタリト稱ス。豊多摩郡代々幡村大字代々木字一本松ニモ、以前鞍掛松、一名ヲ駒繫
松ト云フ名木アリ。八幡太郎奥州征伐ノ折此地ニ於テ七日ノ物忌ヲ爲ス。此松ハ當時葦
毛ノ馬ヲ繫ギ置キシ木ナリト云フ〔以上新編武藏風土記稿〕。此等ノ「コマツナギ」ハ共ニ馬
ノ野牧ノ祈禱場ナリシコト、諸處ノ馬洗モシクハ「牛ク、リ」ト同ジカルベシ。而モ葦毛
ノ斃レタリシ因縁ト稱シテ馬引澤ノ一村ニハ今モ猶葦毛ノ馬ヲ養ハズ〔四神地名錄〕。同
ジ荏原郡ノ蒲田村大字蒲田新宿ニ於テハ、八幡社ノ境内ニ以前靈アル物ヲ埋メシト云フ
古塚アリ。葦毛ニ乘リテ此塚ノ前ヲ過グレバ必ズ落馬ス〔新編武藏風土記稿〕。如何ナル理
馬上咎メ

由アルカヲ傳ヘズト雖、恐クハ亦之ト似タル口碑ヲ有セシ馬塚ナラン。

葦毛ノ馬ヲ飼ハヌト云フ風習ハ古ク且ツ弘ク行ハル。武藏入間郡飯能町大字中山ノ天
滿宮ハ、昔ノ領主中山氏一家ノ氏神ナリキ。天文二十年川越城ノ夜軍ニ、中山勘解由家
勝敗北シテ中山ニ還ラントスルニ、入間川洪水ノ爲ニ渡リ難ク殊ニ艱難ノ折柄、何處ヨ
リトモ無ク一人ノ老翁葦毛ノ駒ヲ牽來リ、勘解由ヲ扶ケ乘セテ中山ニ歸リ、我ハ吾妻天
神ナリト名乗ツテ人馬共ニ社ノ側ニ於テ姿ヲ見失フ。ソレヨリ此社ヲ^{ミチヒキ}導ノ天神トモ稱
シ、中山ガ子孫ハ勿論、一村ノ者マデモ今モ葦毛ノ馬ヲ飼フコト無シ〔同上所引雜記〕。同

老翁

祭ノ儀

葦毛馬ヲ用キズ〔山吹日記〕。甲州ニテハ東山梨松里村大字松里上井尻組ノ諏訪明神ハ例
祭舊曆ノ七月十九日ナリ。七月一日ノ日ヨリ始メテ此日マデ氏子ノ物忌最モ嚴重ナリ。
其間ハ高聲普請及ビ繩目ヲ結ブコトヲ戒メ、又祭ノ日ニハ葦毛ノ馬ヲ牽出スコトヲ禁ズ。
東八代郡富士見村小石和組ノ諏訪明神モ葦毛ノ馬ヲ忌ミタマフ。里人之ヲ飼フコトアレ

苧

權五郎

竹

苧 神必ズ之ヲ隠ス。又苧ヲ裁ウルコトモ忌ムト云ヘリ〔以上山中笑翁書簡〕。磐城西白河郡
 三神村大字三城目ノ御靈社ハ、鎌倉權五郎ヲ祀ルト云フモ所傳ヲ失ス。此村ニテハ神ノ
 忌トテ葦毛馬ヲ飼ヘズ又矢柄竹ト謂フ竹ヲ裁エズ。崇ヲ畏ル、コト古來ノ習ニシテ人敢
 テ犯サザリシヲ、寛政中領主松平越中守吉田家ニ請ヒテ免許ヲ得、其旨ヲ社ニ告ゲテ人
 ノ惑ヲ解キ、爾後竹ヲ裁エ馬ヲ畜ヒテ民用ニ給スト云ヘリ〔白川古事考二〕。信州北佐久郡
 本牧村大字望月、即チ古來有名ナル望月牧ニモ、同ジク此毛ノ馬ヲ飼ハヌ慣習アリ。一
 説ニハ村ニ飼ハヌハ葦毛ニ非ズシテ鹿毛ナリト云フ。「カゲ」ナラバ望月ニ忌ムモ理窟ア
 リ。但シ未ダ何レガ正シキヲ知ラズ。筑前嘉穂郡足白村大字馬見ハ、村ニ葦毛ノ馬ヲ飼
 フコトヲ戒ムルノミナラズ、他處ヨリ曳來リシ者ヲモ止宿セシメズ。此村ハ多分ハ倭名
 鈔ニ所謂嘉麻郡馬見郷ナルベシ。村ノ境ニ馬見嶽ト云フ高山アリ。其頂上ニ祀ラレタル
 馬見權現ハ一ニ白馬大明神トモ名ヅケ奉リ、昔ハ嘉麻一郡ノ總社ナリキトナリ〔太宰管内
 志〕。讚岐綾歌郡松山村ノ各大字ニ於テハ、葦毛ヲ飼フトキハ或ハ斃レ或ハ奔リテ必ズ飼

馬ノ神

柳

楊枝

金創ノ藥

主ニ損ヲ被ラシム。往昔三木近安ト云フ郷士アリ。朝命トハ言ヒナガラ讚岐院ニ對シテ
 矢ヲ射掛ケ奉ル。普通ノ歴史トハ合ハザレドモ、終ニ路傍ノ柳ノ空洞ノ中ニ於テ院ヲ害
 シマツレリトモ傳ヘタリ。其折三木ハ葦毛ノ駒ニ乘リ居タリ。故ニ今モ此家ノ者ハ決シ
 テ楊枝ヲ懷ニセズ、又此村ニ絶エテ柳ノ木ノ生立タザルモ、總テ同ジ因縁ニ基クト云ヘ
 リ〔讚岐三代物語〕。徳川將軍家ニテモ葦毛ノ馬ハ村正ノ刀ト共ニ代々大ナル禁物ナリシガ、
 其理由トスル所ハ寧ロ之ト異ナリ、幾分カ中山氏ノ家傳ト相類セリ。蓋シ上野新田ノ一
 宮ハモト新田義重ノ尊信セシ神ナリ。寛永中林道春ノ作リタル鐘ノ銘ニモ、此神葦毛ノ
 駒ニ乘リタマヘルガ故ニ、新田氏ノ子孫タル者ハ此毛色ノ馬ヲ避クルナリト謂ヘリ。後
 世ノ學者之ヲ記載シ更ニ附加シテ曰ク、葦毛ノ馬ノ糞ハ金創ノ妙藥ナルコトハ、既ニ甲
 陽軍鑑ノ松代攻ノ條ニモ見エタリ。今御當家ニ於テ悉ク此毛ノ馬ヲ忌ミタマフトアリテ
 ハ、買フ人無クシテ次第ニ其種ヲ絶ヤスニ至ルベシ。右ノ如ク軍用トモナルベキ馬ナリ
 トスレバ、セメテハ之ヲ諸國ノ社ノ神馬トシテナリトモ奉納シ置キタキモノナリト説ケ

リ〔精養堂隨筆〕。然ルニ葦毛ノ駒ハ、此學者ノ説ヲ須タズシテ、古今共ニ多クノ社ノ神馬タリシナリ。以下順序ヲ逐ヒテ自分ガ述ベント欲スル所ハ即チ其始終ナリ。

白馬ヲ飼ハヌ村

葦毛ハ一名ヲ青鷲毛トモ謂ヒテ、稍青味ノカ、リタル白馬ナリ。

有馬

然ルニ夙クヨリ白馬ト同ジ毛色ノ如ク取扱ヘレ、村ノ内ニ飼ハヌト云フ右ノ傳説ノ如キモ、二者共通ニ存スルハ奇ト謂フベシ。攝津有馬ノ湯山權現ハ此山ノ地主神ナリ。曾テ婦人ノ姿ヲ現ジテ麓ノ野邊ニ遊ビシニ、國ノ守護某ナル者鷹狩ニ出デテ之ヲ見怪シミ、滋籐ノ弓ニ白羽ノ箭ヲツガヒ、葦毛ノ馬ニ乘リテ山ノ奥マデ之ヲ追ヒ懸ケタリ。其咎ヲ以テ武士ハ即座ニ命ヲ殞シ、其後右ノ三物ヲ携ヘテ山内ニ入ル者アレバ、必ズ山荒レ雷電スト云フ話ナリキ〔諸國旅雀五〕。此話ハ極メテ古クヨリ世ニ傳フル所ナリ。阿波ノ領主三好修理太夫長慶ガ弟ニ十河ノ某ト云フ武士ハ、唐瘡ヲ煩ヒテ此湯ニ養生ノ間、人々ノ止ムルヲモ聽カズ、葦毛ノ馬ニ乘リテ押シテ登山シ、ヤガテ神箭ヲ蒙リテ歸國ノ後程モ無ク病死セリ。此ハ正シク永祿九年中ノ出來事ナリ〔當代記〕。ソレヨリ更ニ百十餘年ノ

三輪

以前ニモ、有馬ニ滞在シテ山神ノ女ノ姿ト現ハレテ武士ニ追ハレシ話ヲ聞書シタル僧アリ。此ニハ湯山權現ノ本地ハ三輪明神ニシテ、此山ニテ禁ズルハ白馬ナル事ヲ記載シテ葦毛ナリトハ言ハズ〔歐雲日件錄寶徳四年四月十八日條〕。此湯ノ發見ニ三輪ノ神ト因ミアル

既師ノ神

蜘蛛ノ絲ノ導アリシコトハ前ニ言ヘリ。而シテ三輪ガ小山秦兩家ノ既師ノ尊信スル神ナルコトハ猿屋傳書ニモ見ユ〔駿國雜志七〕。又之ト因ミアルカ否カヲ知ラザレドモ、更ニ今一ツノ似タル話アリ。下野那須郡那珂村大字三輪ノ三輪明神社古傳ニ曰ク、昔此村ノ宇宮窪ニ柏ノ大木アリ。其處ヨリ見エ渡ル所ヲ白馬ニ乘リテ過グレバ、人馬共ニ即時ニ倒ル。人々不思議ノ思ヲ爲シ湯ノ花ヲ捧ゲ神託ヲ問ヒシニ、神少女ニ移ラセタマヒ、吾ハ大和ノ三輪ノ神ナリ。此地ニ跡ヲ垂レントスルコトヲ知ラシムル爲ナリ。爰ニ祀ラバ永ク里ヲ守ラントアリシヨリ此社ヲ建テタリ。今至ルマデ葦毛ノ馬ヲ此里ニ留ムルコト一夜ナリト雖、必ズ災アリト云ヘリ〔下野風土記下〕。

神託

村ニ白馬ヲ置カシメザル理由ニ至リテモ、地方ニ由リ些シツツノ相違アリ。武藏入間

郡高麗村大字新堀^{ニヒキ}字大宮ニテハ、今モ一般ニ白毛ノ馬ヲ飼ヘズ。此村ハ上代高麗人ノ殖
民地ニシテ、祖神トシテ白髻明神ヲ祀レリ。其氏子ナルガ故ヲ以テ村人モ白馬ヲ忌ムナ
若宮八幡^{リト}云フ〔東京人類學會雜誌第二百十六號柴田氏〕。横濱市本牧町字本郷ノ若宮八幡宮ノ神體

海邊ノ牧^リ〔新編武蔵風土記稿〕。本牧ハ即チ一箇海邊ノ馬牧ナレバ、此ノ如キ口碑ノ存スルハ偶然
天智天皇^ニ非ザルベシ。大隅贈啖郡東志布志村大字安樂ノ山口六社明神ハ天智天皇ヲ祀ルト傳ヘ
ラル。此天皇ノ傳説ハ弘ク鹿兒島縣ノ南海岸ニ分布シテ此ハ其一例ナリ。此神社ノ境内
ニ於テハ昔ヨリ白馬ニ騎ルコトヲ固ク戒ム。其禁ヲ犯セバ必ズ災アリ。白馬ハ此神ノ乘
用ナリシガ爲ナリト言ヒ傳フ〔三國名勝圖會〕。之トハ正反對ニ薩摩川邊郡川邊村大字清水

白山^ノ山^ノ權現^ノ神體^ハ、黒キ馬ニ騎リタマヘル像ナルガ故ニ、村中ノ民ヲシテ白馬ヲ飼ハ
シメズ〔同上〕。土佐ノ山中ニハ平家隠里ノ傳説多シ。之ト伴ヒテ又所謂白旗傳説アリ。
日向ノ那須山ナドニテハ山櫻ノ花ノ盛リヲ見テ源氏ノ旗影カト誤リシト傳ヘタルニ、此

白山
黒駒
平家谷
白旗

地方ニテハ、何レモ白鷺ノ飛ビ揚ルヲ白旗ト見誤リテ一族悉ク自殺シタリト語り傳ヘタ
リ〔土佐州郡志〕。此國兩家村ノ平家谷ナドハ、此因縁ヨリ今以テ所謂不入山^{イッスヤマ}ノ禁令固キノ

白鷺
ミナラズ、白馬ヲ曳キ又ハ白キ手拭モテ頼冠リシタル者ハ、此山ヲ過グルコト能ハズト
云フ〔土佐國古雜誌〕。白旗ト白鷺ニ就キテハ最モ多クノ傳説アリ。白キ衣ヲ著タル老女ヲ
白鷺ト思ヒテ射殺シ、其他色々ノ物ニ見誤リテ後ノ災アリシ話ノ多キハ、何カ仔細アル
コトナルベシ。

毛替ノ地藏 白馬ト葦毛トノ混同ハサマデ古クヨリノ事ニハ非ザルベシ。萬葉集

ニハ大分青馬ト書キテ「アシゲウマ」、倭名鈔ニハ説文ヲ引キテ葦毛ハ青白雜毛ノ馬也ト
謂ヒ、又漢語抄ヲ引キテ青馬ナリトモ見ユ。新撰字鏡ニハ聽ハ馬白色又青色、阿乎支馬^{アハキウマ}
ト釋シタリ。葦毛ノ漢字ヲ聽ト云フモ亦同ジ理由ニ基クモノナリ。聽ハ即チ葱^{ネギ}ノ
コトニテ、本白クシテ末青ク其色ノ最モ美シキヲ葱ニ譬ヘタルナリ〔相驢經ニ其他〕。併
シ葦毛モ必ズシモ一種ニハ非ザリシガ如ク、現今葦毛ト呼ブ馬ノ中ニハ青ヨリモヨホド

白馬節會

灰ニ近キモノアリ。古クハ源平盛衰記ナドニモ青葦毛白葦毛ト云フ語折々見ユ。朝廷新年ノ儀式ニ有名ナル白馬節會ニハ、後世ハ葦毛ノ駒ヲ曳クヤウニナリタルガ、日本語ニテハ、白馬節會ヲ「アヲウマ」ノ節會ト訓マセタリ。伴信友翁ノ説ニ依レバ、此節會ニハ最初ハ今日ノ「アヲ」即チ鐵驄馬ヲ曳キタリシガ、後ニ白馬ヲ用キルコト、ナリ、更ニ葦毛ヲ以テ之ニ換ヘラレタルナラント云フコトナレドモ〔比古婆衣丸〕、未ダ安心シテ之ニ從フコト能ハズ。白馬ヲ神聖ナル物トスルハ、本來支那ノ思想ナガラ、我邦ニテモ頗ル古キ代ヨリノ風ナリ。或ハ白馬ヲ馬ノ性ノ本ナリト謂ヒ、地ニ白馬アルハ天ニ白龍アルガ如シトモ言フ説アリ。天子ニ限リテ之ヲ用キラル、ト云フモ恐クハ其爲ナラン。素門ノ書ニモ馬ヲ西方ノ白色ニ配シ、其類ハ金、其穀ハ稻、天ニ上リテ大白星ト爲ルト説キタリ〔弘賢隨筆五十七〕。思フニ白馬ノ珍重セラレタル根本ハ、ヤハリ純粹ノ物ノ得難カリシ爲ニシテ、其爲ニ又夙クヨリ葦毛ヲ以テ之ニ代用スルノ必要ハアリシナランカ。而シテ葦毛バカリガ白馬ノ代リトシテ用キラレタルモ、單ニ其色ノ美シク且ツ最モ近カリシ爲

七聽八白

ノミニ非ズ、此馬ノ毛ガ年ト共ニ變化シテ恐クハ追々白勝ニ成ルコトヲ實驗シタル結果ナラント思考ス。所謂七聽八白ノ説ハ古クハ埤雅ト云フ書ニ見エタリ。葦毛ハ八歳ニナレバ色變ジテ白馬トナルヲ謂フナリ〔華陽皮相其他〕。駿府ノ猿屋傳書ノ馬ノ毛色ノ説ニモ葦毛ノミハ全ク別物ニシテ五行ニ配スベカラズト謂ヘルハ、此馬ノ毛色ノ屢、變リテ不定ナルヲ不思議トシタル爲ナルベシ。

一體馬ノ毛色ト云フモノハ如何ナル程度ニ迄變化シ得ルモノナルカ、自分ハ聊カモ之ヲ實驗シタルコトハ無ケレドモ、葦毛ハ兎ニ角黒ヤ栗毛ノ類ノ馬ガ一朝ニシテ白馬トナルト云フニ至リテハ、之ヲ傳説ト見ルノ外無キナリ。藝州嚴島ノ神馬ハ平日ハ既ニ繫ギ明神遊幸ノ折ハ之ヲ儀仗ノ列ニ加フルモノナリ。此神馬ハ如何ナル毛色ノ馬ヲ獻納シテモ、次第ニ毛ヲ替ヘテ一二年ノ間ニハ必ズ純白トナルト信ゼラレタリ〔藝藩通志〕。此等ハ特ニ此宮ノ神德ニ由リテノミ説明スルコトヲ得ベキ話ナリ。之ト近キ一例ハ尾張國ニモアリキ。愛知郡天白村宇島田ノ東方ナル定納山ト云フニ、熊阪長範ノ既ノ跡ト云フ處

熊阪長範

地藏

アリテ、今モ其小字ヲ既内ト呼ベリ。古クハ程遠カラヌ路傍ニ有名ナル地藏堂アリ。長範ガ白キ馬ヲ盗ミ來レバ、一夜ノ中ニ之ヲ黒馬ニシテ本ノ主ノ眼ヲ暗マス。此地蔵ヲ毛替地藏ト稱ヘシハ此ノ如キ不名譽ナル靈驗アリシ爲ナリト云フ。或ハ又雨地藏トモ名ヅケテ能ク雨乞ノ祈願ヲ容レタリトモ傳ヘタリ〔尾張志〕。熊阪長範ハ謠ニテハ越前ノ人ト

雨乞

稱スレドモ或ハ又信州上水内郡信濃尻村大字熊阪ヲ以テ其郷里トスル説アリ。野尻ノ湖水ノ岸ヨリ見ユル峠ヲ長範阪ト云ヒ、其山ヲモ今ハ長範山ト云フ。長範ハ此山中ニ隠レ住ミ夜ハ里ニ出デテ馬ヲ盗ム。其馬ヲ月毛ハ栗毛ニ染メ栗毛ハ黒ニ塗替ヘテ、再ビ市ニ曳出シ之ヲ賣飛バス。其染場ノ跡ト云フ地アリテ礎永ク残りタリ。多分ハ隣村ナドヨリノ惡評ナランモ、野尻ト熊阪トノ間ヲ流ル、關川ノ水ハ、之ヲ飲メバ盜心ヲ生ズベシト唱ヘラレテアリキ〔眞澄遊覽記三〕。但馬養父郡大藏村大字堀畑ニモ長範屋敷ト云フ小字アリ。長範曾テ此地ニ住ムト傳ヘテ泉アリ。此ニハ染物ノ口碑ハ存セザルモ、此水ヲ飲ム者ハ盜心ヲ生ジ、馬牛ニ飼ヘバ性惡シクナルト云フ俗信アリテ、今モ之ヲ用キル者ナシ

盗泉

染屋

〔但馬考〕。長範ホドノ大盜人ガ刷子ヲ持チテ内職ヲシタリトモ思ハレザレドモ、兎ニ角馬ノ毛ヲ替フルト云フ話ハ彼ト何カノ因縁アルベシ。或ハ一種ノ染工ヲ賤シキ部落トシテ取扱ヒシ遺風ナルカモ測リ難ケレド、之ヲ神佛ノ力ニ基クトスルモノニ至リテハ、恐クハ亦彼ノ七聽八白ノ思想ト關係アルベク、兼テ又神馬ノ毛ノ色ヲ選ビタリシ大小ノ神社ノ古例ヲ説明スルモノトモ見ルコトヲ得ベキナリ。磐城田村郡小野新町東遠山萬福寺ノ觀世音ハ、カノ田村將軍ノ祈願ニ因リ千ノ矢ヲ放チタマヒシ本尊ト云ヘリ。十四五里四方ノ人民牝馬ヲ牽來リ、其牝馬ノ生ム駒ノ牝牡毛色ヲ此靈佛ニ祈願スレバ、願ノ通りノ駒ヲ得ル奇瑞アリ。凡ソ此邊ヨリ出ル駒ニハ良馬多シトノコトナリキ〔行脚隨筆上〕。

田村將軍

馬ニ騎リテ天降ル神

或家又ハ或地方ニ於テ白馬又ハ葦毛ヲ飼ハザル風習ハ、何レモ神祇ノ信仰ニ基クモノナルコトハ略確實ナルガ、其由來ニ至リテハ表裏相容レザル二種ノ説明アリ。即チ一ハ白馬ハ神ノ乗用ナルガ故ト謂ヒ、他ノ一ハ神此毛ノ馬ヲ好ミタマハズト謂フモノナリ。神ガ白馬ヲ好ミタマハズ故ニ氏子モ之ヲ嫌フト云フ説ハ、近

齋忌

世ノ人ニハ通用宜シケレドモ、ソレダケニ思想新シト見エタリ。有馬又ハ讀岐ニ於テ別段ノ來歴ヲ必要トシタルヲ見テモ明カナルガ如ク、清クシテ美シキ白馬ヲ神ノ惡ミタマフト云フハ何分ニモ不自然ナリ。此ハ疑無ク忌ト云フ語ノ意味ガ時世ト共ニ變遷シタル結果ニシテ、多クノ森塚巖石等ニ就キテモ之ニ似タル例アリ、即チ元ハ神ノ物トシテ其清淨ヲ穢スマジトシタル忌ヨリ、轉ジテ神ガ枝葉ヤ土石ヲ採リ去ルヲ惜ムト云フ風ニ考ヘシト同ジク、神ガ凡人ノ之ヲ持ツヲ忌ムヲ自分モ欲セラレザルガ故ト察スルニ至リシナリ。多クノ社ノ神ガ白キ馬ノ嫌ヒデ無カリシ證據ハ今更之ヲ列擧スルニモ及ブマジ。神馬トシテ之ヲ奉納スル風習ハ弘ク行ハレ居タリシノミナラズ、御神體ニモ騎馬ノ像イクラモ有リテ、其馬ノ毛色若シ分明ナリトスレバ大抵ハ白ナリ。此序ニ言ハンニ、諸國ノ御神體ニ騎馬ノモノ多キハ決シテ輕々ニ見ルベキ現象ニハ非ズ。佛像ニモ勝軍地藏ノ如キハ必ズ馬上ノ御姿ナリ。此等ハ中世ノ武家ガ今ノ人ヨリモ馬ヲ愛シタリシ爲ナドト簡單ニ解釋シ去ル事能ハザル事實ナリ。

騎馬神像

神ノ降臨

神ノ林

蓋シ都鄙多クノ神體ノ製作ハ比較的後代ノモノナリトスルモ、其形狀特性ノ如キハ漫然タル空想ニ由リテ新タニ之ヲ附加セシモノニハ非ズシテ、ヤハリ神ノ示現ニ關スル當初ノ歴史ヲ表ハサント力メシモノナラン。其證據ニハ神ガ馬ニ騎リテ降臨シタマヒシコトヲ傳説スル場合ニハ、其馬ノ毛モ亦多クハ白ナリ。前ニ述ベタル一二ノ例ノ外ニ、美作吉田郡一宮村大字西田邊ノ駒林ハ、慶雲三年ニ中山神ガ白馬ニ乘リテ來現セラレタル故跡ナリ。二町ヲ隔テ、上林ト下林トアリ。其年ノ九月二十三日ニ神ハ此林ヨリ五町北ノ霧山ト云フ處ニ入りタマフ云々。林ヲ駒林ト云フコト、竝ニ例年九月ノ神事ニ白馬ヲ用キルハ其爲ナリ〔作陽志〕。新羅ノ大昔ニ蘇伐公ガ白馬ノ林間ニ跪拜スルヲ見テ、卵ニ籠レル赫居世ヲ拾上ゲシト云フ話モ何ト無ク思ヒ合サル。日本ニテモ清キ林ニハ此類ノ神話多シ。伊勢ノ飯南郡川俣谷、即チ今日ノ宮前村大字作瀧^{ヤクノキ}ニテハ、村ノ境ニ^{ハコヒツカ}穢塚アリテ其北ヲ賀瀬川流ル。其川ノ中流ニ立ツ大石ノ上ニ、昔天照大御神白馬ニ騎リテ降リタマヒ、國ノ堺ヲ定メタマヘリト云フ口碑アリ〔勢陽傳十一〕。此石ハモトハ多分白クシテ

境塚

石馬

馬ノ形ニ似タリシガ故ニ斯ル傳説ヲ生ゼシナルベシ。阿波名西郡神領村シロセ、ミヤウ字白桃名ノ一部ヲベ御馬原ト謂ヒ、丹生明神ノ乗捨テラレシト云フ石馬アリ。鞍轡皆具シテ膝折伏セテ見返リタル形、ヨク見レバ鬣ノ筋マデアリトシテ、些シ遠クヨリ望メバ誠ニ生ノ馬ノ通りナリ。此地ハ元ヨリ村ノ山野ナルガ、村人此石ヲ尊崇シテ木草ヲ採ラヌ爲ニ、自然ニ林ヲ爲シテ終ニ石馬ヲ遠望スル能ハズ。傳ヘ謂フ昔一人ノ老翁白馬ニ乘リテ此原ノ柴刈男ニ現ハレ、我ハ大和ノ丹生明神ナリ、由アリテ跡ヲ此地ニ垂レ五穀ヲ守ルベシト仰セラレ、乃チ天ニ歸リタマフ。神馬ハ之ニ伴フコト能ハズ、御跡ヲ顧ミツ、石ト化シタルガ即チ是ナリ〔燈下録〕。岩代河沼郡堂島村大字熊野堂ノ熊野三社ハ、數多キ奥羽ノ熊野ノ中ニテモ殊ニ有難キ神ナリ。八幡太郎義家戰捷ヲ祈ル爲ニ建立セシ社ナリト傳フ。

老翁

熊野權現

駒形

三寶荒神

其折ニ愛馬ノ連錢茸毛ヲ奉納シテ神馬トシ之ヲ駒形原ニ放牧ス。此茸毛ハ後ニ天ニ昇リ雲中ニ嘶クコト七日、仍テ之ヲ馬頭觀音ト祀リ、更ニ此原ニモ右ノ三社ヲ勸請ス。今ノ耶麻郡鹽川村ノ三寶荒神社ハ即チ是ナリト云フ〔新編會津風土記所引緣記〕。三寶荒神ハ竈

ノ神ナリ。馬ト竈トノ關係アルコトハ前ニモ一タビ之ヲ述ブ。後段ニモ猶詳カニ攻究セント欲スル所ナリ。

神垂迹ノ起原ハ決シテ後世ノ緣起ニ説クガ如キ明確ノモノニ非ザリシハ勿論ナリ。分身自在ノ天竺ノ佛タチトハ異ナリ、本ノ社アル神々ニ於テハ決シテ勸請ノ地ニ永遠留ハシタマハズ、一定ノ日ニ降りテ祭ヲ享ケヤガテ又還リ往キタマヒシナリ。所謂毎朝神拜ノ思想起リテ後、如在ノ神ハ終ニ常在ノ神トナリ、狹ク小サキ祠ノ中ヲ以テ神ノ住所ノ如ク考フル者出デ來レリ。是レ決シテ本來ノ信仰ニハ非ザリシナリ。阿波ニ於ケル丹生明神ハ其馬ヲ殘シテ往カレタルガ、抑、神馬ノ神ニ用立チシハ全ク其往來ノ此ノ如ク繁カリシ爲ナリ。此説ハ必ズシモ根據ニ乏シキ臆説ニハ非ズ。沖繩諸島ノ如キハ、今モ村ノ神ハ甚ダ多ク社ノ數ハ甚ダ少ナシ。年々日ヲ定メテ神ノ降ル場處ヲ「ダケ」又ハ「ヲガン」ト謂フ。高山ノ頂又ハ人ノ蹈マザル一區ノ林地ナリ。「ヲガン」ハ即チ拜林ニシテ此處ニ於テ神ヲ祭り拜スルナリ。大島ニ於テハ之ヲ「ヲガミ」山、又ハ「ウボツ」山ト云ヒ、

祭ノ日ニハ此山ヨリ出デテ又此山ニ歸ル。神馬ニ乘リテ現ヘル、コトモ亦稀ナラズト云ヘリ〔人類學會雜誌第九十五號昇氏〕。遙カニ懸離レタル羽後ノ平鹿郡ノ保呂羽神社ハ、東北地方ニ於テ威力ノ最モ盛ナル山ノ神ノ一ツナリ。十一月七日ノ祭ニ歌フ神樂ノ曲ノ章句ニ

東方ヨリ今ゾ寄リマス長濱ノ葦毛ノ駒ニ手綱ヨリカケ

ト云フ歌アリ〔風俗問狀答〕。「ヨリカケ」ハ「ユリカケ」ノ轉訛ナルベシ。寄リマストハ神靈ガ巫女ニ託シタマフ事ナリ。其神ガ葦毛ノ駒ニ乘リ長濱ツタヒニ東ノ方ヨリ降ラルルサマヲ歌ヒタルモノナルガ、此歌ハ中央部ノ諸國ニテハ所謂梓神子ノ歌トシテ傳ヘラレタリ。鴉鷺合戰物語ニ、「カンナギ」梅染ノ小袖ヲ着テ座敷ニ直リ、梓ノ弓ヲ打扣キテ天清淨地清淨ヲ唱ヘ、只今寄せ來タル所ノ亡者ノ冥路ノ談リ、正シク聞カセタマヘト言ヒテ歌フ歌、

ヨリ人ハ今ゾ寄リマス長濱ヤ葦毛ノ駒ニ手綱ユリカケ

梓巫

トアリ〔遊遊笑覽所引〕。諺ノ葵ノ上ニ神子ガ六條ノ御息所ノ口ヲ寄セントシテ唱フル詞モ之ト全ク同様ナリ。之ニ由リ見レバ人ノ生靈亡靈モ亦馬ニ乘リ來リテ巫女ニ託セシナリ。巫女ヲ「ヨリマシ」又ハ「ヨリマサ」ト云フコトハ社ノ神子モ所謂縣神子モ區別無カリキ。後者ノ梓ヲ業トスル者ノ如キハ單ニ拜處ヲ一定セザル移動的ノ巫女ト云フニ過ギズ。例ノ賴政塚ノ傳説ノ如キハ恐クハ此徒ノ名ヨリ起リシモノナラン。同ジ保呂羽山ノ神樂ノ曲ニ、

ヨリマサバ今寄リマサネサハラ木ノサハラノ山ニサハリ隈ナク

ト云フモアリ。寄ルトナラハ直チニ寄リタマヘト言フ意味ナルヲ、誤リテ神靈又ハ託女其物ヲ「ヨリマサ」ト謂フト解シタル結果、其祭場ヲ以テ源三位入道ノ首塚ナリトスルガ如キ説ハ起リシナルベシ。

保呂羽山ノ神樂ノ歌ガ、梓巫ノ徒ヨリ學ビシモノニ非ザルコトハ、亦之ヲ立證スルコト難カラズ。岩代會津ノ伊佐須美神社ノ田植歌十二段ノ中ニモ

繫ギタヤ、葦毛ノ駒ヲ繫イダ。白葦毛ノ白ノ駒ヲ、高天原ニ繫イダ。大明神ノ
召サウトテ、葦毛ノ駒ヲ早ウ引ク。

ト云フ歌アリ(中古雜唱集)。然ラバ海ノ都ト此世トノ交通ニ歸ヲ用キシト同ジク、天ト地
トノ往來ニハ特ニ靈アル白ノ駒ヲ選ベレシモノニテ、從ヒテ人間ノ雜役ニハ之ヲ用キル
コトヲ遠慮セシモ尤モ自然ノ事ト謂フベシ。人ノ靈ニ在リテハ矢口ノ渡ノ新田義興ノ如
キモ、尙又白キ馬ニ乘リテ青空鮮カニ現ヘレタリ。空ヲ行クモノ山ヨリ降ル者ヲ白カリ
シト想像スルハ、單ニ詩トシテ美シキノミニ非ズ、多クノ白旗傳説ナドト共ニ、先年西
洋ニテ流行セシ所謂天然現象説ヨリ之ヲ解釋スルモ亦差支無シ。日本ニ於テハ佛教ノ方
ニモ多ク此傳説ヲ利用シタリトオボシ。支那ニテモ始メテ經文ヲ輸入セシ馬ノ白カリシ
コトヲ言ヘド、此ヨリモ今一段我邦ノハ之ト縁深シ。昔信濃ノ筑摩ノ湯ノ村ニ住ム信心
者ノ夢ニ、明日ハ觀世音此湯ニ入浴ニ來ルベシト云フ豫告アリ。年ハ三十前後、髯黒ク
綾筒笠ヲ著テ、節黒ナル胡觔ニ皮ヲ卷キタル弓ヲ持チ、紺ノ襖ニ可毛ノ行際ヲハキ、葦

白旗

馬頭觀音

毛ノ馬ニ乘リタル人ガ觀音ナリト教ヘラル。即チ法ノ如キ田舎者ノ風俗ナリ。翌日ニナ
リテ果シテ其通りノ人來リタレバ、一同有難ガリテ之ヲ拜ム。其男ハ元來觀世音ニハ非
ザリシ故、勿論非常ニ面喰ヒタリシモ、根ガ氣ノ善キ御侍ト見エテ、サテハ身共ハ觀音
デ御座ツタカト、此ガ菩提ノ種トナリテ直チニ剃髮シテ法師トナリ了ル(宇治拾遺物語六)。
上野國ノ馬頭主ト云フ武士ナリキト云ヘリ。上野ハ下野ノ誤聞ナルカモ知レザレド、兎
ニ角馬頭觀音ノ信仰ヲ聯想セズニハ過グシ難キ一話ナリ。

駒ヶ嶽

又白馬ノミヲ神ト祀リタル社アリ。例ヘバ武藏北足立郡尾間木村大字中尾

駒形神

ノ駒形神社ハ、神體ハ三軀ノ白駒ニシテ長各六寸バカリ、本地ハ正觀音ニオハシマス(新
編武藏風土記稿)。羽後秋田郡山崎ト云フ處ノ白旗明神ニハ、末社ニ白駒ノ神ト黒駒ノ神

黒駒

トアリテ、牛馬ノ病ニ禱リテ驗アリ(風俗問狀答)。磐城相馬中村ノ太田神社ハ土地ノ人ハ
妙見様ト云フ。有名ナル野馬追ノ祭ヲ行フ社ナルガ、其社ノ神モ毛色ハ不明ナレドモ一
ノ龍馬ナリ。昔平將門逆心ノ時、一夜客屋落チテ化シテ龍馬トナル。之ヲ妙見菩薩ト尊

龍馬ト屋
ノ神

石馬

崇シテ土地ノ鎮守ト爲スト傳フ〔行脚隨筆上〕。越前大野郡ノ穴馬谷^{アキマヤ}ニテハ、岩穴ノ遙カ奥ニ石馬ヲ祀リテアリ。即チ穴馬ト云フ村ノ名ノ起原ナルガ、此石馬ハ人作ノ物ニ非ザルガ如シ。上下穴馬村ハ以前ノ郡上^{ノリノ}領ニシテ、九頭龍川ノ源頭十里ニ互リタル山村ナリ。

雨乞

ヨクノノ旱年ニハ此洞ノ奥ニ入込ミ、鞭ヲ以テ石ノ馬ヲ打ツトキハ必ず雨降ル。但シ其鞭ヲ執リタル者ハ遅クモ三年ノ内ニ死スルガ故ニ、八十九ノ老翁ヲ頼ミテ其役ヲ勤メサセタリト云フ〔笈埃隨筆八、有斐齋劄記〕。陸中膽澤郡金ヶ崎村大字西根ノ赤澤山ノ頂上ニハ、鐵ヲ以テ鑄タル二體ノ馬ノ像アリキ〔仙臺封内風土記〕。如何ナル信仰ニ基ケルモノナルカハ知ラズ、此山ニハ又天狗佛ト稱スル羽ノ生エタル佛像ヲモ安置シテアリキト云フコトナリ。

天狗佛

深山ノ奥ニ於テ生キタル白馬ヲ見タリト云フ話モ亦多シ。紀州熊野ノ安塔峯^{アシタノミ}ノ中腹ニ、千疊ト云ヒテ數町ノ間草ノ低ク連ナリタル平アリ。如法ノ荒山中ナルニモ拘ラズ、古キ土器ノ破片ト共ニ古代ノ戰爭ニ關スル口碑ノ斷片ヲ殘存ス。其一區域ヲ或ハ馬ノ馬場ト

神馬足跡

名ヅク。時トシテ白馬ノ馳セアリクヲ目撃セシ者アリ〔南方熊楠氏報〕。薩摩日置郡田布施村ノ金峯山ニモ、山中ニ權現ノ神馬住ミテ、其姿ハ見タル人無ケレドモ、社殿又ハ社頭ノ土ニ蹄ノ跡ヲ殘シ行クコトアリ〔三國名勝圖會〕。美作ノ瀧谷山妙願寺ハ本尊ハ阿彌陀ニシテ靈異多シ。近所出火ノ節ハ堂ノ前ニテ馬七八疋ニ乘リタル者集リ何ヤラ囁ク如ク本堂ニ聞エ、又馬ノ足跡ヲ土ノ上ニ殘スト云フ〔山陽美作記上〕。木曾ノ駒ヶ嶽ニ不思議ノ駒ノ居ルコトハ頗ル有名ナル話ナリ。或ハ至ツテ小ナル馬ニシテ狗ホドノ足跡ヲ土ノ上ニ留ムト謂ヒ〔藤原拾葉所錄大明登攀記〕、或ハ又偉大ナル茸毛ノ馬ノ、尾モ鬣モ垂レテ地ニ曳キ、眼ノ光ハ鏡ヲ懸ケタルガ如ク怖シキガ、人影ヲ見ナガラ靜々ト嶺ノ中央マデ昇リ行ク程ニ、俄カニ雲立チ蔽ヒ行方ヲ知ラズ、其蹄ノ痕ヲ見レバ尺以上アリキト云フ說アリ〔新著聞集所引寛文四年登攀記〕。今若シ此等ノ傳説ニ基キテ馬ニ似タル一種ノ野獸ノ分布ヲ推測スル人アラバ、ソハ多クノ山中ノ馬ノ毛色白カリシト云フ事實ヲ過當ニ輕視スル者ナリ。日本ノ山ニハ白色ノ動物ハサウハ居ラヌ筈ナレバナリ。自分ノ信ズル所ニ依レバ、

山中ノ馬

山ノ神田ノ神

白馬ハ即チ山ノ神ノ馬ナリ。麓ノ里人時トシテ之ヲ見タリト云フ傳説ハ、ヤハリ亦山神ガ里ニ降りテ祭ヲ享クルト云フ信仰ノ崩レタルモノナルベシ。山ノ神ト田ノ神トハ同ジ神ナリト云フ信仰ハ、弘ク全國ニ分布スル所ノモノナルガ、伊賀ナドニテハ秋ノ收穫ガ終リテ後、田ノ神山ニ入りテ山ノ神ト爲リ、正月七日ノ日ヨリ山神ハ再ビ里ニ降りテ田ノ神トナルト云フ。此日ニハ多クノ村ニ鍵引ト云フ神事アリ。神木ニ注連ヲ結ヒ頌文ヲ唱ヘツ、田面ノ方ヘ之ヲ曳クワザヲ爲スナリ〔伊水溫故〕。神ノ出入ノ日ハ地方ニ由リテ異同アリ。木曾ノ妻籠山口ノ邊ニテハ、舊曆二月ト十月ノ七日ヲ以テ山ノ講ノ日ト稱シ、

鍵引

山神祭日

山ノ神ヲ祭ル。甲府ノ山神社ノ緣日ハ正月ト十月トノ十七日ナルガ〔甲陽記〕、甲州ノ在方ニテハ十月十日ヲ以テ田ノ神ヲ祭ル〔裏見寒話〕。肥後ノ菊池ノ河原村大字木庭ニテハ十一月九日ニ山ノ神ヲ祭ル〔菊池風土記〕。佐渡ニテハ二月九日ヲ山ノ神ノ日トシテ山ニ入ルコトヲ慎ミ、矢根石ノ天ヨリ降ルモ此日ニ在リト信ズ〔佐渡志五及ビ鎌石考〕。越後魚沼地方ニテハ一般ニ二月十二日ニテ、從ツテ山神ノ祭ヲ十二講ト呼ビ〔浦佐組年中行事〕、明治

十二神

以後ハ一般ニ山神祠ノ名ヲ十二神社ト改メタリ〔北魚沼郡誌〕。會津ノ山村ニ於テハ、或ハ正月十七日ニ山神講ヲ營ミ、又ハ二月九日ヲ山ノ神ノ木算ヘト稱シテ戒メテ山ニ入ラヌ例モアレド、多クハ亦正月十二日ヲ以テ其祭日ト爲シ、十二山神ト云フ祠モ處々ニ多シ〔新編會津風土記〕。十二日ヲ用キル風ハ隨分廣ク行ハレ、磐城相馬領ノ如キモ亦然リ〔奥相志〕。秋田縣ニテハ平鹿郡山内村大字平野澤ノ田ノ神ナド、四月ト十二月トノ十二日ニ古クヨリ之ヲ祭リシノミナラズ〔雪乃出羽路〕、今モ概シテ二月ト十月トノ十二日ヲ以テ山ノ神田ノ神交代ノ日ト爲セリ〔山方石之助氏報〕。此地方ニハ北部ハ津輕堺ノ田代岳、南ハ雄勝ノ東島海山ヲ以テ共ニ田ノ神ノ祭場ト爲セリ。田ノ神ヲ高山ノ頂ニ祀ルハ一見不思議ノ如クナレド、出羽ナドニテ山ノ神ト云フハ單ニ山ニ住ム神ノ義ニシテ、大山祇ニハ限ラザリシ由ナレバ〔雪乃出羽路〕、田ノ神任務終リテ靜カニ山中ニ休息シタマフヲ、往キテ迎フルノ意味ナリシナラン。此等ノ事實ヲ考ヘ合ストキハ、深山ノ白馬モ以前ハ右ノ如ク一定ノ日ヲ以テ里人ニ現ハレシニハ非ザルカ。駿河ノ奥山ナル安倍那梅ヶ島村ノ舊

大山祇

家市川氏ニ、繪馬ノ古板木ヲ藏ス。モトハ二枚アリキ。新曆五月ト十一月ト春秋二季ノ日待ノ日ニ、村民此板木ヲ借りテ紙ニ刷リ其畫ヲ村社ノ前ニ貼リ置クヲ習トセリ。馬ノ歸リ馬 畫ハ右向ト左向トノ二種ニテ、今殘レル板木ノ左向ナルハ之ヲ歸リ馬ト呼ビ、秋ノ祭ニ用キラル、モノナリ〔仙梅日記〕。陸中遠野ニモ之ニ似タル繪馬ノ板木ヲ刷リテ出ス家多シ。春ノ農事ノ始マルニ先ダチテ之ヲ乞ヒテ田ノ水口ニ立テ神ヲ祭ルト云ヘリ〔佐々木繁氏談〕。カノ繪錢ノ出駒入駒ガ、之ト關係アリヤ否ヤハ兎モ角モ、此馬ノ田ノ神山ノ神ノ乗用ナリシコトノミハ、先ヅハ疑ヲ容ル、ノ餘地ナカルベシ。二月初午ノ祭ノ如キモ、今ハ狐ノ縁ノミ深クナリタレドモ、古クハ山ニ入ル日ノ祭ナリシコト、古歌ヲ以テ之ヲ證スルニ難カラズ。常陸那珂郡柳河村附近ニテハ、二月八日ノ午前ト十二月八日ノ午後ヨリト、白キ物ヲ屋外ニ出スコトヲ戒ムル俗信アリ〔人類學會雜誌第百五十九號〕。此日ハ他ノ地方ト同様ニ山ニ入ルコトヲ慎ムヲ見レバ、即チ亦山神ノ祭日ニシテ、白キ物ヲ忌ムハ則チ白馬ヲ村ニ飼ハザルト同趣旨ノ風習ナルコトヲ知ル。

白色ノ忌 他ノ地方ト同様ニ山ニ入ルコトヲ慎ムヲ見レバ、即チ亦山神ノ祭日ニシテ、白キ物ヲ忌ムハ則チ白馬ヲ村ニ飼ハザルト同趣旨ノ風習ナルコトヲ知ル。

サテ此ヨリ愈、駒ケ嶽ノ本論ニ入ラント欲スルナリ。諸國ノ名山ニ駒ケ嶽ト云フモノ多キハ人ノ善ク知ル所ナリ。「ダケ」ハ只ノ山又ハ峯ト云フ語トハ別ニシテ、神山又ハ靈山ヲ意味スル日本語カト思ヘル。蟲送り又ハ雨風祭ニ山ニ神ヲ送ルヲ「ダケ」ノボリト云フコト奥州ニ多シ。東國ニテハ秩父甲州ナドノ御嶽、木曾ノ御岳山ノ類アリ。沖繩ニ於テモ「ダケ」ハ悉ク神ノ山ナリ。駒ケ嶽ト云フガ如キ山ノ名ハ、固ヨリ偶然ニ出デ來ルベキ者ニ非ズ。故ニ今ノ人ガ此ニ無頓着ナルトハ正反對ニ、昔ノ人ハ色々ト其命名ノ由來ヲ説明セント試ミタリ。駒ケ嶽ニ駒ノ住ムト云フ説ハ、北海道渡島ノ駒ケ嶽ニモ存ス。

野馬 文政八年ノ八月松前侯ノ御隱居、人ヲ彼地ニ遣ハシ其噂ノ實否ヲ確メシム。其報告ハ區區ニシテ或ハ青ト栗毛ト二頭ノ牝馬ヲ見タルハ、野飼ノ逸シ去リテ幸ニ熊ノ害ヲ免レシナラント言ヒ、又ハ古來一雙ノ神馬住ムト傳ヘタレバ、試ミニ牝馬ヲ繫ギ置キテ之ヲ誘ハント獻策セシモノアリ〔兔園小說別集上〕。併シ此等ハ山ノ名先ヅ知ラレテ後ニ生ジタル想像ノ産物ナリトモ見ルコトヲ得ベシ。見キモ見ザリキモ要スルニ個々ノ人ノ言ナレバ

ナリ。木曾ノ駒ヶ嶽ニ於テハ、或ハ中腹以上ノ雪ノ中ニ先ヅ消エテ黒ク見ユル箇處、駒ガ草食ム形ニ見ユルガ故ト云ヒ〔本朝俗誌〕、又ハ此山ノ東面ニ駒ノ形ヲシタル大石アリテ、春ハ此石ノ處ヨリ雪消エ始ムルガ爲ニ名ヅクトモ云フ〔新著聞集〕。會津檜枝岐ノ駒ヶ嶽ニテハ之ト反對ニ、夏秋ノ際消エ殘リタル雪ノ形駒ニ似タリト稱シ、越後南魚沼郡室谷ノ奥ナル駒ヶ嶽ニモ同ジ説アリ〔地名辭書〕。同國西頸城郡今井村ノ駒ヶ嶽ハ信濃トノ境ノ山ナリ。山中ノ洞ニ駒ノ形狀アリテ明カニ存ス。故ニ山ノ名トス。俚俗ノ説ニ源義經ノ馬此ニ至リ石ニ化スト云ヘリ〔越後野志六〕。陸中膽澤郡ノ駒ヶ嶽ハ彼地方馬神信仰ノ中心タリ。神馬今モ此山中ニ住ムト云ヒ、昔名馬ノ骨ヲ此山頂ニ埋メタリト傳ヘ、或ハ又殘雪ノ形ガ駒ノ形ニ似タル故ノ名ナリトモ稱ス〔奥羽觀瀾老誌〕。前ニ舉ゲタル鐵製ノ馬ノ像モ、此峯續キノ赤澤山ニ在ルナリ。

岩代耶麻郡金川村ノ駒形山ハ、山ノ南ニ草木ノ生ゼザル砂石ノ地アリテ、恰モ逸馬ノ形ニ似タル故ニ駒形山ト名ヅケタリト稱ス〔新編會津風土記〕。山ノ樹木ノ特ニ茂レル部分、

石馬

例ヘバ富嶽南側ノ鶴ヶ芝ノ如キ、或ハ永ク物ノ成長セザル部分ガ、何カノ形狀ニ類似シタリト云フハ、事ニ由ルト幾分ノ人作ヲ加ヘタルモノナリトモ言ヒ得ベシ。京ノ東山ノ大文字又ハ北山ノ妙法ナドハ、其最モ著シキ例ナリ。併シナガラ雪ノ消エヌ消エタト云フガ如キハ正シク天然ノ現象ナリ。故ニ遠クヨリ望ム人ガ意ヲ以テ迎ヘタル解説ト言フ

農牛農馬

ノ他ナキナリ。越後絲魚川邊ニ牛形ト稱スルハ、季春山中雪消ノ時殘ル形ノ牛ニ似タルモノナリ。飯豐山ニハ乗物形アリ、肩輿ノ形ニ似タリ。粟ヲ蒔ク頃殘雪ノ僧形ヲ爲スヲ名ヅケテ粟蒔入道ト謂ヒ、菱嶽ノ殘雪ノ鉢ノ形狀ニ似タルヲ鉢形ト稱スルガ如キ、皆同

鉢形

ジ類ナリ〔以上越後野志十九〕。富士ノ白雪ノ解ケ殘リタル形ヲ、駿河ヨリ見テ農男、甲斐ノ方ヨリ農牛農馬ナドト謂ヒ、之ヲ望ミテ農事ニ取掛ルガ如キ亦然リ。或ハ南面ニ在リテハ農馬ニ見ユト爲シ、牛ト馬ト自然ニ陰陽兩位ノ方角ヲ表ハスモノナリト言ヒシ人アリ〔甲斐國志三十五〕。マデノ理窟ハ無キマデモ、農耕ト關係アリト考ヘシコトハ右等ノ名稱ヲ見テモ明白ナリ。越中礪波ノ奥ナル人形山ハ、殘雪ノ形ガ二人手ヲ連ネテ立ツガ

人形山

如ク見ユ。其雪ノ次第ニ融ケテ結ビシ手ヲ離ス頃ヨリ、木樵獵人ハ山ニ入りテ差支ナシト信ジ居タリ〔地名辭書〕。是レ即チ障神ノ思想ヲ表示スル者ナルベシ。何レニシテモ遠方ニ在ル物ノ形ハ見ヤウ次第如何ヤウニモ見エ。天井板ノ節穴ガ眼球ノヤウニ思ハレタリ、障子ノ雨ノ痕ガ影法師ト見エタリスル例ハ多シ。仍テ自分ノ考フル所ニテハ、前ニ列記スルガ如キ馬ノ形像説ハ、駒ヶ嶽又ハ駒形山ト云フ地名アリテ後、次第ニ土地ノ人ガシカ看做スヤウニナリシナラント認ム。即チ神馬ヲ崇祀スル信仰ノ方ガ、此傳説ヨリ一段ト古キモノニテハ非ザルカト思ヘリ。若シ然ラズトスレバ、平地ニ於ケル駒形又ハ馬神ノ信仰ハ、全然別口ノモノトナリ了ル結果ヲ見ルベキナリ。

勝善神

駒形權現

駿府淺間社ノ社人ノ唱言ニ、所謂關東ノ「ソウゼン」奥ノ「ソウゼン」、

奥羽ニテ弘ク拜マル、「オコマサマ」ハ、今日村々ノ百姓ガ之ヲ何ト稱フルカヲ問ハズ、表向ノ名稱ハ殆ド皆今ハ駒形神社トナレリ。此ハ明治ノ復古思想ノ一種ノ發露ニシテ、奥羽ノ「オコマ」信仰ノ中心タル膽澤郡ノ駒ヶ嶽ガ、即チ延喜式内ノ駒形神社ナルベシト

箱根權現

謂フ地方誌ノ説ヲ公認シ、之ニ由リテ名ヲ正シ迷信ヲ改メントセシ神祇官ノ目的ニハヨク合セリ。奥州ノ駒形神ハ成程古シ。神名帳ノ發表ヨリ五十餘年前ニ、既ニ神階ヲ正五位ニ進メラレタル記事アリ〔文藝實錄仁壽元年九月二日條〕。箱根ノ駒ヶ嶽ニ祀ラル、駒形權現ノ如キモ、安貞二年ノ火災ノ記事ニ、ソレヨリ又五百年前ノ創立トアレドモ〔吾妻鏡〕、此ハ要スルニ所謂縁起ノ主張ニシテ、實ハ足柄越ノ閉塞シ此山道ノ開カレテヨリ後、奥州ニ往來スル旅人ニ由リテ運搬セラレタル信仰ナリシカモ知レズ。兎ニ角ニ此ノ如ク古キ神ナレバ、其名ノ由來ヲ解説スルコトハ容易ノ業ニハ非ズ。即チ假令駒ノ一字ガ共通ナリトテ、馬ノ保護者ニシテ兼ネテ鬩ノ神タル今ノ「オコマサマ」ヲ、駒形神社ト改メ稱フルノ正シキカ否カハ、今直チニ決スルコト能ハザル難問題ナリ。自分ノ信ズル限ニテハ、少ナクモ駒形ト云フ語ノ解釋トシテハ、地名辭書等ニ採用シタル觀迹聞老志以下ノ通説ハ疑ヲ容ル、餘地アリ。雪ナリ岩ナリ其形狀ガ駒ニ似タルガ故ニ駒形ト謂フナリト説クハ、恐クハ形ト云フ文字ニ拘泥シタル意見ナルベシ。駒ニ似タル「カタチ」ヲ以テ駒

手形

駒形ハ足形

形ト稱スルハ、昔ノ造語法トシテハ不自然ナリ。「カタ」ハヤハリ押型ナドノ型ニシテ、手形ノ形ト同ジク物ノ上ニ印サレタル跡ヲ意味スルモノト解スベシ。而シテ馬ガ其跡ヲ留ムト云フニハ言フ迄モ無ク其跡ヲ以テセザルベカラズ。サレバ古代ノ奥州ノ駒形神モ亦多クノ社ノ神々ノヤウニ、祭ノ日ニ神馬ニ騎リテ降ラレタルガ、其馬ノ痕跡殊ニ鮮カニ岩カ何カノ上ニ殘リシ爲ニ、頗ル地方ノ信仰ヲ繋ギ、從ヒテ其御神ノ名トモ爲リシカト思ヘル。始メテ社ヲ建ツルト同時ニ又ハソレヨリモ以前カラ、駒形ハ其地ノ地名ナリシヲ、神ノ御名ニモ及シタリト見ルモ差支無シ。勿論此ハ駒形神社ノ名ノ由來ヲ想像シタル迄ニテ、其後色々ノ神祕ガ附加ヘラレ、或ハ本然ノ信仰ニ多少ノ變動ヲ及スニ至リシコトモ、決シテ無シトハ言フ能ハザルナリ。

駒形ト云フ神ハ、必ズシモ延喜式ナドヲ搜索セズトモ、現代諸國ノ平地ニイクラモ之ヲ祀リテアルコトハ事實ナリ。但シ其分布ガ東北ヨリモ寧ろ關東ノ諸國ニ多キハ、多分ハ箱根ノ感化影響ナルベシ。而シテ山城朝初期ノ駒形神ガ如何ナル御神ナリシカハ不明

箱根縁起

トシテモ、近世ノ駒形権現ガ馬ト深キ關係アリシコトハ争フ能ハズトス。箱根ニハ今ヨリ四百五十年前ノ縁起殘存ス。鎌倉時代ノ記録ニ基キテ起草ストアリテ、ホボ又吾妻鏡ノ記事トモ一致スレドモ、其神ノ由來ニ至リテハ固ヨリ本居半田兩大人ノ神道ニテハ之ヲ説明スル能ハザルト同時ニ、佛教ヨリ言フモ尙且ツ一種ノ異端ナリシガ如ク、密宗ノ曼陀羅思想ヲ以テ辛クシテ之ト聯絡ヲ保チ得タリシ姿アリ。最初此山ニ三代三人ノ異人出現ス。其名ヲ聖占仙人利行上人及ビ玄利老人ト謂フ。聖占ハ高麗權現即チ駒形神、利行ハ能善神、玄利ハ即チ高根神ナリ。此山ニハ右ノ三神ニ奉仕スル爲ニ多クノ修驗者ト比丘尼ト住ミタリト云フコトナルガ、彼等ハ果シテ本山當山ノ行人タチノ如ク、佛道ニ染上ゲタル者ナリシカ否カハ疑問ナリ。山ヲ降りテ村々ニ勸請セラレシ駒形ニモ、頗ル後世ノ富士行者ノ如キ面目ヲ存セシ者アリキ。例ヘバ相州酒匂村ノ鎮守駒形社ノ如キ、祭神ヲ鷓鴣葺不合尊ト稱シテ木ノ御立像ヲ安置スル外ニ、別當寺ニ御生題ト稱スル銅鏡ニ鑄出シタル神像アリ。唐服ヲ著タル仙人ノ如キ姿ニシテ、其鏡ハ普通ノ懸佛ト云フ物

仙人

比丘尼

御生題

ト同ジカレドモ、兩側ノ紐附ノ耳ニ當ル場所ニ奇怪ナル人ノ顔ヲ鑿出シ、裏面ニハ天文二十二年駒形大權現御生題ト刻シタリキ〔新編相模風土記〕。御生題ハ勿論御正體ノコトナランモ、兎ニ角ニ一種異様ナル信仰ノ對象ナリ。甲州其他ノ地方ニ御生題山ト云フ高山アリ。中古修驗道ノ遺跡ナラント思ヘド、土地ノ人モ多クハ地名ノ由來ヲ説明スルコト能ハズ。

駒ノ石像

箱根ノ駒形ガ馬ノ神ナリシト云フコトハ、古記ニ據リテ之ヲ推定スルコト能ハズ。唯今日僅カニ地名又ハ神名ノ解釋トシテ、爰ニモ例ノ駒ノ「カタチ」ヲ、彫リタル石アリト傳フルノミ。更ニ此火山ノ南側、伊豆ノ輕井澤ヲ下リニ赴ケバ、路ノ右ナル松ノ中ニ駒方權現ノ社アリ。三尺ニ二尺五寸ノ平石ニ駒ノ形ヲ浮彫ニシ、烏帽子單衣ヲ著シテ乗レル人アリ。土地ノ者ノ説ニハ、昔頼朝公ノ愛馬此處ニテ俄カニ死ス。依リテ駒方ノ神ニ齋フト云ヘリ〔伊豆志四〕。里ニ在ル駒形社ノ多クハ明白ニ馬ノ保護神ナリ。武州中尾ノ駒形社ノ三個ノ白馬像ノ例ノ如ク、駒形神ノ本地佛トシテ馬頭觀音ヲ説ク者多シ。東京

馬頭觀音

淺草ノ駒形堂モ本尊ハ亦馬頭觀音ナリ。今ハ町中ノ堂トナリテ馬バカリニテハ堂守ノ暮シ立タヌ故ニ、外ノ祈願モ無論聽キタマフト雖、其御禮參ニハ後々マデモ小サキ馬ノ形ヲ作りテ之ヲ奉納ス。馬頭觀音ハ日本ノ田舎ヲ見タル人々ノ何レモ由來ヲ知ランコトヲ欲スル一ノ奇現象ナリ。誤レリヤ否ヤハ知ラザルモ自分ハ之ヲ斯ク解釋ス。今日道傍ニ立ツ馬頭觀音ハ簡略ニ文字ヲ刻ミタル石碑多ケレドモ、以前ハ專ラ馬ノ頭ヲシタル石像又ハ木ノ柱ナリシヲ、道祖神ミチノカミヲ地藏ニシテ了ヒシト同一ノ筆法ニテ、佛教ノ方ノ人々ガ辛苦シテ珍シキ經典ノ中ヨリ馬頭觀音ノ名ヲ見出シ、早速其名ヲ採用セシモノナルベシ。天竺ノ觀音ノ像ニ馬ノ頭ヲ冠ニシタルモノアルハ、佛道ヲ宣傳スルコト恰モ馬ガ野ノ草ヲ食ヒ行クガ如シト云フ象徴ナリト聞ケド〔島地大等師説〕、日本ノ馬頭觀音ニハサル思想モ無ケレバ、此ノ如キ大流行ヲ促スベキ動機ニ乏シ。今日ノ路傍ノ馬頭觀音ハ大抵馬ガ其場處ニ斃レシヲ供養スル爲ニ立テタリト云フモ、而モ其石ノ前ニ線香ヲ焚キ花ヲ供フルコト絶エザルハ、今後往來ノ馬ニ同ジ災ノ無キコトヲ祈ルナリト云ヘリ。全ク以テ佛

供養ト斷

馬ノ首

法ノ薄キ被衣ヲ著タル昔ノ馬ノ神ノ面影ナラズヤ。此故ニ自分ハ馬頭觀音ノ元ノ名ハ馬頭神ナラント思ヘリ。甲州ナドノ馬頭觀音ノ石像ハ、今モ馬ノ首ヲ頭上ニ戴キテハアレド、頭ヨリ下ハ眞ノ觀音ニ成切ツテ、馬ノ首ハ追々ト小サク、殆ド丁髷ホドニ退化シタル者多シト云ヘリ〔甲斐落葉〕。自分ハ又相州ノ西秦野村及ビ上秦野村ニテ、近年ノ建設ニ係ル鮮明ナル馬頭神ノ石體ヲ見タリ。馬ノ首ヲ戴ケル人物ハ何レノ點ニモ觀音ラシキ様態ナク、寧ロ常陸ナドノ子安神トヨク似テ女體ナルカト思ヘリ。東京ノ西郊下練馬ト上板橋トノ境上ニハ、青面金剛神ノ石像、足下ニ「アマノジャク」ヲ踏ミ鶏ヲ隨ヘツ、而モ頭ニ馬ノ首ヲ戴ケル者アリ。寛政年間ノ建設ナリキ。

青面金剛

淺草駒形堂ノ觀音ハ淺草寺ノ觀音ト昔ハ何カノ關係アリシモノニハ非ザルカ。二百年來ノ江戸人ハ、アマリニ筆豆ニシテ却リテ昔ノ事ヲ不明ニシタル傾キアレド、少ナクモ此堂ノ地ガ往古淺草觀音ノ境内ナリト云フ記事ハ信ズルニ足レリ〔地名辭書〕。然ルニコノ淺草寺ノ片脇田原町ニ、近キ頃マデ田村八太夫ト云フ關東ノ舞々ノ總取締居住セリ。

舞々

舞々ハ所謂陰陽師ノ一分派ニシテ、又神事舞太夫トモ稱ヘ、各地ニ二戸三戸ヅツ村ノ端ニ住ミテ、常ハ普通ノ百姓ト同ジク農商ヲ營ミ、祭禮ノ折バカリ社頭ニ出デテ舞ヲ舞フヲ役トス。又頼マレテ祈禱ヲ爲ス。色々ノ神ノ繪札ヲ配リテ米錢ヲ貰フ。其女房ハ多クハ例ノ梓巫ニシテ、此モ亦札ヲ配ルヲ以テ職業トスル者ナリ。田村八太夫ノ書上ニ依レバ、後世ノ舞々ガ配ル札ハ大黒ノ像、青襖ト稱スル繪馬及ビ竈神ノ札ノ三種ナリト云フ

竈神

ニ〔嬉遊笑覽〕、一説ニハ舞々本來ノ家職トシテ配ルハ日曆十二神ノ札及ビ神馬ノ札、梓巫ガ家職トシテ配ルハ繪馬ト稱シテ猿ノ馬ヲ牽ク繪札ナリトモ云ヘリ〔寺社捷徑〕。右ノ如ク配札ノ種類モ更ニ一定セズ、現ニ田村ガ配下タル上州高崎新町ノ神事舞太夫ノ如キハ、

猿馬ヲ牽ク繪札

三社權現

彼等ノ奉仕スル三社權現ノ御札ナリト稱シテ之ヲ村々ニ配リ居タリ〔高崎志〕。三社權現ハ淺草觀音ノ境内ニモ在リ、田村八太夫實ニ此ガ神主タリキ。田村ノ神道ハ昔トシテハ一寸奇抜ナル神道ナリ。天思兼命ノ神傳ナリト稱シテ、白川吉田二家ノ支配ヲ受ケズ。別ニ舞太夫梓巫ノ輩ヲ糾合シテ一派ノ習合説ヲ立テ居タリ〔續甲子夜話七十三〕。田村派ノ

習合神道

濱成兄弟

主張ニテハ、淺草ノ三社權現ノ祭神ハ往古宮戸川ノ流ニ於テ一寸八分ノ觀音像ヲ感得セシ檜熊濱成武成三人ノ兄弟ナリト稱スレドモ、之ヲ信用スルハ餘程ノ骨折ナリ。檜熊ハ元來濱成武成兩人ノ苗字デアル筈ナリ。無理ニ三ツニ切りテ三社ニ附ケ合セタル形アリ。之ニ比ブレバ高崎ノ三社權現ニ於テ三社トハ荒神ト駒形ト大黒トナリト云フ方寧ク無頓著ニシテ面白シ。勿論此トテモ驚クニ堪ヘタル烏合ノ衆ナレドモ、之ニ由リテ元祿以後田村氏ノ定メタル三種ノ配札ナルモノノ中、青襖ノ像ト云フ繪札ノ、モト駒形信仰ヨリ出デタルモノヲシキコトヲ想像シ得ル便リトハナル也。高崎ノ三社神中ノ大黒、田村ノ三種ノ配札中ノ大黒ノ像ヘ取分ケテ不調和ノ感アレドモ、此ハ舞太夫ノ徒ガ其商賣敵タル惠比須願人ト稱スル別派ノ太夫ニ對抗スル爲ノ一策トモ考フルコトヲ得ベシ。元祿頃ノ冊子ニ舞々ガ歳ノ暮ニ困リ、當時流行ノ大黒舞太夫ニ早變リシテ錢儲ケヲシタル話モ思ヒ合サル、ナリ〔嬉遊笑覽〕。大黒ハ以前ノ摩多羅神ノ思想ヨリ推スモ必ズシモ臺所ト縁無シトハ言ヒ難シ。荒神ト駒形トニ至リテハ竈ヲ中ニ置キテ正シク攻守同盟ノ間柄ナ

大黒

德神

リ。確カナルコトハマダ知ラザレド、カノ青襖ノ像ナルモノモ、或ハ「エビスサマノカホカクシ」トモ云ヒテ、後ニハヤハリ貰ヒ受ケテ竈ノ側ニ貼置クベキモノナリキト云ヘリ〔山中笑翁談〕。竈ト馬トノ深キ關係モ、或ハ同ジ陰陽師ガ古クヨリ二種ノ札ヲ一緒ニ取扱ヒ來リシガ爲ニ、イツト無ク理窟ヲ附シテ之ヲ結び合セタル者トモ見ルコトヲ得。何レニシテモ舞々ノ如キ特殊ノ巫祝ガ駒形信仰ノ傳播ニ參與シテアリシコトハ注意スベキ事實ナリ。今日ハ箱根以西ノ國々ニ於テハ、馬ノ神ノ崇拜ハ盛ナレドモ駒形ノ名ハ關東ホドニハ行ハレテアラス。然ルニ南北朝時代ノ記録ニハ山城男山ノ八幡宮ニモ駒形神人ナル者ノ有リシコトヲ傳フ〔國大曆正平元年八月十二日條〕。而シテ男山ノ八幡ハモト九州ヨリ上リタマヒシ神ナリ。此故ニ陸中ノ駒形神社ノ現況ヲ以テ昔ノ駒形ノ真相ヲ類推セントスルハ、返スルモ道理ナキコトニテ、「オコマサマ」ノ特色ハ必ズシモ之ヲ全國ノ馬ノ神ニ伴フモノトスル能ハザルモ亦明白ナリ。

馬塚八馬ノ神

駒形ノ最初ノ意義ガ假ニ神降臨ノ遺跡ヲ示スコト自分ノ説ノ如ク

ナリキトスルモ、此ト同時ニ馬其物ヲ神トスル別種ノ信仰アリシコトハ亦看過スベカラザル事實ナリ。神ガ本地佛ノ形態ヲ以テ一ノ社ニ永ク留リ、神迎神送ノ思想ガ形バカリノ儀式トナリ終ルト共ニ、我々ノ同胞ガ宗教生活モ一時却リテ天然物崇拜ノ境涯ニ逆戻

天然物崇拜

リシタル時代アリ。語ヲ換ヘテ言ハ、神モ召サザル馬バカリヲ怖レ且ツ禱リタル例ハ甚シク多キナリ。例ヘバ阿波國ニハカノ丹生明神ガ乗捨テラレシト云フ石馬ノ外ニ、今一ツ有名ナル天馬石アリ。名所圖會ニハ勝浦郡田野村トアレドモ今ハサル村ノ名無シ。

名馬池月

氏ノ名馬池月爰ニ來リテ死ストモ傳フ。名所圖會ノ挿畫ニ伏シタル馬ノ形ニ描ケルハ所謂繪空事ニテ、誠ハ高サ四尺バカリノ立姿ナリ。ソレモ小兒ガ石ヲ打付ケナドシタル爲ニ、前ノ如クハ形ノ似テ居ラヌヤウニナレリト云ヘバ、今日ハ最早ドウナリタルカ分ラヌナルベシ。或ハ鹿島ノ要石ノ如ク地底ヨリ生エ貫キタリト云ヒ、又ハ此石ニ耳ヲ當テテ聽ケバ浪ノ音遙カニ響キ、船漕グ人ノ聲響ノ音ガスルナドト傳ヘラレシモノナリ(以上

要石

燈下鏡)。飛驒大野郡清見村ノ龍ヶ峯ノ峠ニモ、天ヨリ降りシ龍馬ノ化石ト稱シ駒ノ形ヲセシ大石アリ。連錢ノ紋マデモ鮮明ナリキト云ヘバ(北道遊簿)、此モ亦茸毛ナリシナラシ。此峠ハ以前ノ往還ナレバ之ヲ見聞セシ人モ多カラシニ、或説ニハ單ニ龍馬ノ蹄ノ痕ガ岩ノ上ニ有ルバカリノ如クニモ記セリ(飛驒之山川)。今日トナリテハ決シ難キ疑問ナリ。播磨宍粟郡神戸村大字須行名ニテハ、岡城山ノ谷川ノ中ニ馬乘石アリ。馬ニ似タル岩ノ上ニ又岩アリテ人ノ乗ルガ如シ(播磨鑑)。大和ノ橋寺ニハ古キ石人一軀ヲ巖石ニ彫付ケ

馬乘石

馬石

其側ニ馬ノ如キ獸アリ。俗ニ之ヲ阿彌陀ト言ヒ、又聖德太子ト甲斐黑駒ノ像ナリト云フ(遊藝談錄)。江州ノ石馬寺ニハ門前ノ池ノ側ニ馬ノ形ヲシタル石體在リ。此モ亦太子ノ遺跡譚ヲ傳ヘタリ(大内青巒氏談)。越後北蒲原郡加治村大字茗荷谷ノ山中、藥師堂ノ傍ニ大石アリ。縦ハ一丈バカリ横ハ七尺餘、半ハ土中ニ没ス。土人之ヲ馬石ト名ヅク。其形臥馬ノ如シ。石上ノ苔ノ中ニ二寸ホドノ白毛ヲ生ズトアリ(越後野志十八)。肥前西松浦郡大川村駒鳴ノ駒鳴峠ニモ駒ニ似タル石アリキ。昔鎮西八郎爲朝櫻野ノ池ニ於テ大蛇ヲ退治

爲朝

道ノ神

シ、其鱗ヲ馬ニ積ミテ此阪路ニ掛リシニ、アマリ荷ノ重キ爲ニ馬ガ嘶キタリ。峠ノ名ト村ノ名ハ此ヨリ起ルトノミアリテ、此ニハ化石ノ物語ハ傳ヘザレドモ、此時ナル石ノ馬モ夜毎ニ聲ヲ立テ、往來ノ人ヲ劫カセシ故ニ、後ニ石屋ヲ頼ミテ之ヲ打割ラシムト云ヘリ〔松浦記集成〕。此モ亦今ハシカトシタル形ハ無キナルベシ。山城井手玉川ニ沿ヒタル雨山ノ雨吹龍王社ノ址ニ殘レル駒岩ハ正シク人作ナリ。自然ノ大岩ノ面ニ駒ノ形ヲ浮彫ニシテ甚ダ古雅ノモノナリシガ、今ハ磨滅シテ明瞭ナラズ。舊記ニ依レバ保延三年五月六日ノ文字アリシ由ナリ〔綴喜郡志〕。石ニ詳シキ雲根志ノ説ニ依レバ、遠江國ニ駒形濱ト云フ渡海ノ湊アリ。海底ニ馬ノ形ヲシタル大岩アリテ、出入ノ船ニ馬又ハ馬ノ繪アル物ヲ運ブトキハ必ズ裳ヲ受ケテ難船ス。故ニ骨牌ノ荷ナドヲ送ルニモ、四十八枚ノ中ヨリ特ニ馬ノ繪ノミヲ抜キテ之ヲ陸ヨリ廻送スト云ヘリ。遠州ニハ駒形ト云フ船著ハ無ケレドモ、榛原郡御前崎ノ突端ニハ駒形大明神ノ社アリ。此邊ノ海ニテハ何故カ航路甚ダ磯近クニアリテ、岬ニ續ケル暗礁ノ爲ニ船ヲ損ズル者昔モ今モ絶ユルコト無シ。湊ト云フ程

駒岩

駒形濱

九十九

ニハ非ザレドモ神社ノ東ノ山陰ニ僅カノ船掛リ場アリ。自分ガ旅行シテ聞取リタル所ニテハ、沖ノ御前ノ岩ニハ天然カ人工カハ知ラズ、九十九疋ノ駒ノ形アリテ汐干ノ時ニハ鮮カニ見ユト云ヘリ。但シ馬ヲ忌ムト云フ話ニ就キテハ終ニ之ヲ知レル人ニ逢ハザリキ。「メクリ」ノ骨牌ヲ江戸ニ送ル話モ實ハアマリニ出來過ギタリ。卯花園漫錄ニハ大阪ヨリ江戸ヘ送ル骨牌ノ中ヨリ馬ノ繪ノミハ陸送りスルナリト云ヘド、土地ノ人ノ知ラヌ話ナレバ猶如何カト思ヘル。

巖ト塚

又馬石ニ對シテ馬塚又ハ名馬塚ト云フ塚モ諸國ニ多シ。此ハ獨リ馬石ニハ限ラズ、石ノ無キ土地ニ於テ塚ヲ以テ石ニ代フルハ常ノ例ニシテ、鶏石ニ鶏塚、烏帽子岩ニ烏帽子塚、休石ニ休塚、鉢石ニ鉢塚等多クハ皆然リ。馬塚ノ有名ナルモノハ尾張丹羽郡羽黒村大字羽黒ノ磨墨塚。此ハ其附近ニ梶原某ト云フ武士ノ居住セシ爲ニ起リタル説ラシク、塚ノ上ニ一樹ノ梅ノ栽エラレタル迄モ筋ノ梅ノ故事ニ附會シタリ〔犬山名所圖會〕。讚岐木田郡牟禮村大字牟禮ニハ義經ノ愛馬太夫黒ノ墓アリ。屋島戰捷ノ後佐藤嗣信ノ追善ノ爲

名馬磨墨

太夫黒

馬ノ墓地

ニ太刀一振ト共ニ此馬ヲ志度寺ニ寄進ス。志度寺ニハ既無リシカバ此村ノ極樂寺之ヲ預カル。後ニ嗣信ノ墓前ニ赴キテ死スト傳ヘラル〔讃岐三代物語〕。下總印旛郡船穂村大字船尾ニモ字名馬塚アリ。未ダ其由來ヲ知ラズ。出羽ノ莊内領塔ノ腰山ノ麓ニ小サキ祠アリテ馬頭觀音ノ石像ヲ祀ル。酒井家ノ先代大乘院殿ノ召サレシ大河原毛ト云フ名馬ノ塚ナリ。此ヨリ此處ヲ御召馬ノ葬處ト定メラル〔三郡雜誌下〕。備前邑久郡國府村大字福里ニ馬塚アリ。盛衰記ノ勇士海左介ナル者ノ名馬ヲ埋ム。左介此馬ニ騎リテ海上ヲ馳騁セシガ、或時沖ニテ馬鹿ト云フ物ニ遭ヒテ、其馬傷ツケラレ歸リ來リテ死スト云フ〔和氣絹上〕。馬鹿ト云フガ如キ妙ナ怪物此世ノ中ニ在リヤ、我ハ幸ニシテ未ダ知ラザルナリ。蒲冠者範賴ノ乘馬ハ虎月毛ト名ヅク。亦一ノ名駿ナリ。九州征伐ノ折菊池家ノ先祖之ヲ拜領ス。數代ヲ經テ此馬猶堅固ナリ。後五百石ノ祿ヲ宛行ヒテ休息セシム。寛永年間ニ至リ齡五百餘歳ニシテ歿ス。野送ノ伴ヲスル者一千人、其馬ノ墓碑極メテ宏大ナル者殘存スト云フ〔阿州奇事雜話一〕。名馬ノ爲ニ墓ヲ築クト云フ傳説ハ決シテ新シキモノニ非ズ。現ニ播

馬シカ

名馬ノ塚

磨ノ古風土記ノ記事ニモ、飾磨郡貽和里ノ船丘ノ北邊ニ馬墓及ビ馬墓池アリト見ユ。昔ノ昔大泊瀨天皇ノ御世ニ、尾治連等ガ先祖長日子ナル者、死スルニ臨ミテ最愛ノ妾ト馬トヲ葬ルコト吾ニ准ゼヨト遺言ス。故ニ第二ノハ其女、第三ノ墓ハ馬ヲ埋メタルモノナリ。後世ノ國司ニ上生石太夫ナル者アリ、馬墓ノ邊ニ池ヲ構ヘタリトアリ。自分ハ此話ヲ以テ、或史學者ノスルガ如ク、古キガ故ニ之ヲ史實ナリトハ視ルコト能ハズ。殊ニ丘ヲ船丘ト謂ヒ、又馬塚ニ據リテ池ヲ築クト云フガ如キハ、後代ニモ類例多キ龍神ノ信仰ヲ表示スルモノナリト言フコトヲ得。

池ト馬

越後西蒲原郡峯岡村大字平澤ノ馬塚ハ、土人ハ之ヲ鞍掛松トモ稱ス。昔上杉謙信此地ニ來リシ時、其愛馬暴カニ病ミテ死ス。因ツテ之ヲ埋メテ塚ノ上ニ松ヲ栽エタリト云フ〔越後野志十一〕。此話ノ武州馬引澤ノ駒繫松トヨク似タルコトハ誰シモ心附クベキナリ。鞍掛松ノ名モ偶然ニハ非ザルニ似タリ。之ニ由リテ案ズルニ、多クノ馬塚ノ由來ニハ單純ナル記念ト云フ外ニ信仰アリ。肥後八代郡宮原町大字拵ニテハ、街道ノ傍ニ一所ノ馬

鞍掛松

馬塚ハ馬ノ跡

神ヲ祀レリ。豊臣秀吉島津征伐ノ途次、村雨ト云フ愛馬ノ斃レタルヲ、此處ニ埋メテ印ニ覆テ栽エタリ。里人之ヲ馬ノ神ト崇敬シテ永ク往還ノ馬ノ爲ニ其平安ヲ祈願スル風習アリキ(肥後國志)。此等ノ口碑ヲ比較スルトキハ、固有名詞ノ必ズシモ大ナル要素ナラザリシコトヲ知ルニ足レリ。岩代河沼郡若宮村大字牛川字牛澤ノ名馬塚ハ、曾テ佐瀬上總ト云フ地侍アリテ、最愛ノ駿馬ヲ新地頭ノ蒲生殿ニ取ラル、ヲ惜ミ、馬ヲ殺シテ身モ亦自殺セシ、其馬ノ塚ナリト傳ヘラル(新編會津風土記)。此話一ツノミヲ聞ケバ、如何ニモ尤モラシキ中世ノ武邊咄ナレドモ、過去三百年ノ間、土地ノ百姓ノ信仰生活ト交渉セシ點ハ、恐クハ右ノ「ローマンス」ノ中心ヨリハ遠キモノニテ、人及ビ馬ノ怨恨ト、之ニ

御靈

基ク馬ノ祟ト云フコトニ重キヲ置キシ傳説ナルベシ。此一條ノ如キハ、所謂御靈信仰ノ起原即チ邪神アサキカミ又ハ荒神アラハルカミノ思想ト縁遠クナリタル人々ニハ少シク信ジ難キコトナランモ、馬ガ死シテ村里ニ災シタリト云フ例ハイクラモ有ルナリ。例ヘバ讚岐三豊郡莊内村大字箱ニ於テハ、昔八幡宮ノ神馬屢、夜出デテ島ノ物ヲ荒スニ因リ、浦人某ナル者之ヲ殺シタ

馬ノ祟

ルニ、忽チ心亂レテ病ニ罹リ、後ニハ一村ニ祟ヲ蒙ル者多カリシカバ、終ニ馬骨ヲ取集メテ馬神塚ヲ築キ、之ヲ馬神ト祀リテ漸ク其患ヲ免レ得タリ(西讃府志)。備後絲崎ノ絲崎八幡宮ノ境内ニ馬出馬神ト云フ祠アリ。昔此八幡宮ノ神馬モ同ジ惡辭アリテ、夜ナ夜ナ田島ノ大豆ヲ喰ヒケルヲ、土地ノ者過リテ之ヲ打殺セシニヨリ祝神ト祀リタリ。此故大豆ノ忌ニ絲崎谷ニテハ決シテ大豆ヲ栽培セズ。之ヲ犯ス者ハ祟アリキト云フ(三原志稿)。常陸鹿島郡大同村ノ六月十五日ノ泣祭ナルモノモ、本來馬ノ靈ヲ弔フノ目的ヲ以テ營マレ、事ノ始末ハ頗ル馬引澤ノ葦毛ノ話ト相似タリ。或年此村ノ淖田ソノタノ泥ノ中ニ陥リテ一頭ノ馬死ス。其後此田ヨリ馬ノ面ニ似タル害蟲發生シテ耕作ヲ荒シ、祈禱其效ヲ奏セザリシ餘ニ、或ハカノ馬ノ祟ニハ非ズヤト心附キ、馬ヲ祭ルコト、ナリテヨリ始メテ蟲ノ出ルコト熄ミタリ。故ニ毎年六月望ニ一村休業シ、鉦太鼓ニテ大聲ニ泣キ廻ルト云フコトナリ(日本宗教風俗志)。蟲送ニ鉦鼓ヲ鳴ラスコトハ弘ク行ハル、風習ニテ、一般ニハ害蟲ヲ

馬ノ首

實盛

戰場ニ歿シタル者ノ亡靈ノ所爲ナリトス。實盛ノ祭ナルモノ即チ是ナリ。勿論馬ニ限り

馬ト蝗

磨墨

賴政

シコトニハ非ズ。併シ伊勢大神宮ノ御神田ノ神事ニ、舞ヲ舞フ祝等ノ手ニ持ツ御田扇ニハ馬ヲ描キ、之ヲ以テ熱病ノ患者ヲ扇ゲバ熱ガ醒メ、又之ヲ以テ田ヲ扇ゲバ蝗ガ附カズト云フヲ見レバ〔本朝俗誌志五〕、古クハ馬ト田ノ邊トノ間ニ何カノ關係アリシナラン。蓋シ此等ノ馬ドモハ素ヨリ名モ無キ田舎者ナルニ、而モ猶斯バカリノ威靈ヲ行フコトヲ得タリシナリ。況ヤ天下ノ駿足ノ身ノ果ニ至リテハ、其憤怒ノ勢ハ到底之ヲ推測スルコト能ハズ。磨墨ハ馬ノ最モ不遇ナル者ナリ。池月ナカリセバ能ク一代ニ雄視スルコトヲ得タリシナランニ、由ナキ主取ガ基トナリテ、生キテハアラユル壓迫ヲ受ケ、終ニ狐崎ノ悲運ニ殉ジタリト云フナリ。要スルニ化ケズシテハ居リ難キ馬ナリ。似タル例ヲ引クナラバ、源三位賴政ガ平家ノ爲ニ奪ハレントセシ木下ト云フ名馬モ、死シテ後山城葛野郡木島明神ノ附近、寶金剛橋ノ南ノ田中ニ神塚ヲ築キテ祭ラレタリ。木島明神ノ名モ木下ヨリ出ヅト云フ雜説マデ古クヨリアリシモ〔臥雲日件錄長祿二年閏年正月二十五日條〕、夫ハ勿論ノ誤ニシテ、社ノ東ニ在リト云フ養蠶社ヨカヒノヤシコソ或ハ此馬ノ神ナランカト謂フ〔都名勝圖

亡念ト馬

會〕。又誰ガ唱ヘ始メタルカ知ラズ、此馬ハ賴政ニ退治セラレシ鶴ノ生レ變リニシテ、彼ガ一家ノ滅亡ヲ招クノ源トナリシモ、昔ノ怨ヲ馬ト成リテ報イタルナリト云フ噂サヘアリシナリ〔臥雲日件錄同上〕。

駒ト岩屋

馬ノ神ノ信仰ハ必ズシモ死靈ニノミハ限ラレテアラズ。諸國ノ駒ケ嶽ニ活キタル神馬ノ往來ヲ見ルト云フ如ク、越前ノ穴馬谷アナウマノヤナドニモ穴ノ中ニ馬アリテ、時トシテ谷ノ口ノ鹽井ノ水ヲ來テ飲ムト云フ説アリ〔大野郡誌〕。多クノ巖窟ニハ駒ノ住ムト云フ口碑存セリ。甲斐西八代郡古關村大字瀬戸字山中ノ栃木澤トキノキザニハ、土人ガ駒ノ寢處ト稱スル岩穴アリ。夏ハ涼風ヲ起シ冬ハ暖風ヲ生ズル爲ニ、其中ノ草ノミハ夏枯レテ冬繁茂スト云ヘリ〔甲斐國志〕。今ナラバ蠶ノ種紙デモ藏シ置クベキ一ノ風穴ニ過ギザレドモ、昔ノ人ニ取リテハ濫ニ近ヅクベカラザル靈地ナリシナリ。此等ハ所謂活馬ノ神ノ信仰ノ殘片ニシテ、起原頗ル古キモノナルベキモ、塚穴ヲ以テ悉ク葬處ト看做ス後世トナリテハ、追々ト此ヲモ死馬ノ幽靈ト考フルガ如キ傾向ヲ生ゼシガ如シ。多クノ馬塚ハ恐クハ掘ツテ見レバ

生駒

何モ無ク、唯ノ祭場タル封土ニ過ギヌナルベシ。馬ヲ一疋埋ムルハ決シテ容易ノ業ニ非ズ。故ニ塚ノ形ノアマリニ小サキ場合ノ如キハ、是非無ク馬骨ヲ集メテ之ヲ埋メタリナドト云フナリ。陸奥上北郡六ヶ所村大字出戸ノ口碑ニ至リテハ更ニ一段ノ荒唐ヲ加フ。

巨馬

曰ク昔此村ニ常ノ馬ヲ四ツ五ツモ合セシホドノ大馬出現シテ、人ヲ追ヒ牧ノ馬ヲ食フ。

七座

其大馬ノ出デタル故ニ大字出戸、之ヲ捕ヘテ檢分セシ故ニ大字高架、馬ノ形ガ平カナリシ故ニ大字平沼ノ地名ハ生ジタリ。又之ヲ射殺シテ埋メシ塚ヲ「七クラ」ト云フハ、馬ノ

大骨

背長クシテ鞍ヲ七ツ置クホドナリシ故ナリトモ傳ヘタリ。其後領主ノ命アリテ此塚ヲ發

妙見

キ白骨ヲ取出シ見ルニ、背骨ノ周圍二尺ニ餘レリ云々〔眞澄遊覽記八〕。思フニ「ナ、クラ」ハ七座ニシテ北斗七星ノ崇拜ニ基ク名ナルベシ。龍馬ヲ妙見ニ配スルコトハ前ノ磐城相

馬ノ例モアルナリ。此ノ如キ巨大ノ白骨ナルヲ、如何ニシテ鯨カ何カノ物ニ非ザルコトヲ確メ得タリシカ、怪シキ話ナリト言フベシ。此迄話ガ進ミテ來レバ、死馬ノ祟ヨリモ活馬ノ威力ノ大ナルコトヲ認メザル能ハズ。カノ奥州ノ蒼前神ノ神體タル白馬ハ立往生

馬醫

ヲセシ馬ナリト謂ヒ、或ハ猿牽ノ傳書ノ中ニ茸毛ハ死シテ復蘇リシ馬ナドト云フガ如キハ〔考古學雜誌二卷十號拙稿「勝善神」〕、恐クハ生死二様ノ信仰ヲ調和セントシタル努力ノ結果ナランカ。猿牽ハ予輩ノ信ズル所ニテハ以前ハ馬醫ヲ兼ネ居タリ。而シテ理想ノ馬醫

白樂天

即チ伯樂ハ能ク死馬ヲ活スコトヲ得タリト信ゼラレシ故ニ、後世ノ俗人ハ又之ト誤解シテ白樂天ヲ崇拜シタリ〔猿屋傳書〕。薩摩國薩摩郡山崎村大字山崎宇荒瀬ノ馬頭觀音ハ、觀

音ト稱シナガラ小サキ祠ニシテ其正體モ二箇ノ石像ナリ。昔玄心玄參ト云フ兄弟ノ馬醫アリ。串木野村ノ人トモ又市來ノ者トモ謂フ。死馬ノ既ニ皮ヲ剝ガレタルヲ見テ、此馬尙生氣アリト言ヒ、紙ヲ以テ之ヲ包ミ藥ヲ飲マシムルニ馬忽チ蘇生ス。里人之ヲ見テ必ズ魔法ノ所爲ナラント思ヒ、後ノ害ヲ慮リテ兩人ヲ殺シ、而モ崇ヲ長レテ之ヲ馬頭觀音ニ祀リタリ。其祭ノ日ハ六月十八日ニテ、夥シキ人馬遠近ヨリ參詣スト云フ〔三國名勝圖會〕。羽後南秋田郡北浦町附近ニテハ、以前ハ既ノ柱ニ鳥居ヲ描キ置ク風習アリキ。馬醫ガ始メテ二歳駒ノ斂ヲスル時ニ、其血ヲ以テ藁又ハ其駒ノ鬣ニ浸シ、此ノ如キ鳥居ヲ描

キテ馬ノ神ヲ祭リシモノナリ〔眞澄遊覽記二十九〕。近江阪田郡鳥居本村大字原ノ八幡山ノ麓ニ、馬塚鞍塚ノ二ツノ塚ト太子堂トアリ。此山ノ寶瑞寺俗ニ八幡堂ト稱スル寺ノ縁起ニ依レバ、抑此八幡ハ聖德太子ノ勸請シタマフ所ナリトハ誠ニ驚クベキ事實ナリ。太子ハ何カノ都合ヲ以テ此邊マデ來テ佛敵ト戰ヘレシガ、其戰場ニ於テ御乘馬ノ駿足斃レ死ス。今モ路ノ側ニ有ル二ツノ塚ハ、即チ太子ガ其馬ト鞍トヲ埋メタマヒシ故跡ニシテ、塚ノ上ニ卒都婆ヲ立テ、供養セシガ故ニ、此地ヲ一ニ又卒都婆ノ里トモ謂フ。然ルニ此

卒都婆

馬ノ魂魄永ク留マリ、邑里ニ化現シテ人民ヲ惱マスコト甚シ。之ヲ患ヒテ天朝ニ奏聞スレバ、唯佛力ノミ其災ヲ止ムベシトアリテ、寶瑞寺ヲ建立シタマヒ、千僧ヲ聚メテ施餓鬼ヲ行ヒ且ツ馬千疋ノ布施アリ。乃チ後ノ例ト爲ツテ八月十五日ニハ此供養ガ執行ヘレ、年々馬千疋ノ用途ハトモ此地方ニテ調ヘヌ故ニ、太子ノ臣下ニ橋猪助法名ヲ道專ト云フ者、命ヲ蒙リテ奥州越路ニ下リ其馬ヲ集メタリ。道專ニ三人ノ子アリ。長男ハ太子ニ仕ヘ、次男ハ近江ニ下リテ右ノ施餓鬼ノ奉行人トナリ、更ニ奥ノ馬千疋ノ運上ヲ勤メタ

八月十五日

三人ノ子

馬醫ハ神

リト云フ。又一説ニハ、橋猪助ハ病馬ヲ治スルノ法ヲ太子ヨリ受傳ヘテ此村ニ居住ス。後ニ佐藤太郎兵衛入道多入ト稱セシハ實ニ此人ニテ、彦根ノ井伊家ニ奉公セシ佐藤宗兵衛ノ家ハ其子孫ナリト謂ヘリ〔淡海木間撰〕。今此縁起ノ中ニ、若シ眞實ノ部分アリトスレバ、ソハ佐藤ト云フ馬醫ノ家ニ太子ヲ開祖トスル馬ノ神ノ信仰ノ傳ヘラレシ事ト、其家ガ八幡堂ト結合シテ近村ヲ感化シツ、アリシ事グラキナルベシ。馬醫ノ神馬ニ隨伴スルコトハ古キ慣習ナリ。延喜式ヲ見ルニ、平野園韓神其他ノ官社ニ所謂櫪飼馬ヲ奉獻スルニハ、必ズ馬寮附屬ノ馬醫ヲ差添ヘタリシモノナリ〔左馬寮式〕。其目的ハ途次ノ急病ナドノ用意ノミトモ思ハレズ、何カ格段ノ仔細アリシコト、見ユレバ、神馬ヲ重要視セシ古代ノ信仰ニ馬醫ノ干與シタルモノト想像スルハ不當ニハ非ズ。但シ後世盛ニ馬ノ死靈ヲ説クニ至リテ、之ニ雷同スルコトハ馬醫トシテハ少々見徳ガ悪キ爲ニ、所謂白樂天ノ後裔ノミハイツ迄モ馬ノ死セザルコト、又ハ一旦死シタレドモ忽チ蘇生シタルコトナドヲ説キテ、彼等ガ地歩ヲ占メントセシナランカ。何レニシテモ聖德太子ガ、僅カナル因

縁ノ爲ニ馬ノ祖神トシテ擁立セラレタマヒ、其御馬ノ國々ヲ牽キ廻サル、ハ、思ノ外ノ事ナリケリ。

甲斐ノ黒駒

駿府ノ猿屋ガ秘傳ノ巻物、サテハ江州小野庄ノ馬醫佐藤家ノ由緒書ノ外ニモ、聖徳太子ヲ以テ馬ノ保護者トスル傳説ハ弘ク行ハレタリシガ如シ。古クハ天平神護元年ノ五月、播磨賀古郡ノ人馬ウマカヒノミヤツコトガミ養造人上ノ款狀ニ、此者ハ吉備都彦ノ苗裔、上道ミチノオミミヤノカサカサ臣息長借鎌ノ後ナルニ、其六世ノ孫牟射志ムサシナル者、能ク馬ヲ養フヲ以テ上宮太子之ヲ馬司ニ任ジタマヒ、此ガ爲ニ庚午ノ戸籍ニハ誤リテ馬養造ニ編セラルト稱セリ(續日本紀)。此君馬ヲ愛シタマフト云フコトハ久シキ世ヨリノ傳説ニシテ、難波ノ四天王寺ニ甲斐黒駒ノ影像ヲ安置シ(古記久安二年九月十四日條)、或ハ此馬ノ太子ノ御柩ニ殉ジタル物語ヲ傳ヘ(元亨釋書)、或ハ又秦川勝ガ黒駒ノ口ヲ取リテ太子ノ巡國ニ隨ヒマツリシ由ヲ言ヘリ(花鳥餘情)。而シテ猿屋ノ徒モ亦自ラ秦氏ノ末ナリト稱スルナリ。近世ニ及ビテモ大和ノ橋寺若狹ノ馬居寺ウマゴジ、安房ノ檀特山小松寺等、太子ト黒駒トノ關係ヲ語リ傳フル例

太子講

甚ダ多シ。東國ニテハ武藏甲斐ノ間ニハ太子講ト稱スル月祭アリ。常陸北部ニテハ太子塚ト刻セシ石塔到ル處ノ路傍ニ在リ。此モ亦馬ノ斃レシ跡ナドニ造立スルコト、馬頭觀音勢至菩薩ノ立石或ハ駒形權現ノ祠ナドト其趣ヲ一ニセリ。陸中岩谷堂町イハダグノ太子ノ宮ノ如キモ、亦馬ノ祈願ノ爲ニ勸請セシモノナルベシ。或ハ鎮守府將軍秀衡ガ奈良ノ都ノ佛ヲ移セントモ傳ヘラレ、其地ヲ片岡ト稱シ岡ノ片岨ニハ太子ノ宮ト竝ビテ又達磨尊者ノ社アリキ(眞澄遊覽記十)。後世ノ俗説ニテハ達磨ニ御脚ガアルモノカナド云フニ、時トシテ馬ノ神ニ祀ラル、ハ珍シキ事ナリ。猿牽ノ仲間ニ在リテモ家藝ノ祖神トシテ達磨ヲ祀レリ。彼等ハ或ハ太子ノ調馬術モ亦片岡ノ飢人ヨリ學ビ得タマヒシ如ク説クナランモ、ソハ信ズベカラザル後世ノ附會ニシテ、其根原ハ單ニ古代ノ駿馬傳説ガ聖徳太子ト云フ日本ノ理想的人物ト因縁ヲ有セシ結果ニ他ナラザルベシ。最モ古キ記述ニ依レバ、太子ノ愛馬ハ四脚雪ノ如ク白ク極メテ美シキ黒駒ナリキ。推古女帝ノ第六年ノ始ニ、諸國ヨリ獻上セシ數百頭ノ中ニ於テ、太子ハ能ク此黒駒ノ駿足ナルコトヲ見現ハシタマフ。同

黒駒巡國 少年ノ秋太子ハ黒駒ニ召シ、白雲ヲ躡ミテ富士山ノ頂ニ騰リ、ソレヨリ信濃三越路ヲ巡リテ三日ニシテ大和ニ歸ラセタマフ〔扶桑略記〕。甲斐ノ黒駒ハ此馬ノ名ニハ非ザリシモ、黒駒ハ夙クヨリ甲州ノ名産ニシテ、且ツ駿逸ノ譽高カリシモノナリ〔日本書紀雄略天皇十三年九月條〕。加之此毛色ノ馬ハ特ニ朝廷ニ於テ祥瑞トシテ迎ヘラルベキ仔細アリキ。例ヘ

祥瑞

バ聖武天皇ノ天平十年ニ信濃國ヨリ貢セシ神馬ノ如キハ、甲斐ノ黒駒ニヨク似テ更ニ髮ト尾白カリキ。其翌年ノ三月ニ對馬ノ島ヨリ獻上セシハ、青身ニシテ尾髮白シト見ユ〔續日本紀〕。此等ハ何レモ聖人政ヲ爲シ資服制アルノ御世ニ非ザレバ、現ハレ來ラザル馬ニテ、始ヨリ凡人ノ乗用ニ供スベキ物ニハ非ザリシナリ。故ニ世治マリ天下平カニシテ之ヲ大内ノ庭ニ曳クコトヲ得レバ好シ。然ラザルモノハ諸國ニ留マリテ永ク神遊幸ノ乗具ニ供セラレシナルベク、後世池月磨墨ノ二名馬ニ由リテ代表セラレシ二種ノ純色ハ、即チ馬ノ最モ神聖ナルモノト認メラレシ物ナルベシ。尤モ古史ニ見エタル神馬ト云フ漢語ハ、單ニ極端ニ結構ナル馬ト云フ意味ニ用キシモノカモ知レザレドモ、邊土ノ人々ニ至

神馬

リテハ終ニ之ヲ以テ神ノ馬又ハ馬ノ神ト解シ、或ハ木曾ノ駒ヶ嶽ニ於テ馬蹄ヲ印セシカトオボシキ土砂ヲ取還リ、或ハ樹ノ枝ナドニ懸リタル馬ノ尾ノ如キ一物ヲ持チ來リテ、厩ノ守護用トスル迄ニハナリタルナリ。

神馬足跡

對馬ヨリ出デタル神馬ノ足跡ハ、同國與良村大字豆岐内院宇神崎ノ馬下ト云フ海岸ノ巖ノ上ニ、數處一列ヲ爲シテ存在シ、此馬ノ洋海ノ出ス所ナルコトヲ暗示セリ〔津島記事〕。但シ馬下ノ「オロシ」ハ神ヲ降臨セシムルコトヲ意味スルカト思ハル。甲斐ノ黒駒ノ遺跡ニ至リテハ、太子ニ對スル崇敬ト伴ヒテ更ニ弘ク國內ニ分布セリ。先ヅ其本國ノ甲斐ニ於テハ、東山梨郡等々力村ノ萬福寺ノ門前ニ、太子ノ想ヒタマヒント云フ馬蹄石アリ。此寺今ハ眞宗ニシテモトハ天台宗、而モ聖德太子ヲ以テ開基トス〔本朝國語〕。四ツノ蹄ガ四ツナガラ鮮カニ現ハレ居ルト云ヘバ〔甲州嚙〕、勢ノハズミニ打込ミタルモノニ非ズシテ、靜カニ且ツ確實ニ印シタル痕跡ナリ。同ジク東八代郡日影村宇駒飼宿ノ駒飼石ニ至リテハ、五間ニ三間ノ石ノ面ニ二十一箇ノ足跡アリキ。上宮太子此地ニ於テ黒駒

馬蹄石

ヲ飼ヒタマヘリト傳ヘタリ。此石ハ享保年中笹子川ノ洪水ニ障リトナリテ多クノ民屋ヲ損ゼシヨリ、之ヲ割リテ川除ノ石堤ニ用キ〔甲斐國志〕、今ハ其片影ヲモ留メズ〔山梨縣市町村誌〕。其他東山梨郡加納岩村上下石森組ノ境、熊野權現ノ小山ニ馬蹄石、同郡松里村大字松里三日市場組ノ馬蹄石一名ヲ駒石、北巨摩郡穴山村字黑駒ノ駒形石、北都留郡初狩村下初狩組カンバ澤山ノ馬蹄石ナドアレド、何レモ聖德太子ノ傳説ヲ伴ヘズ。穴山ノ駒形石ハ黑駒大神ノ社頭ニ在レドモ、此神ハ大汝オホニヌメト建御名方トノ二尊ヲ祭り、昔諏訪ノ神黑駒ニ乘リ此地ニ來リタマヒシヨリ社ヲ立テ名ヲ定メタリト稱シ〔山梨縣市町村誌〕、初狩ノ馬蹄石ハ數多ノ馬ノ蹂躪シタル跡ナリト云フ〔甲斐國志〕。黑駒ガ聖德太子ノ知遇ヲ忝クセシト云フハ大和ノ朝廷ニテノ事ナリ。富士往來ノ三日ノ外、後ニ郷里ニ還リタリトモ見エザレバ、太子ノ口碑ノ甲斐ニ多ク存セザルハ寧ロ當然ナリ。黑駒終焉ノ地ハ河内南河内郡駒ヶ谷村大字駒ヶ谷ナリト謂ヒ、此村ノ金剛輪寺ハ亦太子ノ建立スル所ナリ。此谷ニモ黑駒ノ足形ノ石ノ上ニ遺ルモノナリ。之ヲ繫ギタリト云フヒトツヤ柵ノ樹ハ葉ノ端ニ刺

駒形石

降臨ト馬

黑駒ノ塚

無シ〔和漢三才圖會〕。攝津川邊郡長尾村ノ仲山寺モ太子創立ノ寺ナリ。境内ノ黑駒石ニハ四ツノ蹄ノ跡アリ。後世ノ爲ニスノ如キ奇跡ヲ留メシナリ〔攝陽雜談〕。大和ノ三井ノ法輪寺ノ巽ノ方ニハ、太子ノ召サレシ栗毛ノ駒ヲ葬ルト云フ栗毛ノ岡アリ〔大和國遊誌下〕。此ハ勿論黑駒トハ別ナルベキカ。播川斑鳩寺イカルササテノ壇特山ノ路ニ、御駒ノ蹄ヲ留ムト云フ岩アリシハ、是レ亦日本ノ太子ニ托シタル靈石ナルガ如シ〔朝風意林所錄斑鳩寺緣記〕。

神々降臨ノ跡 前ニ駒形ト云フ神ノ名ノ本意ヲ駒ノ足型ニ基ケリト言ヒシガ、此解釋ノ丸々ノ臆説ナラザルコトハ、甲州穴山村ノ駒形石ナド之ヲ證スルニ足レリ。遠江濱名郡龍池村大字八幡ノ八幡社ニ一ノ駒形杉アリ。元龜三年德川武田合戰ノ折ニ、白衣ノ老翁白馬ニ跨リテ此木ノ梢ヨリ空ニ昇ルト濱松勢ノ眼ニ見エタリ。軍終リテ後杉木ヲ檢スルニ、馬蹄ノ跡最モ明白ナリキ〔曳馬拾遺〕。即チ八幡大菩薩ガ未來ノ大將軍ヲ助ケラレタル證據ナリシナリ。相州足柄上郡岡本村大字駒形新宿ノ駒形權現ハ又足形ノ社トモ稱ス。神體ハ地上ニ二尺バカリノ一箇ノ岩ニシテ、其面ニ馬ノ足形アリ。足ヲ煩フ者ノ

駒形杉

足形ノ社

祈願スル神ナリキ〔新編相模風土記〕。土佐長岡郡西豐永村大字柳野字影ノ宮ノ神ヲ馬足大明神ト云フ。例祭ハ九月吉日〔諸神社錄〕、未ダ其由來ヲ知ラズ。更ニ一步ヲ進メテ馬頭觀音ヲ駒形ノ本地佛ト假定スルナラバ、武藏北足立郡平方村大字平方ノ孤峯山馬蹄寺寶池院ノ本尊ガ馬頭觀音ナリシ事實モ亦一箇ノ證ナリ。此寺ハ古クハ馬蹄庵ト稱シ、吾妻左衛門是好ト云フ芝居ニデモ出サウナ名前ノ武士ガ、其伯父三輪莊司ノ菩提ノ爲ニ建立セシ淨土寺ナリ〔新編武藏風土記稿〕。莊司死シテ後馬ニ生レ變リ、人ノ如ク物言ヘリトノ傳説モアレバ、此馬モ亦蹄ノ痕ヲ石ニ印セシコトナルベシ。長門大津郡深川村字江良ノ觀音石ハ、一間四方ホドノ石ノ面ニ圓相アリテ、其中ニ人ノ足ト馬ノ蹄多ク存セリ。昔ヨリ此石ヲ觀音ノ正體トシテ拜スト云ヘバ〔長門風土記〕、此モ亦一ツノ馬頭觀音ナリケリ。此等ノ事實ヲ考ヘ合ストキハ、駒形ハ即チ馬ノ足型ノコトニテ、神馬ノ奇瑞ノ顯著ナルガ爲ニ、特ニ馬ノ爲ノ祈願ニ有效ナリト考フルニ至リ、終ニ他ノ馬ノ生靈死靈ヲ祭ルノ信仰ト合體シタルモノナルベシ。

池

三輪

觀音石

圓相

白山權現

サテ當初駒ノ足跡ヲ崇敬スルニ至リシ動機ニ付キ、尙一段ノ考察ヲ試ミント欲ス。蓋シ駒形ハ元來定マリタル一種ノ神ノ名稱ニハ非ズシテ、實ハ各地ノ祭神ニ共通ナル威靈ノ徵ナリシヲ、特ニ之ニ由リテ神ニ名ヅケタリシ社ノミガ中ニ就キテ有名トナリシナリ。サレバ奥州又ハ箱根ノ駒ヶ嶽トハ些カモ關係無キ諸國ノ社ニモ、駒形石ノ少ナカラザルハ前ニ既ニ言ヘルガ如シ。江州愛知郡押立村ノ客人宮ハ押達莊マコトノミヤ十七郷ノ總氏神ナリ。此社ノ神ハ加賀ノ白山大權現ニシテ、往古神馬ニ召シテ此地ニ飛移リタマヘリトテ、社ノ近邊ヨリ森ノ北ヲ流ル、小川ノ岸ニ掛ケテ、其駒ノ足跡多ク殘存ス〔淡海木間撰〕。客人社ノ白山菊理比賣神ナルコト、及ビ此神ノ北國ヨリ飛ビタマヒシコトハ、共ニ日吉二十一社ノ古傳ノ中ニ見ユルコトニテ、ソレ故ニ客人ト稱スト云フ説アリ。而モ此押達莊ノ地ハ夙ニ日吉ノ客人社ノ所領ニシテ且ツ氏子ナリ。續古今集ニ載セラレタル押達宮奉納ノ歌ニ

爰ニ又宮ヲ分チテヤドスカナ越ノ白根ヤ雪ノフル里

トモアレバ〔地名辭書〕、右ノ縁起ノ如キモ恐クハ却リテ比叡ノ麓ヨリ飛移リシモノナルベシ。但シ日吉ノ本社ニ在リテハ未ダ馬蹄ノ傳説アルコトヲ聞カザルナリ。思フニ客人トハ即チ客神ニシテ元ハ外國ヨリ來リシ神ナルベシ。之ヲ白山ノ神ニ托セシハ深キ仔細ノアルコトナランモ、今之ヲ推測スルコト能ハズ。紀州ノ熊野、モ古キ神ナレドモ亦震且ヨリ飛來タマヘリト云フ説アリ〔靈臺内傳〕。東國ニ數多キ熊野ノ勸請社ノ中ニハ、馬蹄ノ口碑亦少ナカラザルコトナラン。自分ノ知レル限ニテハ、武州西多摩郡小宮村大字乙津ノ熊野神社ニ、鳥居場ヨリハ四五町ノ上手道ノ左ニ馬蹄石ト鞍石アリ。熊野權現馬ニ乘リテ此處ヲ通ラレシ折ノ跡ナリト云フ〔新編武藏風土記稿〕。山城男山ノ八幡ニ駒形神人ナル者ノ住セシコトハ前ニモ述ベシガ、此山中ニモ八幡神ノ神馬ノ足跡アリ〔神名帳頭注〕。八幡モ最初ハ白山熊野ト同ジク、遠方ヨリ降臨セラレシ神ナリ。遠江龍池村ノ八幡ニ駒形杉ヲ説クガ如キハ、或ハ戦後ノ人心ヲ利用シテ古縁起ノ燒直シヲ試ミタルモノトモ見ルヲ得ベキナリ。

客人權現
熊野

鞍石

繪馬
道祖神

諏訪白山熊野八幡等ノ神々ハ、假ニ最初ヨリ此國ノ神ニテオハセリトスルモ、或ハ都ニ上リ或ハ邊土ニ勸請セラレタマヒ、移動ノ特ニ烈シカリシ神々ナリ。併シナガラ神馬ノ入用ノ必ズシモ此旅行ノ爲ニ非ザリシコトハ、昔ヨリ如何ナル社ニモ神馬ヲ進獻シ、後世ニ及ビテハ其代リトシテ繪馬ヲ奉納セシ一事ヲ見ルモ明白ナリ〔夏山雜談一〕。道祖神ノ要害ヲ占據シ往來ノ人ト鬼トニ對シテ無形ノ關ヲ守ルノ職ヲ以テスルモ、猶板ニ描キタル繪馬ヲ大切ノ物ニシタマヒシコトハ、古キ民話ニモ見エタリ〔今昔物語十三等〕。又所謂國津神ノ部類ニ屬シタマヒ、終始一定ノ土地トノミ縁故アル神々ニモ、尙且ツ馬蹄石ノ傳説ハアルナリ。例ヘバ阿蘇ノ宮地町ノ鹽塚ト云フ處ニハ、田ノ畔ニ馬蹄石アリテ之ヲ阿蘇大明神ノ神馬ノ跡ト傳ヘ〔肥後國志〕、阿波美馬郡端山村大字西端山ノ馬ヶ岡ニハ、龍馬石ト馬蹄石トノ二箇アリテ、之ヲ天日鷲命ノ遺址ト稱シ〔燈下錄〕、出雲八束郡加賀村ノ海ニ臨メル巖窟ノ口ニハ、石上ニ馬ノ足跡ト馬槽ノ跡トアリテ、之ヲ出雲大神ガ龍神ニ乘リタマヒシ處ト傳ヘタリ〔出雲國懷橋談〕。茲ニ出雲大神ト謂フハ即チ古風土記ノ佐

龍神

鹽塚